

ソ聯邦百科大辭典版

363.31
H568r



00447121

歴史唯物論

附 スターリン著

辯證法的唯物論と歴史唯物論

廣島定吉譯

新興出版社





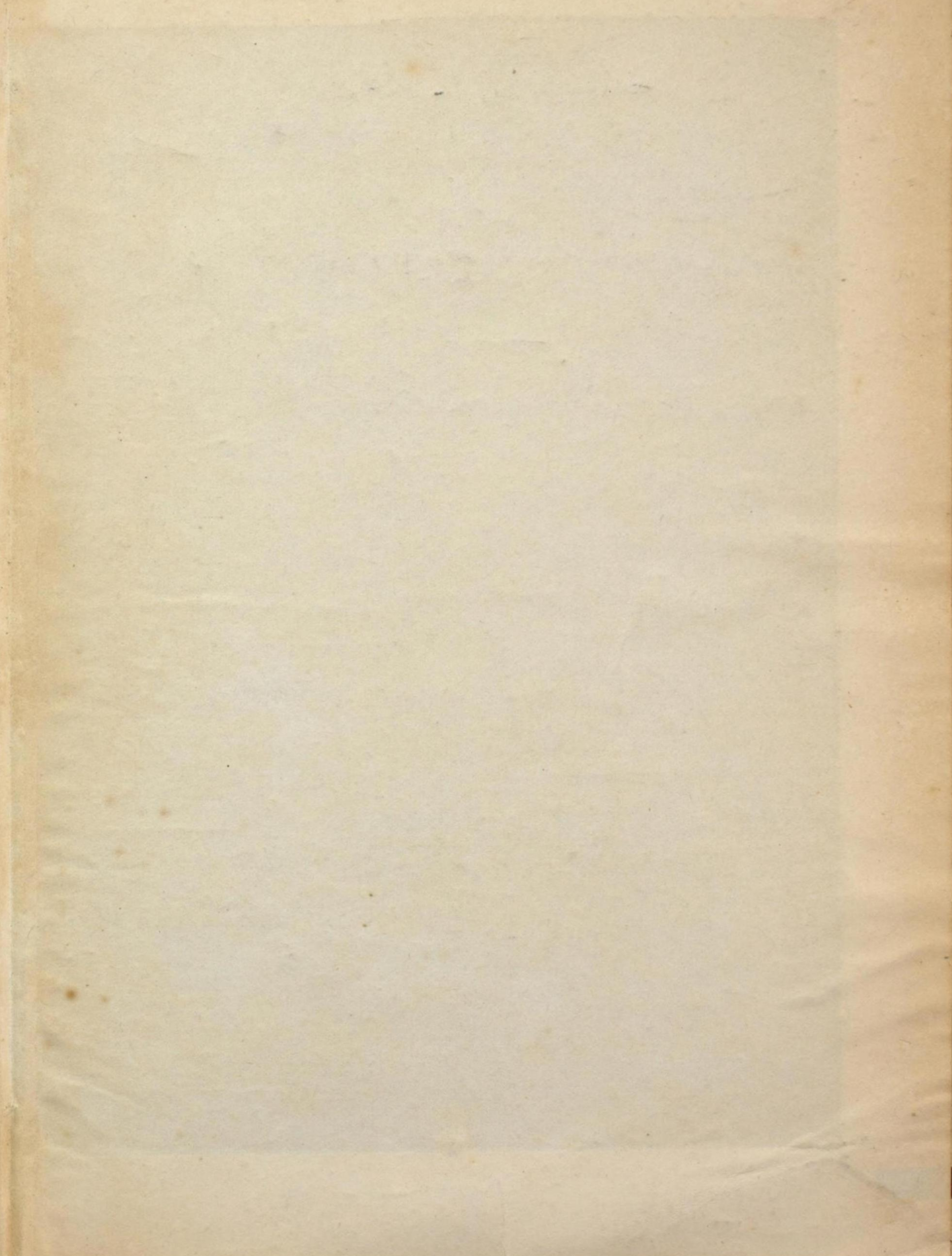
歷史眼物論

關於石印入紙的...

(一)

關於石印入紙的...

關於石印入紙的...



ソ聯邦百科大辭典版
廣島定吉譯

歷史唯物論

(附) スターリン 著
辨證法的唯物論と歷史唯物論

新興出版社

363.31

H568r



447121

譯者序

歴史唯物論は唯物史觀ともいひ、人類社會がどういふ風に進化發達してきたか、その發展法則を明かにし、この法則の認識に基いて、今後世界史の進み行く方向を示して、新興階級に行動の指南を與へるものである。

歴史唯物論は人智の發展史上で初めて世界史の運動法則を發見したのだが、これを發見するのに、何も高遠な原理をふりかざさず、歴史を至つてありのまゝに見て、極めて早近な事實から發足するのである。

歴史といへば結局人間の歴史である。人間のあなるところに歴史はない。ところで、その人間は生きてゆくためには食はねばならず、食ふためには物を生産しなければならぬ。政治といひ、文化といひ、藝術、宗教といつても、先づ衣食住が足りてから後のことである。歴史唯物論は、この極めて單純ではあるが、誰れにも分りきつた事實から發足して、人間の生産的行爲といふことを歴史研究の起點とするのである。

日本の軍國主義者は皇紀二千六百年などと謳つて、如何にも悠久たる神國の歴史かのやうに誇つたものだが、人類は數百萬年の長い長い進化の道を経て、類人猿から次第に今日の如き人類へと發達したのである。悠遠なる世界史の流れに比すれば、『皇紀二千六百年』はほんの一瞬間にすぎない。無限なる時間を有限に區切り、その有限の世界を絶對化するとは、反動思想家が好んで用ひる手である。人の歴史は今も尚ほ滔々として流れてゐるのであるから、日本史を單に孤絶的な獨自のものとして考へず、世界史今後の方向を見定め、世界思潮の流れに棹して誤らないことが肝要である。これまで、日本人には世界史の知識が足らなかつたために、日本史の一寸した特

殊性が大きさに吹聴され、世界史との統一は見失はれた。否、世界史との統一がわからなかつたために、却つて日本史、東洋史の特殊性が絶対視せられたのである。

歴史は神代史から始まるものでもなければ、人間が萬物の靈長であるから、人間にのみ歴史があるでもない、人間が他の動物と異なるのは、労働に依つて生活上必要な物を生産するといふことである。石器にしる、棒切れにしる、弓矢にしる、とにかく人間が労働用具を作り、これを用ひて物を生産するやうになつてから、人類はだんだんと動物の域を脱するやうになり、自ら歴史を創り始めたのである。

人類の歴史が數十萬年も續いて、今日の如き文明の世界となつたのは何故かといへば、後代の社會が前代から生産力を受け継ぎ、その生産力を自分の用に供しては、發達させてきたからである。だから歴史の運動法則を知るためには、生産力の増進といふことを第一に置かねばならぬ。生産力が物質的だなどと言つて侮蔑するのは、以ての外のことである。物質的生産力の發達しない國は、立ちどころに滅び去つてしまふのだから、何を措いても生産力を大事に育て上げてゆかねばならぬ。

しかし生産力を實現するためには、人間は他の人々と一定の關係を結ぶ。人間は一人一人が生産するのでなく、お互ひのために働き合ひながら生産するのである。ただ今日の資本主義社會では、この労働を中心とする生産關係が、人々の目に見えないだけのことである。働く人間はいつの時代にも生産力の第一の要素なのだが、資本主義社會では、その労働者は工場も機械も原料資材も自分で持つてゐないので、働くためには資本家に傭はねばならぬ。各國の國民經濟が一個の世界經濟に統一されてゐる今日では、一人の人の労働は地球全體の人口とつながつてゐるのだが、働く當人にはかういふ廣大な關係は意識されず、その生産關係は専ら傭雇關係としか見えない。しかし、どんな物の生産でも、古今に亘る無數の人類の労働の結果なのであり、世界人類の労働との關係がなければ、我々の生活は成り立たないのだから、かういふ觀點から、我々は世

界に對する見方を變へ、新しい世界史觀を養ふやうに努めねばならぬ。

歴史唯物論が人智の發展上にもたらした功績は、人類社會の發展法則を初めて發見し、歴史學を眞の科學となしたことである。人類は數十萬年の間歴史を作りながら、その歴史がどうして發達してゆくかを知らず、歴史の盲目的な力に支配されてきたのであるが、唯物史觀の發見によつて、人類は初めて歴史の法則を意識的に社會の進展に役立て得るやうになつた。人類社會の進歩發達のためには、何よりも先づ生産力の發展といふことが必要である。社會主義、共產主義といふも、今日生産力の發達に役立たなくなつた生産關係を變革し、生産力に對する支配權を一部少數の資本家の手から奪ひ返し、その生産力を出來るだけ發達させ、人類全體の無限の向上に資せんとするものに外ならない。

今日、政治家たらんとする者は、先づ社會の發展法則に關する知識を持たねばならぬ。歴史の論理を知り、その論理に従つて行動する人でなければならぬ。かくてその人の行動は歴史の推進力と一體となり、己れが歴史か、歴史が己れか、主客一如の心境が開けて、その人の一步一歩は歴史の論理を具現するものとなる。「我々の理論的思惟全體を絕對的に支配してゐるものは、我々の主觀的思惟と客觀的世界とは同一の法則に従つており、従つて兩者は結局は互ひに一致しなければならぬといふ事實である。この事實は、我々の論理的思惟の無意識的にして無條件的な前提たるものである」(エンゲルス)。歴史の客觀的法則を己が主觀的思惟に正しく反映して、歴史の法則を實現する先進階級と共に進み行く人には、一點の私心もある筈がなく、その人の行動は天地の公道に則つてゐる。新時代はかういふ型の政治家を要求してゐるのである。歴史の發展法則を知り、今日如何なる人間の集團が歴史を先きへ進めてゆくかを見きはめて、人類社會の向上に渾身の努力を捧げること、これこそ、新時代に生きる若き人達の人としての至高の務めである。歴史唯物論の方法を我が日本史の研究にどう適用するかは、今後に残された問題である。日本史の個々の領域については、相當に研究も進んでゐるのであるから、その成果をすべて取り容れ、

殊に世界史との聯關における日本史の特殊性を明かにしなければならぬ。我が國の歴史の具體的研究によつて特殊な發展法則を見出すことが望ましいが、それは同時に、今後歴史の推進力たるべき新興階級に進むべき道を指示するものでもある。新しい歴史觀を持ちたいと念ぜられる人々には、本書は何かを提供するであらう。

卷末にスターリンの筆に成る「辨證法的唯物論と歴史唯物論」を集録しておいたが、これは辨證法的唯物論と歴史唯物論を研究するための好個の手引である。政治家としてのスターリンは、同時に優れた哲學者であり、歴史事象の發展と相互聯關をよく見抜いた哲學者である。彼の打つ手は、歴史の論理と合致しており、彼の指向するところは、歴史の進むところである。我々はこの小冊子から理論の有する意義を學び、理論を如何に政治に適用すべきかを學ぶことが出来る。聞くところによれば、この小冊子はソヴェト聯邦において目下唯一の教材として廣く使はれてゐるさうであるが、もちろん、辨證法的唯物論と歴史唯物論の研究が、この小冊子だけで十分な譯はない。おそらくヒットラーの侵略に會つて、祖國防衛に全國力をあげて動員したために、辨證法的唯物論と歴史唯物論について新しい著作を書く邊がなかつたのだらうと思ふ。今後、ソ聯邦におけるこの領域の新しい研究を、私は刮目して待つてゐる。

一九四六年八月十九日

譯者識

目次

譯者序

第一章 マルクスおよびエンゲルス以前の唯物史觀の要素……………三

- 一 唯物史觀發見の意義……………三
- 二 アリストテレスにおける唯物史觀の要素……………五
- 三 十七八世紀ブルジョア思想家の歴史觀の根本缺陷……………八
- 四 十七八世紀歴史觀念論の進歩性……………三三
- 五 空想社會主義者における唯物史觀の要素……………二六
- 六 王政復古時代の歴史家たちと英國古典經濟學派……………三
- 七 ヘーゲルの歴史哲學……………三三
- 八 フォイエルバッハ……………三六

第二章 唯物史觀の問題に關するマルクスおよび

エンゲルスの見解の形成……………三

一 歴史唯物論の形成過程……………三

二 唯物史觀の生誕……………四

第三章 辨證法的唯物論と唯物史觀……………五

一 唯物論の社會現象への擴大……………五

二 社會學研究の起點……………五

三 辨證法的社會觀……………五

第四章 社會的法則性の問題……………三

一 社會的法則と自然的法則……………三

二 社會發展の一般法則と特殊法則……………三

第五章 社會科學および革命運動の方法としての

歴史唯物論……………八

一 歴史唯物論とその他の社會科學……………八

二 歴史唯物論と歴史との關係……………八

三 實踐的行動の方法としての歴史唯物論……………九

第六章 構成態、生産様式、生活様式……………七

一 社會的經濟構成態の規定……………七

二 生産様式……………一〇

三 原始共産制構成態……………一〇

四 奴隸制構成態……………一一

五 封建制構成態……………二四

六 資本主義構成態……………二七

七 共產主義構成態……………二九

八 構成態と生活様式……………二三

第七章 社會發展の原理……………二六

一 世界史の統一と生産力……………二六

二 技術と生産力……………二三

三 生産力の發展形式としての生産關係……………二五

四 社會的發展の起動力としての生産力と生産關係との矛盾……………二四

五 敵對的構成態の發展および變遷の法則としての階級闘争……………二九

第八章 レーニンおよびスターリンと歴史唯物論の發展……………二六

附

スターリン

辨證法的唯物論と歴史唯物論……………二〇二

歴史唯物論

第一章 マルクスおよびエンゲルス以前の

唯物史観の要素

一 唯物史観發見の意義

唯物史観(又は歴史唯物論)の發見はマルクス及びエンゲルスの偉大なる功績の一つであつた。

「ダーウィンが有機界進化の法則を發見した如く、マルクスは人類史の發展法則を發見した」。(一) マルクスの發見したものは、「人間は政治や學問や藝術や宗教等々にたづさはる前に、何よりも先づ、飲み食ひ、住居を構へ、着物を着ねばならぬ、従つて物質的生活資料の直接の生産、それと共に、或る民族乃至或る時代の各所與の經濟的發展段階が、當該人類の國家制度や法律觀、藝術、あまつさへ宗教觀念の發達の基礎をなし、従つてこれらのものは、この基礎から説明されるべきで、從來なされたやうに、その逆であつてはならぬといふ單純な事實がこれである。この單純な事實は、これまでイデオロギーの霞に深く包まれてゐたのである。」(二) 唯物史観が發見されたために、「從來歴史觀や政治觀に専ら行はれてゐた混沌と獨斷とは、如何にして社會生活の一つの

制度から、生産力の發達の結果として、他のより高次の制度が發展するか、例へば、農奴制度から資本主義が起るかを示すところの、驚く程完全な、整然たる科學的理論によつて置き代へられた。^(三)

(一) エンゲルス「マルクス葬送の辭」マルクス・エンゲルス二卷選集、ナウカ社版、上卷、十六頁。

(二) 同上。

(三) 同上 五九頁。

歴史唯物論發見の最大の意義は、そのために、人類史の全進行に關する唯一の科學的説明が始めて可能となつたことである。だが歴史唯物論は、マルクスによれば、單に人類史の進行を説明するばかりでなく、労働者階級に對し、「彼等自身の境遇と要求を理解し、彼等自身の解放の諸條件を理解すること」(エンゲルス)を教へたのである。唯物史觀は大衆の間に普及して、社會關係を變革改造する批判的な革命力となつた。かくして歴史唯物論の發見のために、人類史上に初めて人類史全體を説明する眞に科學的な理論が作り出され、これに基づいて、科學的に基礎づけられた人類史變革の理論が作り出されたのである。

二 アリストテレスにおける唯物史觀の要素

社會的歴史的發展の法則性を説明せんとする試みは、マルクス以前にもあつた。例へば、ギリシアのアリストテレス、十四世紀にはアラビアの思想家、イブン・カルヅン、十七世紀にはホッブス、十八世紀の初めにはヴィコその他がさうであつた。以上すべての思想家たちは、人類社會の歴史を支配する法則の解明を、社會科學の根本課題の一つと考へ、何らかの形で社會的法則性の問題を提出し、且つ解決しはしたが、しかし彼等はみな社會生活の説明ではどこまでも觀念論者だつたので、社會進化の現實の進行、その現實的な法則性を發見するに至らなかつた。ただ唯物史觀が發見されて、觀念論が歴史から放逐されると共に、茲に初めて社會思想上に根本的な變革(コペルニクスの轉換にも等しい)が行はれ、眞に科學的な社會的歴史的世界觀が作り出された。ブルジョア社會學的思想は、その發展の古典的な向上期においてさへ(中世紀との闘争で一定の積極的役割は果たしたが)、唯物史觀にまでは進み得なかつた。

古代世界の思想家のなかで、唯物史觀の要素が特に際立つて表現されてゐるのは、アリストテレスの社會的歴史の見解である。國家形態の差異を、アリストテレスは、先づ第一に人々の財産

不平等と階級闘争とから説明してゐる、國家を構成する多數の家族のうち、「或る者は豊かで、或る者は貧しく、或る者は中位の財産を所有してゐる。平民は平民で、百姓や商人や手工業者から成つてゐる。高貴な人々も、やはり富の程度を異にしてゐる。」^(一)統治形態は、先づ第一に、如何なる社會群が權力を握つてゐるかによつて區別される。アリストテレスはデモクラシーと寡頭政治とに特別に觸れて、次のやうに指摘してゐる。「寡頭政治とデモクラシーとの差異の本當の標識となるものは、貧富の差である。されば、權力が——少數者が多數者かはどうでもよい——富を基礎として居れば、それは寡頭政治であり、無産者が支配しておれば、それはデモクラシーである。」^(二)デモクラシーの各種形態も、民衆（無産者）の如何なる階級、百姓か手工業者か日傭人のいづれが優勢であるかによつて、それが制定される。^(三)帝王權にしても、それは「民衆から特權階級を擁護するために」發生したものであり、帝王はこの特權階級の中から任命される。^(四)

(一) アリストテレス「政治學」露譯一五五頁。

(二) 同上、一一四頁。

(三) 同上、一八四頁。

(四) 同上、二四五頁。

統治形態を階級の存在および階級闘争と結びつけんとする以上の試みは、當時にとつては天才

的なものであつたが、その外に、アリストテレスにあつては、國民生活における經濟的發達の役割と意義とが處々に力説されてゐる。原始共產態の最初の發展段階——家族——では、交換の必要はまだ起らなかつた。交換なるものは、一個の大家族が分れて、幾つかの家族となり、これらの家族が、足りない物を必要とするに至るときに初めて發生するが、しかし、交換はこの發展段階では、當面緊急なる日常欲望を満足させるだけである。交易から「身代を作らんとする術」が發達し、その後で、交易が生んだ必要から貨幣が發生した。^(一)

(一) 同上、二三—二六頁。

マルクスは「資本論」の中で、アリストテレスの著書にある歴史唯物論の個々の要素、又は歴史唯物論に接近してゐる點を一再ならず力説してゐる。「アリストテレスの天才は、商品價値の表現中に、同等關係を發見した點に閃いてゐる。ただ、彼が生活してゐた社會の歴史的限界のために、この同等關係が「たい『現實に』どこにあるかを見出すことが出来なかつた。」^(二)他の箇所でもマルクスはアリストテレスから次の如き文句を引用してゐる。「古代最大の思想家だつたアリストテレスは夢想した——もしすべての道具が、かのデダラスの作品が自ら運轉し、エフェストスの三脚椅子が自ら進んで神事に従事したやうに、命令に依るか、又は自ら豫知して、當然なすべ

き仕事を果すとすれば、即ち梭が自ら機織をすれば、親方は助手を必要とせず、主人には奴隷が要らないだらう。^(三)

(一) マルクス「資本論」第一卷アドラッキー版六五頁、改造社版第一卷三〇頁。

(二) 同上、アドラッキー版四二八頁、改造社版第一卷三九一頁。

しかし、アリストテレスの個々の言説や臆測が、如何に天才的であつたとしても、彼の社會的歴史觀は實は觀念論的であつた。

三 十七八世紀ブルジョア思想家の歴史觀の根本缺陷

中世紀となつて、古代の思想家たち（ツキデデス、アリストテレス、ポルピアスその他）の著作に見られた、社會的歴史的知識の要素は萎んでしまつて、キリスト教的神意説、すなはち、人類や民族の歴史的運命を支配すると云はれる、神の攝理に對する信仰に席を譲つた。ブルジョア社會學思想の覺醒は、學藝のルネッサンス時代と時を同じうしてゐる。新興ブルジョアジの理論的代表者は中世との鬭争において、理論上の中心問題の一つとして決定論の問題を提唱した。すなはち、人間の行爲なり、民族の歴史的生活なりは、偉人や帝王や皇帝、又は神の選んだ民族を

通じて、豫定の目的を實現する神の攝理の結果ではなく、自然法則に従ふ人間自身の活動の結果だと見られるやうになつた。自然科学の發達にあづかつて多大の力のあつた、諸現象の嚴格なる因果性といふ機械的に解釋された原理が、社會現象の領域にも、人間の行爲の上にも押し擴げられた。自然法の學説は、社會學的思想の發達に大きな刺戟を與へ、封建的秩序との鬭争において、且つまたブルジョア制度の「自然性」「永遠性」および「合理性」を基礎づけるために、その理論的武器となつた。しかしながら、マルクス以前のすべての思想家たちの社會的法則觀そのものには、まだ幾多の重要な缺陷がつきまとつてゐた。先づ第一に、彼等のすべては社會現象を説明するに當つて、根本的には觀念論の立場に立つてゐた。

「歴史の領域では、舊唯物論は、歴史上に作用してゐる觀念的衝動力を、事件の究極原因と決めてかかつて、その背後に何が根ざしてゐるか、この觀念的衝動力はそもそも何かを研究しなかつたために、自らを裏切つた。觀念的衝動力の存在を認めてゐる點が不徹底なのではなく、それに立ちどまつて、さらに突き進んで行かず、この衝動力を生み出した原因を究めない點が不徹底なのである。^(四)」自然的な永久不變の「性質」を有する人間は、同じ法則に従ふ自然の一部として考慮された。理想的な社會制度は、人間性に從つて、理性の命ずるところに從つて建設されねば

ならぬ。「すべて従来の社會形態も、すべての傳統的な概念も、非合理的なものと認められて、塵芥のごとくに捨て去られた。世界はこれまで偏見にのみ導かれてゐた。一切の過去は憐憫と侮蔑、^(三)とにしか値しない。」その謂ゆる合理的な社會政治制度なるものは、事實上はブルジョアジの理想化された天國にすぎなかつたが、人間の永久不變なる「自然的本性」に従つて建設さるべきものである。十七八世紀のブルジョア思想家たちは、この「人間性」の解釋を異にしてゐたにも拘らず、理想社會の建設といふ點では、彼等はみな一致してゐた。「人間性」といふ概念は、ブルジョアの、ブルジョア社會の個人の模寫であるか、又は理想像であつた。新興ブルジョアジのイデオログたちは、社會政治的現象を説明するのに、感情や利害を具へた「人性」から出發して、「觀念的衝動力」以上には深く進まず、この衝動力の物質的根元や原因を明かにせず、歴史の上では觀念論の立場に踏みとどまつてゐた。

(一) エンゲルス「フオイエルバッハ」、マルクス・エンゲルス二卷選集第一卷、ナウカ社版四七九頁。
(二) エンゲルス「アンチ・デューリング」岩波文庫上卷六八頁。

十八世紀のフランス唯物論者たちは、人類の歴史全體を誤謬と無知の結果だと考へ、人間が彼等自身の本性を知らない結果だとなした。フランス唯物論者たちは、意見が世界を支配するといふ觀念的立場から發足し、他方では、環境が意見を決定するといふ反對の事を主張して、のつび

きならぬ矛盾にひつかかつた。フランス唯物論者たちは、このどうどうめぐりから脱する事が出來なかつた。國民や人類の生活を地理的條件から、先づ第一に氣候の影響(例へばモンテスキュ)から説明せんとした思想家たちでさへ、すべてのブルジョア思想家に共通なる歴史觀念論を克服し、歴史の上で唯物論の立場を採るに至らなかつた。社會現象の自然主義的説明は、地理的環境の直接の影響を以て、人間の性格や行爲、並びに社會全體の組織を規定する原因と見做し、歴史觀念論と緊密に結び合つてゐた。すなはち歴史觀念論は、社會的存在や國民生活の物質的條件ではなく、國民性や國民道德、謂ゆる國民の「一般精神」を、社會的政治的事象の起點として取り上げるのである。尤も、國民の「一般的精神」、その法則も、社會學上の地理學派の代表者の主張するところでは、地理的環境の特定の條件に制約されてゐるが、社會生活そのものは直接「國民精神」に制約されると云はれてゐる。謂ゆる進歩論の信奉者たち(カント、ヘルデル、チュルゴ、コンドルセその他)も歴史觀念論の立場を出なかつた。すなはち自然現象は、永久不變なる法則に従ひ、「常に一樣なる變化の循環」(チュルゴ)を繰返すのみであるが、これと違つて、人類の歴史なるものは、ますます大なる完成へと向ふ悠大なる漸次的前進をなしてゐると考へてゐたのである。ところで彼等が、人類の前進的運動の究極原因と見做したものは、人類の精神的本

性の完成、知識の進歩といふことであつた。

十七八世紀の思想家たちの觀念論と密接な關係のあつた、彼等の社會歴史觀のもう一つの根本的缺陷は、社會現象に對する機械的見解であつた。當時、すべての科學のうち最も發達してゐたものは、地球および天體の力學であつた。この力學に支配する法則が普遍化されて、數學的力學思想の侵潤した、あらゆる科學領域の上に移された。社會政治的現象の分析において出發點とされたものは、自己保存慾から發する不變の本能を有する個人であつた。「十八世紀の豫言者たちの頭には……この十八世紀の個人——それは一面では封建的社會形態の解體の所産であり、他面では十六世紀以來發達した新しい生産力の所産である——が理想として浮び、而してこの理想の存在は過去のものとされた。即ち、かかる個人が歴史の結果でなく、むしろ歴史の起點と考へられたのである。」⁽¹⁾社會的全體は、その構成要素たる個人の算術的總和として考察され、この全體の中で、諸種の社會力、即ち、人々の情熱や志向の間に或る均衡が確定されるものとされた。かうした機械的な原子論的ブルジョア社會觀の上に、十七八世紀の一切の「社會契約」説、特にルソアの學説が築き上げられた。かうした社會觀の社會的政治的意味は、ブルジョアが「自由なる（封建的束縛から解放された）個人」のために、この個人に經濟的活動の絶對無拘束なる自由を

附與するために闘つたところにあつた。

(一) マルクス「經濟學批判序説」、改造社會全集第七卷三八四頁參照。

十七八世紀の思想家たちが社會現象の研究に對して、形而上學的な立場を採つたことも、社會的法則性の自然主義的な機械論的解釋と密接な關係があつた。それぞれの思想家に見られる個々の推測は別として、進化の思想は大いに十七八世紀にはまだ知られてゐなかつた。「歴史の領域では、事物に對する歴史の見解が缺けてゐた」(エンゲルス)。十七八世紀の思想家たちは、人間を以て自然全體と同じ法則に従ふ自然の一部と見做し、社會の自然的秩序を以て、自然そのものの秩序と同じく不變なる確固不動のものと考へてゐた。かかる見解に應じて、社會的政治制度を變革改造すべき課題も、謂ゆる哲學者が人間の本性を發見認識して、その知識に基づき、立法者によつて實現される適當な社會的政治制度を示せば、それで萬事が片づいたのである。かういふ社會史觀は觀照的な性格を帯びてゐて、社會的物質的實踐を無視し、社會發展の起動力として、國民大衆の闘争や、階級および政黨の重大な役割を理解するに至らなかつた。

四 十七八世紀歴史觀念論の進歩性

以上が十七八世紀の思想家たちの社會的歴史觀の根本缺陷であつた。それらの思想家の一人として、彼等自身の階級的限局性とその時代の知識の限局性とのために、唯物論的な歴史觀を與へたものではなく、社會現象の質的特性を發見したものはなかつた。だが、社會現象の領域における彼等の觀念論は、特殊な性格を帯びてゐた。現代ブルジョア社會學の觀念論とは違つて、十七八世紀の思想家たちの觀念論は、次の如き本質的な特徴を持つてゐた。(イ)、その歴史觀念論は、人間の精神的本性、人間の行爲、社會力の第一次的基礎としての情熱の合法則性について、自然主義的解釋と密接不可分に結びついてゐたといへ、實は神學および宗教的形而上學に反對したものであつた。それは神學を眞向から否定するか(フランス唯物論者たち)、さうでなければ、封建的な宗教的形而上學の基礎を打ち破つて、ブルジョアジの欲求に應じた(カント)新しい哲學的基礎を作り出したのであつた。この歴史觀念論の哲學的基礎は、十七八世紀の思想家の大多數の場合に機械的唯物論であり、この機械的唯物論が歴史の領域で、論理的必然性を以て、社會現象に對する自然主義的機械論的見解の結果として觀念論となつたのである。(ロ)、十七八世紀の歴史觀念論は、新興ブルジョアジが封建的秩序と闘ひ、ブルジョア制度の「合理性」と「自然性」を基礎づけるに當つて、彼等の理論的武器となり、一の進歩的な役割を果した。(ハ)、最後

に、この歴史觀念論の個々の代表者たちには、唯物史觀への或る種の接近、唯物史觀の若干の要素があり、しかもこの要素は、封建社會の胎内における階級闘争の尖鋭化とつながり、ブルジョアジが何らかの形で封建的秩序に對して行つた、その闘争と關係があつた。この闘争の理論的普遍化を基礎として、ブルジョアジの個々の理論家たちは、階級闘争と法制的および政治的形態との聯關といふ思想にまで達し、歴史的事象を、經濟的に説明せんとする企圖へ向つたものもゐた。例へばマキアヴェリは、イタリアの國家および古代ローマの歴史を分析して、國家形態および法律形式の變遷を封建貴族と「國民」との闘争と密接に關聯させて研究し、しかも彼は貴族およびカトリック教會を以て、イタリアの衰微、市民的不平等、住民の美德の衰頹や道德頹廢の根本原因と見做した。周知の通り、マルクスはマキアヴェリの著作を高く評價し、「フロレンス史は傑作だ」と云つてゐる。マキアヴェリの「君主論」から書き抜いたマルクスの青年時代の手記の大部分は、階級闘争の問題や、それと政治形態との關係、革命的暴力の意義、政治と經濟との關係に關するものである。

(一)一九五七年九月二十五日エンゲルス宛マルクスの手紙、改造社版全集第十八卷一二二頁。

ヴィヨは、階級闘争と法制的および政治的形態との關係を一層はつきりと述べてゐる。ヴィヨ

にあつては、階級的集團的闘争は、國家形態および法律形態の制定に對し決定的な役割を演ずるものである。尙ほ彼には、歴史的事件の經濟的説明の萌芽も見られる。ヴィコは人類の歴史を三大時代に區分してゐる。

(一) 神代、原始野蠻時代で、この時代にはまだ階級も國家もなかつた。(二) 英雄時代、貴族的封建制度の時代。(三) 人間時代、市民的政治的平等の時代、この時代の終末には、道德の頹廢と淫蕩の結果として、再び野蠻時代に陥り、潑刺新鮮なる野蠻民族が國を征服し、新しい發展期が始まる。この見地から見るときは、歴史は一の循環をなし、循環を反復する向上と退歩との變遷となる。西歐諸民族は、ギリシア人やローマ人と同じところから再び始め、同じ根本的な段階を通過しなければならぬ。一の段階から他の段階への推移に當つて決定的な役割を演ずるものは、ヴィコに従へば、經濟的利害に基づく集團的階級闘争である。

フランス唯物論者のうち、唯物史觀への或種の接近が認められるのは、殊にエルヴェシウスと彼の後繼者たちの場合である。エルヴェシウスは感覺を我々の凡ゆる知識の源泉と認め、人間の感情や思想は外部の環境に制約され、従つてまた社會における人々の境遇、特定集團への所屬關係等々に制約されると見做し、人間の考へ方や道德は、彼等の利害に左右されると主張して、唯

物史觀の方へ數歩を進めてゐる。マルクスは特にかう言つてゐる。即ち、エルヴェシウスにあつては、唯物論が「直接に社會生活に適用されてゐる」(エルヴェシウス「人間論」)。感銘、自愛、享樂、正當に理解された私利が、道德の基礎であると。しかし、大たいにエルヴェシウスも歴史觀念論を克服するに至らなかつた。人間は環境の産物であるといふ、十八世紀の唯物論的定理を一層徹底的に奉じてはゐるが、エルヴェシウスもやはり他のすべてのフランス唯物論者並に、社會的環境そのものが意見の所産であり、眞の社會力とは情熱であり、社會は立法者の創造した人爲的形物であり、しかも國民および國家の安寧幸福は、人性に關する知識を基礎とする、その立法の完全如何に懸つてゐると見做した。

唯物史觀の要素は、十八世紀のフランス・ブルジョア革命と王政復古時代におけるブルジョア思想家の學說に一層明瞭に現れてゐる。この時代におけるブルジョアジの理論的代表者たちは、封建貴族に對する第三身分の階級闘争を理論的に基礎づけ、ブルジョア制度の歴史的必然性と進歩性を證明しなければならなかつた。チュルゴ、ネッケル、重農學派(ケネー)には、階級および階級闘争に關する觀念が見られる。エルヴェシウスの社會的政治的學說における唯物論的傾向、ことに、政治形態の變遷が各種の社會集團や階級の(手工業の發達や人口増加に伴つて起

る) 闘争に密接に依存するものとなし、人類社會の歴史的発展の一般像を描き出さんとした彼の試みは、ボルネイやアンチュアン・バルナフその他の著作において一段の發展を見た。

アンチュアン・バルナフの著書には、唯物史觀の要素が特に明瞭に現れてゐる。バルナフは人類の歴史を各種所有形態の變遷といふ見地から考察し、さうして彼は、この所有形態を法制的規範に確認された財産關係だと言つてゐる。人類史の黎明期——民族デモクラシーの時代——には、人間はまだ殆ど所有といふことを知らなかつたが、その後、牧畜業へ移ると共に(人口増加の結果として)財産が発生し、それと共に政治制度が成立した。人口がさらに増加して、農業時代となり、土地の私有が起り、この私有に應じて、政治の領域に土地貴族の支配が成立した。しかるに手工業および商業發達と共に、富の新しい分配が起り、これがまた權力の新配置をきたした。土地領有が貴族を出現させたやうに、工業財産は國民の權力を高め、國民はその自由を取戻して、政治を動かした。即ちバルナフは、いろいろな所有形態の變遷について階級闘争(貴族政治とデモクラシー)を重要視してゐる。

五 空想社會主義者における唯物史觀の要素

社會進化における階級闘争および經濟の意義と役割とに重きを置くことは、空想社會主義者の學說に特に鮮明に現れてゐる。エンゲルスは科學的社會主義生誕の一つの源泉として、サン・シモンとフーリエおよびオーウエンの空想社會主義をあげてゐる。サン・シモンは根本的には歴史において觀念論的立場をとつてゐた。彼が社會進化の根本原因となしたものは、三つの進化段階(神學的、形而上學のおよび實證的)を次々に通過する人智の進歩であつた。しかし、この觀念論的學說には、唯物史觀の要素がはみ出してゐる。サン・シモンは、人智の進歩によつて決定される經濟發達そのものは、今度は政治制度の變遷を制約し、規定すると考へてゐた。例へば、武門の凋落と産業家の成長とを、サン・シモンは、財産が一方から他方の手に移つて行つたといふことから説明し、この際、産業家の政治的勢力は、彼等の經濟力の不斷の増進につれて成長して行つたと言つてゐる。サン・シモンは、産業家と封建領主との二つの社會階級の闘争を以て、十五世紀以來の歴史的過程の主要内容と見なした。空想社會主義者たちは、ブルジョア啓蒙家や歴史家や經濟學者とは違つて、封建領主とブルジョアジとの對立抗争の外に、第三身分内部の新しい對立、ブルジョアジとプロレタリアとの闘争をも指摘した。サン・シモンは晩年の著作で、ブルジョア社會中の「最も數の多い」、「最も貧しい」階級の見地に立ち、社會が新しい社會的政治

的制度へと移りゆく、その必然性を證明してゐる。

フリーエはブルジョア制度と文明、特に商業を辛辣に批判した。

すべて従來の人類史の進歩を、彼は四つの進化段階に分けてゐる。蒙昧期、野蠻時代、家長制度、文明といふのがそれである。さうして彼の謂ゆる文明とは、十六世紀以降のブルジョア制度のことである。フリーエはブルジョア文明を「詐欺のからくり」と同一視し、「ブルジョア世界の物質的および道徳的貧困を忌憚なく暴露し」、文明時代には「貧乏が過剰そのものから生み出される」ことを指摘した。「一定社會における婦人解放の程度は、一般的解放の自然的尺度である」とは、彼が初めて道破したところである。

(一) エンゲルス「アンチ・デューリング」岩波文庫下巻一六七頁。

(二) 同上二六八頁。

(三) 同上二六八頁。

もう一人の偉大なる空想社會主義者——オーウエン——は、共產主義の運動を労働運動の現實の生きた形態と結びつけた。ロバート・オーウエンは、「人間の性格は、一方では、有機體に遺傳する交互作用の産物であり、他方では、殊に發育期における環境の産物である」といふ、十八世紀

の唯物論學說から出發して、實際に社會關係の改革に着手し、私有財産、宗教、現在の結婚制度は、社會改革への道を阻む三大障害となして、これに反對し、階級差別の撤廢と共產主義的社會改造の幾多の案を作成した。しかし空想社會主義者たちは、歴史の領域ではあくまで觀念論者であつて、社會主義の實現をプロレタリアの階級闘争と結びつけず、社會主義とは、個々の思想家が誤れる人類に啓示し、上流階級の慈善と協力によつて平和に實現される、或る絶對的な眞理だと考へてゐた。

六 王政復古時代の歴史家たちと英國古典經濟學派

階級闘争といふ思想と、歴史における經濟的要因の役割と意義を重要視することは、王政復古時代のフランスの歴史家たち(ティエリ、ギゾー、ティエル、ミニエその他)の著作にも或る程度に表現されてゐる。王政復古時代の歴史家たちの、階級および階級闘争に関する見方は、極度に狹隘なものであつた。彼等は、フランスの歴史を説明する鍵を、先づ第一に、ブルジョアと封建領主との闘争に求めながら、同時にこの闘争を歪めて描き出した。彼等は、一方では、この闘争を征服民族フランク人(貴族の祖先)に對する被征服民族、ゴールローマ人(第三身分の祖

先)の一般民族的闘争として敘述し、他方では、第三身分そのものの内部の闘争、即ちブルジョアとプロレタリアとの闘争が問題となるや否や、「國內の平和、各市民階級間の平和、社會的平和」(ギソー)を説法した。

歴史唯物論の準備のために極めて重大な役割を演じたのは、英國の古典派經濟學者たちで、彼等はブルジョア經濟諸關係の分析に基いて、十八世紀の思想家たちの自然主義と合理主義を克服せんとしたのである、周知の通り、夙に十七世紀の後半期に、イギリスの經濟學者ウイリアム・ペティは、貨幣でなく労働が、社會の富の基礎であると主張した。價值、餘剩價值、價值と價格との差異等々の問題に關するペティの大膽な思想は、イギリスの經濟學者たち、特にアダム・スミスとダヴィッド・リカルドとがこれをさらに一層發展させた。スミスとリカルドとは經濟制度を研究して、労働價值説の端を開いた。リカルドの主張するところによれば、「ブルジョア制度の生理學——その内的な有機的聯關と生命過程の理解——の基礎、起點は、價值が労働時間によつて決定されるといふことである。リカルドはそこから發足して、この科學が舊習を捨て去り、その科學が展開したその他の範疇——生産關係と流通——が、どれほどこの基礎、この起點に一致するか、それとも矛盾するか、これをはつきり見定めることを科學に要求する——この點にこ

そ、この科學に對するリカルドの歴史的な意義が存する」

(一) マルクス「剩餘價值學說史」第二卷改造社版、第九卷一八頁。

七 ヘーゲルの歴史哲學

丁度ヘーゲルがブルジョア哲學の古典時代を完成したやうに、リカルドはブルジョア經濟學の古典時代を完成したのである。

マルクス以前の社會學思想の以上の代表者たちは、根本的には觀念論的歴史觀の立場にあつたが、彼等の學說には、唯物史觀への或る程度の接近があり、或る種の「合理的核心」が見られる。そしてそれは、先づ第一に、歴史における階級闘争の役割と意義とを力説し、法制的および政治的形態が階級闘争および經濟的發展に強く依存してゐる事實を確定したその點にあつた。しかし、個々の天才的な推測にも拘らず、これらの思想家たちは社會進化の原理を理解するに至らなかつた。なるほど、或る思想家(進歩論を奉じてゐたアシツアン・ベルナフその他)には、社會進化といふ理念を否定した十八世紀の合理主義的學說を克服し、人類史を反復する循環の如く考へてゐた循環論(ヴィコ、カムパネラその他)を克服せんとする試みは見られたが、しかしこれ

とても發展を漸次的な量的増減と見る形而上學的進化論以上には出でなかつた。觀念論を基礎としたものではあつたが、辨證法的發展といふ觀念を初めに意識的に定式づけた人は、ドイツの哲學者ヘーゲルであつた。ヘーゲルが彼以前の思想家たちよりも優れてゐた點は、先づ第一に、社會現象を歴史の見地から取扱ひ、辨證法の原理を社會關係の領域の上にも擴大して、社會的發展の内的法則性を發見せんとしたことである。この點では、ヘーゲルは十八世紀の合理主義的理論以上に抜んでゐた。ヘーゲルは次の如く主張した——世界史において人々は「己が利害の満足をとげんとするが、そのためにそれ以上の或物が實現される、歴史の中に隠れてゐて、彼等が認知せず、彼等の意圖に入らなかつた或物が實現される」と（「歴史哲學」）。ヘーゲルは「初めて發展の歴史に内的聯關を發き出さんとした」（エンゲルス）。しかしながら、ヘーゲル哲學の根本缺陷（彼の觀念論、革命的方法と保守的體系との矛盾）は、ヘーゲルの社會的政治的見解にも宿命的に影響した。ヘーゲルが歴史的過程の眞の基礎と見做したものは、理念の自己發展であつた。「發展の過程はすべて……『人間』の發展過程」として考察された、とマルクスは指摘してゐる。實はこれは、過ぎ去つた時代の人間の代りに、後世の平均個人を置き、昔の個人に後世の意識を押しつけるところから來てゐる。實在的な諸條件を無視したこの空想のために、「歴史全體

を意識の發展過程」と化することが可能となつた。^(三)かくしてヘーゲルにあつては、歴史の造物主として絶對的世界精神なるものが飛び出し、歴史そのものは、理性の無限なる展開として、理念の發展として考へられた。「各々の原理は、自己發現のために特別なる世紀を有してゐた」しかも「原理が歴史を創造したのであつて、歴史が原理を創造したのではない」^(四)

(一) マルクス・エンゲルス全集、ロシア版、第四卷五八頁。

(二) 同上、五九頁。

(三) マルクス「哲學の貧困」全集第五卷、三六八頁。

歴史上に活躍する人物は、ヘーゲルにあつては、世界精神の「事務員」であり、その神秘的な抽象的自意識の、人間一般の盲目なる道具にすぎない。世界史なるものは、理論の見地からすればヘーゲルの哲學體系において完成をとげ、政治の見地からすれば、ヘーゲル時代の身分制的プロシヤ君主制において完成の域に達する。ヘーゲルの「歴史哲學」における辨證的方法は、ヘーゲルの「精神現象學」や「論理學」に比して、はるかにヘーゲル哲學の保守的側面に壓倒されてゐる。それ故にレーニンは、發展理念の作成（たとへば觀念論の基礎の上にもせよ）に對するヘーゲルの功績を力説しながら、同時に次のことを指摘したのであつた。「大たいに、歴史哲學は至つ

て僅かのものしか與へてゐない——これは分り切つたことだ。けだし、茲でこそ、この科學部門でこそ、マルクスとエンゲルスとは他に比類なき前進をとげたのだから。ここでは、ヘーゲルは最も時代に後れ、且つ陳腐である。⁽¹⁾だがヘーゲルの偉大な歴史眼は、個々の歴史的事變を説明するに當つて、唯物史觀の或る種の萌芽を豫感したのである。例へば、「國家は地上における神の理念である」といふ主張と並んで、ヘーゲルは次の如く書いてゐる。「現實の國家、現實の政府は、既に身分の差別が存在し、貧富の懸隔が甚だしくなり、大多數の人々がもはやあり來りの方法では、自分の欲望を満し得なくなるやうな状態が出現した時に、はじめて發生する」(「歴史哲學」)。他の個所でヘーゲルは、人間労働の特性——自然征服の手段としての道具の發明を力説してゐる。レーニン⁽²⁾はヘーゲルにあるこれらの歴史唯物論の個々の萌芽をあげてゐる。

(1)レーニン「哲學ノート」邦譯第二冊、一六三頁。

八 フォイエルバッハ

ルドヴィヒ・フォイエルバッハはヘーゲルの觀念論を放棄して、唯物論の立場を採つたが、しかし彼もすべてのブルジョア思想家と同様に、歴史における觀念論を克服するに至らなかつた。

彼の社會的歴史的學說の起點となつたものは、時間空間を離れた、特定の生産様式の外にある抽象的人間であつた。フォイエルバッハの「人間」は、具體的な歴史上の人間ではない。この人間は、エンゲルスの適切な言葉をかりて云へば、一人の女が生んだものではなく、それは蛹から蝶が飛び立つやうに、一神教の神から飛び出したものであり、従つてフォイエルバッハの人間は、「まだ抽象の神學的後光を差してゐる。」⁽¹⁾従つて自然も人間も、フォイエルバッハにあつては空虚な言葉に終つてゐる。「フォイエルバッハの抽象的な人間から、現實の生きた人間へ移りゆくためには、人間を歴史行動において研究することが必要であつた。」⁽²⁾フォイエルバッハはこれをなし得なかつた。個々の適切なる所論にも拘らず、フォイエルバッハもやはり干乾びた空虚な抽象を事とし、人間の一切の欲求をその「本質」からひき出した。それ故に、社會および政治に關する學問は、彼にとつてはどこまでも未開の領域であつた。だから、フォイエルバッハを事實上唯物史觀の創始者となしたデボーリンの主張は間違つてゐるが、たとへば歴史觀念論共通の見地以上には出でなかつたにしろ、フォイエルバッハに唯物史觀への個々の接近があることだけは、これを認むべきである。レーニンはフォイエルバッハの拔萃の中で、歴史唯物論のこれらの個々の「萌芽」や「胚種」を特に記してゐる(「二哲學ノート」第二冊)。

(一) マルクス・エンゲルス全集、改造社版、第十七卷、一二頁。

(二) エンゲルス「フォイエルバッハ」ナウカ社版、二卷選集第一卷、四六九頁。

かくて以上から結論されることは、マルクス以前のブルジョア的な社會的歴史的思想は、眞に科學的な歴史觀にまで、唯物史觀にまで進み得なかつたといふことである。たかだか、個々の代表者たちが、ブルジョアと封建制度との階級戦が最も尖鋭した時代に、歴史唯物論に関する個々の命題に近づいただけである（階級闘争の觀念、經濟的發展と法制的および政治的形態との聯關、社會現象の歴史主義および決定論）。ブルジョア社會學的潮流のかうした性格を生み出した主因は、當時における社會科學（並びに自然科學）が狭く限られてゐて、その發達が不十分であつたといふこと以外に、彼等が階級的に狭く限られてゐたことであつた。ブルジョア的な社會的歴史的理論の有する歴史の意味は、封建秩序を批判論駁し、資本主義的社會關係の「永遠性」と「合理性」とを論證したところにある。この事實は、ブルジョア社會學思想の發展に一定の限界があつたことを示してゐる。

第二章 唯物史觀の問題に関するマルクス

およびエンゲルスの見解の形成

一 歴史唯物論の形成過程

唯物史觀は、先づ第一に、先進資本主義諸國におけるプロレタリアの革命闘争の經驗全體を理論的に普遍化し、この普遍化を基礎として、マルクスとエンゲルスとがこれを發見し作り上げたものである。労働者階級の革命的實踐は、一般的にはマルクス・レーニン主義理論の、特に唯物史觀の最も深い基底であつたし、現にまたさうである。資本主義的諸關係を保存することを欲しない労働者階級は、ブルジョアの視野に特有なる限局性と主觀主義とに煩はされない。彼等の根本利害は、社會的發展の法則性の、なかに資本主義の一切の矛盾の、最後まで徹底した、客觀的に正しい理解を必要とする。

人類思想史上で初めてマルクスとエンゲルスのみが、人類の歴史全體とプロレタリアの革命運動の經驗の理論的普遍化を基礎として、すべてブルジョア的な理論的思想の限局性を批判的に克

服し、眞に科學的な社會的發展の理論を作り出した。マルクスおよびエンゲルスの作り上げた唯物史觀は、人類史全體の發展の法則的進行を科學的に説明するものであるが、今度はその同じ唯物史觀が（全體としてのマルクス・レーニン主義理論と同様に）最大の革命力となり、革命運動の方法論となつて、労働者階級に彼等の闘争の道を指示し、照し出し、自生的な労働運動に意識性を吹き込む。周知の通り、エンゲルスは、唯物史觀と餘剩價值學說との二大發見のために、社會主義は科學となつたと言つた。労働者階級のイデオロギーたる唯物史觀は、あらゆるブルジョア社會學的學說とは原則的に異つてゐる。だが、この唯物史觀のうちには、全體としてのマルクス主義におけると同様に、「世界文明の發展の大道から外れて、發生した、凝り固まつた學說といふ意味での『宗派主義』らしいものは何もなし。」⁽¹⁾

(1) マルクス・エンゲルス二卷選集、ナウカ社版、第一卷、五七頁。

マルクス主義は人類思想の一切の積極的な成果の正當なる繼承者であつた。思想的繼承といふ點から云へば、マルクス主義は、ドイツの古典哲學とイギリスの古典經濟學およびフランスの空想社會主義の批判的克服と改作を土臺にして發生した。従つてまたマルクス主義の構成部分としての歴史唯物論も、ブルジョア科學のあらゆる積極的成果の、先づ第一に、マルクス主義の三つ

の主要源泉の科學的全内容の、批判的攝取といふことを意味した。マルクスおよびエンゲルスにおける歴史唯物論の形成は、全體としてのマルクス主義理論の發展との密接不可分なる聯關のうちに行はれた。

だが、マルクスおよびエンゲルスの歴史觀は、メンシェヴィキ的觀念論者たちが叙述したやうに、純論理的な思想過程の結果として展開され、形成されたのではなく、マルクスとエンゲルスが實踐的活動を基礎とし、革命的民主主義的立場から、労働者階級の立場へ移つて行つたためであり、また人類の歴史全體を理論的に把握し、資本主義に對する労働者階級の闘争の幾多の實踐的指導を目的として、労働者階級の革命運動の經驗全體を理論的に概括したからであつた。

二 唯物史觀の生誕

マルクスおよびエンゲルスはその初期の發展段階では、革命的民主主義者として活躍し、現存の封建的およびブルジョアの秩序を鋭く批判し、都市および農村における勤勞大衆の廣汎なる層の利害を擁護した。政治、法律、宗教の問題が、マルクスおよびエンゲルスの注意の焦點であつた。この時期におけるマルクスとエンゲルスは、自分の政治的見解の哲學的根據を、ヘーゲルの

學說の革命的側面に見出さうとした。マルクスとエンゲルスは、初めから老人ヘーゲル學派に反對し、「ヘーゲル哲學から無神論的な革命的結論をひき出さう」(レーニン)と努めて、青年ヘーゲル學派に與みしたが、しかもプレハノフの主張とは反對に、幾多の重大なる問題で青年ヘーゲル學派の方向とは原則的に異なる独自の道を進んで行つた。「ライン新聞」の編輯者として、實際上で色々な階級の闘争の焦眉の問題に突き當るに及んで、マルクスは一步一步と、ヘーゲル哲學および歴史哲學が、國民大衆の眞の利害のための闘争の理論的基礎づけに役に立たないことを確信するに至つた。例へば、言論出版の自由に關する討論の批評や、山林盜伐法等々を取扱つた論文で、マルクスは次の如く書いてゐる。「各種の身分や階級は、國家を彼等自身の經濟的利益の擁護機關と化さんとし、國家の全機關を耳や眼や手足となし、それを介して、森林所有者の利益を聞いたり見張つたり、評價したり警備したり、避けたり」しようと思つてゐる、と。かやうにマルクスは、まだこの時期には、國家は國民精神の一般的自由を表現するものだといふ、ヘーゲル流の觀念論的見地に立つてゐたとはいへ、階級闘争の實踐と、直接の政治闘争への實踐的参加に刺戟されて、マルクスは(青年ヘーゲル學派とは違つて)、いよいよヘーゲル哲學の抽象的高所から降り、經濟關係の實在的地盤へと向ひ、國家および法律形態の地上的根元を探り求めるや

うになつた。政治や法律の問題と並んで、この時代の極めて緊急なる他の問題——宗教問題——でも、マルクスは青年ヘーゲル學派とは違つて、宗教を抽象的理論的には批判しなかつた。すなはち、マルクスは次の如く指摘してゐる——「反宗教闘争は、間接には、宗教を精神的香ひとする世界に對する闘争である。」⁽¹⁾宗教を原理とする轉倒した實在性の消滅と共に、宗教も自づから消滅する、と。かやうに、マルクスは哲學上でも歴史哲學においても、まだ觀念論的立場に立つてゐたとはいへ、夙に「ライン新聞」(一八四二—一八四三年)時代に、次第にヘーゲルから離れて行つて、ヘーゲルの抽象的な自意識から實在的な社會關係へと、一切の社會關係の基礎としての社會の經濟的構造へと進みゆく道を、次第々々に感知して行つた。

(1) マルクス・エンゲルス全集ロシア版、第一卷、二四二頁。

(2) 同上、三九九頁。

マルクス主義の創始者のこの方向への決定的な前進は、「獨佛年誌」、殊に「神聖家族」に見られる。政治的見地から云へば、マルクスおよびエンゲルスのこの發展期は、彼等兩人が革命的民主主義の見地からプロレタリアの立場へと移つて行つた時期である。「ヘーゲル法律哲學批判」(一八四三年末に執筆、一八四四年初頭に印刷)といふ論文で、マルクスは初めてはつきりとプ

ロレタリアの立場を採つた。また哲學的見地からすれば、この發展期は、マルクスおよびエンゲルスがヘーゲル觀念論の立場から唯物論哲學へと移つて行つた時期である。この轉換は、ルドヴィヒ・フォイエルバッハの決定的な影響を受けて行はれた。フォイエルバッハは、ヘーゲルの觀念論および青年ヘーゲル學派と手を切つた最初の人である。マルクスもエンゲルスも、十九世紀の三十年代のドイツにおけるヘーゲル思辨哲學の優勢と支配に叛旗を翻した、フォイエルバッハの唯物論の解放的な革命的意義を決して否定しなかつた。だが、プレハノフやメンシエヴィキ的觀念論者の主張とは反對に、マルクスおよびエンゲルスは未だ曾つて徹底したフォイエルバッハ主義者であつたことはなかつた。彼等はフォイエルバッハの唯物論から一定の影響を受けたが、同時にフォイエルバッハの限局性や缺陷、抽象的人間の禮讚や彼の唯物論の直觀的性質に對しては批判的態度を採つた。

「ライン新聞」時代に、マルクスとエンゲルスは、既に、觀念的合理的な國家法といふヘーゲル理論の抽象的高所から、唯物史觀の方へ進む道を探し出したのであつたが、それに續く時期には、マルクスとエンゲルスはプロレタリアの立場を採り、唯物論哲學を身につけ、ヘーゲルの社會哲學ときつぱり手を切り、唯物史觀創作の道にいたのである。マルクスとエンゲルスは次々に

著作を出して、ヘーゲルの國家哲學および法律哲學をドイツ史の理想的繼續と見做し、この哲學に對し致命的な批判を加へた。マルクスは、現實の世界を改造するために革命的實踐の有する意義を力説した。プロレタリアは哲學の中に、現存制度に對する鬭争の「精神的武器」を見出さねばならぬと主張し、同時に、現存制度は革命的實踐の過程においてのみ打ち碎かれる所以を力説した。「批判の武器は勿論武器の批判には取り代へられない。物質力は同じ物質力によつて轉覆されねばならぬが、理論も、それが大衆の間に普及するや否や、一の物質力となる。」⁽¹⁾「ヘーゲル法律哲學批判」においてマルクスは、すべてブルジョア世界觀に固有なる理論と實踐との分離を清算し、克服した。

(1) マルクス・エンゲルス全集ロシア版、第一卷、四〇頁。

この時期（「獨佛年誌」時代）に屬するマルクスの經濟および哲學に關する手稿の中で、マルクスは同時代の國家を理性や自由の表現としてでなく、第十八世紀のフランス革命の結果として發生した、特定の社會的經濟的諸關係の結果として考察してゐる。同時にマルクスは、經濟に關する手稿の中で、勞働と資本との對立の相容れない關係を摘發し、資本主義的諸關係の辯護論としての、ブルジョア經濟學に批判を加へてゐる。かうしてマルクスは一步一步と、生産過程が一切の

社會關係の基礎であるといふことを突き止めて行つた。マルクスが次のやうに言つてゐるのも、この意味からである。「生産に對する労働者の關係の中に、一切の人間奴隸制が含まれてゐる。一切の隸屬關係は、この關係の變様乃至は結果に外ならない」と。このやうに、マルクスはプロレタリアの立場からブルジョア經濟學を批判してゆくうちに、歴史唯物論の根本觀念たる生産關係といふ觀念へ接近して行つた。この根本觀念は「神聖家族」において、尙ほ一層明確な徹底した仕上げがつけられてゐる。同書の中でマルクスとエンゲルスは、普通人の觀念にしる（フランス唯物論者の場合の如く）、又はヘーゲルにおける如く、外化され神秘化された形態の觀念にしる、とにかく觀念を以て社會的發展の根本原因と見做すところの、觀念論的な社會的歷史的理論を詳細に批判してゐる。かういふ觀念論的な社會學説とは反對に、マルクスとエンゲルスは「人間の行動」から、自然に對する人間の實踐的關係から發足し、一切の社會現象の最も深い基底たる物質的生产から出發してゐる。「批判的批判は——とマルクスおよびエンゲルスは指摘してゐる——自然に對する人間の理論的および實踐的關係、自然科學と産業とを歷史的運動から除外して、歷史的現實性の認識の端初へ到達したと思つてゐる。例へば、當代の産業、生活自身の直接の生産様式を認識せずに、いづれかの歷史的時代を實際に認識したと思つてゐる。」⁽¹¹⁾レーニンは神聖

家族」の拔萃の中にマルクスの次の如き言葉を書込んだ。「對人的存在としての、人間の對象的存在としての對象は、同時に他人に對する人間の定有であり、他人に對する彼の人間の關係であり、人間對人間の社會的行動である。」レーニンはマルクスのこの命題に對して次の如き註を附してゐる。「この箇所は極度に注目し値する。すなはち、マルクスが彼自身の全『體系』の根本觀念へ、若しくは——外ならぬ社會的生產關係へ近づいてゆくのが示されてゐる」と。⁽¹²⁾

(11) マルクス・エンゲルス全集ロシア版、第三卷、一八〇頁。

(12) レーニン「哲學ノート」邦譯第二冊、四三頁。

このやうに、マルクス主義の創始者は「神聖家族」において、觀念論的な社會歷史觀をきれいさつぱり棄ててしまつて、物質的利害の見地に、一切の社會過程および社會現象の眞の基礎としての物質的生產の見地に立つに至つた。彼等はこれを起點として、「神聖家族」の中に歴史唯物論の幾多の根本的範疇の一般的定式づけを與へてゐる。國家および法律形態を、特定の經濟的利害および階級と結びつけ、社會的發展における階級の役割と意義とを解明し、プロレタリアの歴史的使命を規定し、舊社會の破壊および社會主義的改造の必然的條件としての、社會革命の意義を力説した。尙ほ一言しておくが、マルクスとエンゲルスとは「神聖家族」において一切の觀念

論的社會史學說を批判しながら、実際には同じくフォイエルバッハの人間觀一般とも、社會的歴史から遊離した、抽象的人間の禮讚とも手を切つてゐることである。エンゲルスはこの點について次のやうに云つてゐる——「フォイエルバッハの新宗教の核心たる抽象的人間の崇拜に代ふるに、現實の人間をその歴史的發展において研究すべきである。フォイエルバッハの見地のさらに進んだ論作は、一八四五年にマルクスによつてその著書「神聖家族」の中で着手された。」⁽¹⁾

(1) エンゲルス「フォイエルバッハ」二卷選集ナウカ社版、第一卷、四六九頁。

「フォイエルバッハに關する提言」(一八四五年)の中で、マルクスは社會的生產的および革命的實踐を以て、社會的發展および認識の根柢に存するもの、社會現象の説明の爲にも、これが革命的改造のためにも、その起點たるべきものとなして、この實踐に關する觀念の古典的な定式を與へてゐる。

「およそ社會生活は本質上實踐的である。」社會生活をかく見る時は、「抽象的な孤立した個人」といふフォイエルバッハの見地や、マルクス以前の社會的思想の守本尊たる例の「人間の本質」は落ち去つて、「社會的諸關係の總體」たる正體を現す。

唯物史觀をさらに進んで築き上げ、唯物論を「頂上まで」仕上げたものは、「ドイツ・イデオ

ロギー」(一八四五—四六年)である。この著書でマルクスとエンゲルスは、唯物史觀の根本問題をすべて定式づけたのであつた。マルクスとエンゲルスは觀念論的な歴史觀に反對して、歴史唯物論の根本問題を次のように要約してゐる。「この歴史觀は次の點に存する、即ち、直接的生産の物質的生產から出發して、現實の生産過程を考究し、一定の生産様式と結びつき、且つそれから發生する交易形態、即ち、さまざまな段階にある市民社會を、歴史全體の基礎として理解し、次に、國家としてのこの市民社會の活動を叙述し、同じくこの市民社會から、ありとあらゆる理論的所産、意識形態、宗教、哲學、道德等々を説明し、これらのものが市民社會の各段階から發生した過程を追及することである。かくして、全體としての過程(従つてまた過程の各種側面の交互作用)を叙述し得ることは勿論である。この歴史觀は觀念論的歴史觀とは違つて、各時代に何かの範疇を探索するものではなく、常に現實の歴史の地盤の上に立つて、實踐を理念から説明せず、むしろ觀念的構成を物質的實踐から説明し、そのために次の如き結論に達する。即ち、意識のあらゆる形態や所産は、精神的批判によつても、その意識形態を『自意識』に解消したり、又は『幻想』や『幽霊』や『妄想』等々となすことによつても、廢棄せられず、この觀念論的虛妄が據つて以て發生した實在的な社會關係を、實踐的に轉覆することによつてのみ廢棄せられる。」⁽²⁾

(一)「ドイツ・イデオロギー」ナウカ社版、第一冊、三一頁。

「ドイツ・イデオロギー」において、初めて、社會的構成態に關する學說の輪廓（歴史的所有形態の區別、民族的、古代的、封建的、資本主義的形態の區別）が興へられ、生産力と生産關係との學說の定式づけも初めて興へられてゐる。同書にはまた、社會革命の法則に關する明白な定式づけも興へられてゐる。かやうに「ドイツ・イデオロギー」の中には、唯物史觀の一切の原理が、マルクスおよびエンゲルスの手によつて大綱的に叙述されてゐる。すなはち、マルクスは同書において、初めて人類社會の根本的な發展法則を發見することができたのである。初期の著作、「ヘーゲル法律哲學批判」や「神聖家族」、「ドイツ・イデオロギー」等々において、マルクスおよびエンゲルスは、共產主義社會の建設者としてのプロレタリアの世界史的意義を明かにし、プロレタリア獨裁に關する學說の大本を作り上げ、「哲學の貧困」では、マルクスは、階級社會絶滅と共產主義建設の條件として、暴力革命とプロレタリア國家の樹立の必要なる所以を説いてゐる。「共産黨宣言」には、革命によつてブルジョアを倒し、彼等から生産手段を收奪し、その生産手段を、「支配階級として組織された」プロレタリアの手に集中すべきことが力説されてゐる。

第三章 辨證法的唯物論と唯物史觀

一 唯物論の社會現象への擴大

レーニンの見るところでは、マルクスの偉大な功績の一つは次の點にある。「哲學的唯物論を深め且つ發展させて、その唯物論を究極まで押し進め、彼の自然認識を人間社會の認識の上に擴大した⁽¹⁾ことである。」⁽²⁾唯物史觀は「唯物論を徹底的に延長して、それを社會現象の領域に擴大した⁽³⁾ものである。レーニンは、辨證法的唯物論と唯物史觀との内的不可分なる關係を力説して、次のやうに書いてゐる。「一個渾然たる此のマルクス主義哲學にあつては、只一つの根本前提でも、只一つの本質的部分でも取り去れば、必ずや客觀的眞理から離れ、ブルジョア反動の虚偽に抱き込まれることになる。」⁽⁴⁾

(一)レーニン全集第十六卷、三五〇頁。

(二)同上、第十八卷、一三頁。

(三)同上、第十三卷、二六七頁。

歴史唯物論は辯證法的唯物論を社會現象の上に擴大したものであつて、辯證法的唯物論と不可分なる統一をなしてゐる。辯證法的唯物論を歴史唯物論から切り離したり、哲學の問題を歴史唯物論の根本命題から抽象して、後者と對立させたりすることは、辯證法的唯物論を歪曲するものである。また反對に、歴史唯物論を辯證法的唯物論から切り離すことは、歴史唯物論の根本命題を傷け、歪曲するものである。すでに第一次世界大戰前の第二インターナショナルの内部にあつて、マルクス主義の新カント主義修正派も、マッハ主義的修正派も、歴史唯物論を辯證法的唯物論から切り離し、兩者の連繫を否定した。修正主義者は兩者の連繫を不當となし、マルクス主義を單に社會的歴史的學說に還元し、マルクス主義に或ひは新カント主義哲學の基盤を、或ひはマッハ主義哲學の基盤を据えた。ドイツ社會民主黨の公認理論家たるカウツキーも、辯證法的唯物論を否認するために、新カント主義者およびマッハ主義者と統一戦線を結んだ。カウツキーは修正主義者を擁護してかう言つてゐる。マルクス主義には哲學はない。マルクス主義は新カント主義とも一致し得るし、ことにマッハ主義と一致する、この點には何ら非難すべきものも、咎むべきものもない、と。一九二七年にカウツキーは、歴史唯物論を反駁した二卷の大著作を著し、彼自身の修正主義を集成し、ブルジョア社會學の一亞種にすぎない、彼一流の「歴史觀」を提唱した。

辯證法的唯物論に反對を唱へ、マルクス主義に別な哲學的基盤を据えることには、一の政治的意義がある。すなはち、全體としてのマルクス主義、なかんづく唯物史觀を中傷し、歪曲するのは、科學的社會主義の理論と實踐を臺なしにし、プロレタリア獨裁のための闘争を切り崩すためである。新カント派哲學によつてマルクス主義を「倫理的」に基礎づけることは、マルクスの階級闘争論を反撃する日和見主義者の旗標であり、階級闘争論を階級協調の理念にすり代へ、資本主義は「平和裡に」社會主義へと轉生するといふ觀念にすり代へるものである。またマッハ主義的な俗流進化論的順應説又は均衡論は、「社會民主主義的俗物」の日々の順應策を正當視し、資本主義から社會主義への平和な民主主義的發展方向を理論に基礎づけることを、この天職とするものであつた。

ロシアのマッハ主義者たち（ボグダノフ、バザロフ、ユシエケヴィチその他）も、ドイツとオーストリアの社會民主黨の著名な理論家の驥尾に附して、辯證法的唯物論を終始一貫攻撃し、マッハ主義を歴史唯物論と和解させやうとした。その他すべてのマルクス主義偽造者と同じく、彼等も倫理道德で以て、物質的な社會的生產的實踐を骨抜きにした。社會的歴史科學上では、唯物

論の原理に對して歴史觀念論の原理が唱へ立てられ、社會的意識と社會的存在とは同一視せられた。ボグダノフはすでに一九〇二年に次の如く書いた——「社會生活のあらゆる發現は意識的で心理的である……社會的存在と社會的意識とは、正確な意味では同じものである」と。

第二インタナショナルの理論家たちが、階級や階級闘争、社會革命や國家、ことにプロレタリア獨裁などの、歴史唯物論の根本問題を八方攻撃したことも、社會的意識と社會的存在との關係の問題に對する、かうした觀念論的解釋と密接不可分の關係がある。觀念論的歴史觀は、政治を經濟から切り離し、政治闘争の客觀的な經濟的基礎を否認し、政治を（謂ゆる「民主主義的政治」を）社會發展の自立的要因と化し（カウツキーの民主主義的世界史觀）、マルクス・レーニン主義の社會革命論を排撃して、これを俗流進化論にすり代へる點に見られる。第二インタナショナルの理論家や、あらゆる種類のマルクス・レーニン主義の敵（トロツキーその他）が、觀念論の立場から一齊に攻撃を集中するのは、外ならぬこれらの歴史唯物論の根本問題に對してである。

以上すべての潮流は、辨證法的唯物論と歴史唯物論とを切り離して、後者の根本概念を歪曲するものであるが、かうした潮流と闘ふに當つて、マルクス・レーニン主義は、辨證法的唯物論と

唯物史觀との不可分なる内的聯結といふ見地から發足し、唯物史觀を以て、辨證法的唯物論が社會現象の領域に擴大されたものと見なす。哲學的唯物論を社會關係の領域に擴大することは、先づ第一に、哲學の根本問題、思惟と存在との關係如何といふ問題が、社會的發展および社會的認識についてどう解決されるかといふことを示すことである。この點から發足してのみ、初めて社會的歴史の諸科學における唯物論とあらゆる形態の觀念論との間に割然たる一線を引くことが出來、同時に、社會經濟的構成態の發展および變遷の一般法則を反映するところの、歴史唯物論の根本範疇の具體的な相互聯關を示すことが出来る。レーニンは、哲學の根本問題、思惟と存在との關係の問題から發足して、歴史唯物論の根本問題に關する深遠な餘すところなき問題提起と、これが解決とを與へてゐる。「唯物論一般は、人類の意識や感覺や經驗等々とは係りのない、客觀的な實在的存在（物質）を認める。歴史唯物論は、社會的存在が人類の社會的意識とは獨立したものであると認める。」^(一)「唯物論一般は意識を存在から説明するもので、存在を意識から説明するのではないが、これと同じく、人類の社會生活については、唯物論は社會的意識を社會的存在から説明することを要求する。」^(二)このレーニンの引用句には、歴史唯物論の最も一般的な根本問題の特徵づけが（その哲學的基礎との密接な聯關において）極めて判明に與へられており、社會

的歴史的諸科學における唯物論と觀念論との間に劃然と一線が引かれてゐる。社會的歴史的諸科學における種々雑多な流派や潮流は、先づ第一に、右の問題を如何に解決するかによつて決定される。社會的存在の客觀的發展といふことから發足して、社會的存在が社會的意識から獨立してゐて、何から何まで後者を決定すると見る人々は、すべて社會學における唯物論者の陣營を形成し、これに反して、意識形態を社會學的分析の起點となし、理性、意識、意志等々の發展を、社會的發展の根本的な起動力と見なす人々は、社會學上の觀念論の内部における各種の潮流に屬する。觀念論が社會的歴史的諸科學に現れる形式と道程とは、哲學の領域におけると同様に複雑多岐で捕捉しがたい。觀念論はしばしば緻密な形で社會學へ喰ひ入つてゐる。歴史唯物論と歴史觀念論とを克服せんとする、中間的な折衷主義的學派にも、極めて種々雑多なものがあるが、これを論理的に突きつめてゆくと、結局は明らかさまな觀念論となる（社會發展の法則性を社會そのものの外に求め、生物學の法則や、地理的條件や、人口の増加や、生存競争等々に求める、すべての自然主義的潮流もこの學派に屬してゐる）。

(一) レーニン全集第十三卷、二六六頁。

(二) 同上第十八卷、一二頁。

二 社會學研究の起點

このやうに、社會的歴史的諸科學における唯物論の原理をなすものは、社會的存在と社會的意識との統一、「社會的存在は、人々の社會的意識に係りなく存する」といふことである。言ひ換へれば、社會的存在は社會的意識に對して第一義的なものであり、そして社會的意識を決定するといふことである。この命題は歴史唯物論の礎石である。マルクスおよびエンゲルスが社會的分析の起點となしたものは、先づ第一に社會的生産であつた、すなはち、人類の社會的な生産活動、社會的存在の根本的な内容をなす社會の經濟的構造であつた。唯物論を社會科學の領域に擴大することは、先づ第一に、「物質的生活の生産様式が、社會的、政治的および精神的生活過程一般を制約する」ことを確め、且つ承認することである。マルクスとエンゲルスは、社會の經濟的構造と、その上に簇生する社會的政治的および法制的諸制度とを區別し、これらの諸制度によつて制約される社會的意識の諸形態を區別して、初めて人類史の全體を通じて發展する社會の經濟的構造の中に、（原始共產社會を除き）階級闘争の過程の中に、社會生活を説明する鍵を見出し、かくして觀念論を社會的歴史的諸科學の領域から追ひ拂ひ、初めて歴史において唯物論を

「上部まで」築き上げたのである。

(一) マルクス「經濟學批判」序説、全集第十二卷第一冊、六頁。

歴史唯物論を一段と發展させたレーニンの最大の功績の一つは、右の根本問題を全面的に展開したことである。歴史唯物論と辯證法的唯物論とを切り離す、歴史唯物論の數々の敵と戦ひ、偽造と闘ふに當つて、レーニンは、辯證法唯物論と歴史唯物論との内的統一と聯關とがどこにあるかを示し、唯物論を社會諸科學の領域に擴大することは、何よりも先づ、社會的存在が社會的意識とは獨立に存し、且つ後者を決定する、といふ見地に立つことである所以を示した。

三 辯證法的社會觀

しかし、辯證法的唯物論を社會現象の領域に擴大することは、單に社會的意識に對する社會的存在の優位を認めるといふことだけではない。歴史的唯物論者であることは、社會的存在とこれによつて決定される社會的意識とを、その不斷の辯證法的發展において、その歴史的規定性と具體性において考究することである。自然界全體と同じく社會も、變化しないものではなく、不斷に發展しつゝあり、しかもその發展は辯證法的に行はれてゐる。言ひ換へれば、内的矛盾、漸次

性の中斷、飛躍、階級闘争、革命を通じて行はれ、舊きものの否定と新しきものの發生、兩者間の闘争を通じて行はれてゐる。マルクス・レーニン主義は、社會的意識と社會的存在との關係そのものを、不斷に變化し發展するものと見る。社會的存在が變化する毎に、少し後れてではあるが、社會的意識も變化し、「時代精神」、「民族性」、「人間自身の性質」も變化する。例へば、ソヴェト聯邦における社會主義經濟の躍進は、勤勞大衆自身の意識の大々的な改造をもたらし、勞働および社會主義財産に對する新しい關係を作り上げ、新しい社會主義的規律、新しい風俗習慣等を生み出してゐる。農民が個人的小農經營から集團的大農經營の方向へ移りつゝあることは、「農民改造のための根本的な基礎、農民心理をプロレタリア社會主義の精神に作り直すための基礎」を創り出してゐる。これについて忘れてならぬことは、「人々の意識の發展は彼等の實狀と後れてゐる」、例へば、「コルボス農民は、その地位から云へばもはや個人農ではなく、集團農民なのだ、彼等の意識は今の所まだ舊い私有財産的な意識である。」^(二)

(一) スターリン「レーニン主義の諸問題」第十版三二三頁。

(二) 同上、五〇八頁

理念の進行は、結局において經濟關係の發展行程によつて決定されるといふのが、歴史唯物論

の根本命題である。階級的な社會經濟的構成體においては、社會的意識の發展も、社會的存在の發展と同様に、各種階級の闘争といふ形で行はれる。すなはち、支配階級の意識は、常に社會における支配的意識として現れる。資本主義では、ブルジョア思想が社會における支配的思想であるが、ソヴェト聯邦では、支配階級たるプロレタリアの世界觀としてのマルクス・レーニン主義が、社會生活のあらゆる方面に行き亘り、激烈な闘争の裡に資本主義要素のイデオロギーを斷乎として驅逐し、廣く農民や小ブルジョア大衆の意識を社會主義的に作り直してゐる。

だからして、社會的意識と社會的存在との統一を一般的に論ずるだけでは足りない。社會的存在が社會的意識に對して第一義的なものと主張するだけでは足りない。その都度、この統一を、それに固有なる階級對立（敵對的社會構成態における）を伴ふところの、歴史上特定の發展段階において考察すべきである。各歴史的發展段階において、社會的存在と社會的意識とは具體的な統一をなしてゐて、それに固有なる性格と合法則性とを伴つてゐる。それにこの統一の基底をなすものは、當の構成態に固有なる經濟的社會構造であつて、この經濟的構造には、その上に起立する政治的法制的諸制度と、この制度に照應する社會意識の諸形態がつきまとつてゐる。

かるが故に歴史唯物論は、「社會一般」といふ抽象的で形而上學的で無内容な規定を排し、社

會的發展に辨證法を適用して、社會的經濟構成態といふ概念を興へる。社會的經濟構成態とは、人類の發展における特殊なる歴史的段階に當るものであり、社會存立の歴史上特定なる特殊の形態であり、人類の發展における一大歴史的時代であり、その各々に固有なる特殊な法則性を有する特定の社會的有機體である。

マルクス主義の古典家は、社會的構成態を規定する基礎としての經濟的構造から發足して、次の五つの社會的經濟構成態を區別する。原始共產社會、古代（奴隸制）社會、封建社會、資本主義社會、共產主義社會がこれである。古代社會、封建社會、資本主義社會は階級的構成態であつて、それに特有なる一聯の特質によつて、先階級的（原始）構成態とも、無階級（共產制）構成態とも異つてゐる。社會生活の種々さまざまな側面（經濟、國家、法律、藝術、科學、宗教等々）は、通常ブルジョア社會學者によつて社會的全體から抽象され、それぞれ單獨の範疇とされ、獨立の「要因」と化されてゐるが、社會的經濟構成態の學說によれば、これらの社會生活の各側面を、その不可分なる統一において、その交互作用と發展において考察し、綜合的な社會生活觀を立てることが出来る。この學說は人類の先史全體を（原始社會を除き）階級闘争の歴史として考察するのである。この學說から發足して初めて、社會的發展における階級闘争と政黨および社會

革命の絶大な決定的意義を理解し、政治と國家の役割、なかんづく、人類を野蠻な先史状態から本當の歴史へと移す唯一の強力な槓杆としての、プロレタリア獨裁の役割を明かにし、社會の歴史における種々雑多な社會的意識形態の地位と意義とを規定することが出来る。故に、辨證法的唯物論を社會關係の領域に擴大すること、すなはち、社會科學上で辨證法的唯物論者であることは、單に社會的存在が社會的意識に對して第一義的であることを認むるだけでなく、社會的發展を、各種の社會的構成態變遷の自然史的過程として考察し、一の經濟制度が發展して他の制度となることを示すことである。

第四章 社會的法則性の問題

一 社會的法則と自然的法則

社會的經濟構成態の理論から發足して、社會的發展の法則性の問題を正しく解決し、歴史唯物論の對象を具體的に規定することができる。社會的法則性の問題では、ブルジョア觀念論的社會學は、自然主義的な社會的法則性の見地に立つてゐるか、さうでなければ、社會の法則を自然の法則と原則的に對立させる見地に立つてゐる。前者の場合は、社會現象を生理學の法則か、生存競争か、地理的環境の條件か、人種闘争か、人口増加かによつて説明せんとするものである。後者の場合は、社會現象の領域を自然現象から原則的に區切り(リッケルトやヴァインデルバント)、同時に、自然科學の課題は個別的事實を普遍化し、それを系統づけ、「諸現象」を一般法則にほめ込むことであるが、これに反して歴史の對象は一般的なものではなく、單獨的で反復せざるもの、如何なる普遍化にも従はないものであると主張する。歴史家たるものは、一般法則の定立をその課題とすべきではなく、個別的なもの、反復せざるもの、「文化價值から見て」重要なもの、

例へば、宗教、法律、國家、道德等々から見て重要なものを見出し、抽出すべきである、とかういふのだ。

謂ゆる心理學派（その内部には數多くの學說や體系がある）の見解は、ブルジョア社會學に廣く普及したが、この學派は、社會力を心理力として考察し、社會學を心理學の法則の上に基礎づけるものである。ブルジョア社會學の性格的特徴の一つは、社會的法則の特殊性を發見し得ず、それと自然法則との統一をも、後者との質的差異をも發見することを能くせず、また發見しようとしなざることである。ブルジョア社會學者が、社會現象の特殊性から始めやうとする場合でも、社會的存在を、その物質的基礎を分析の起點としようとせず、またそうすることを能くせず、結局は、抽象的な自然主義か、心理主義に立ち歸らざるを得ず、でなければ、たかだか表面的な經驗主義的概括にとどまらざるを得ない。この點から見て注目し得るのは、ブルジョア社會學者の間で一般に認められてゐる科學の分類である。なかでも、その分類によれば、より低次の運動形態（力學、物理學、化學、生物學、心理學、等々）の法則は、より高次の形態（今の場合には社會學）にあつては、從屬的な法則（エンゲルスが主張するやうに）としてでなく、全然獨立に、又はそれと並んで作用してゐる、といふのである。かういふ理論は、夙にオーグスト・コントが

提唱したところで、殆どすべてのブルジョア社會學において市民權を得てゐる。その方法論的基礎は、すべて複雑な形態を單純なものに還元することを、科學の最高課題とするところの、機械論的實證論の見解である。

自然法則と社會法則との關係如何の問題は、社會的存在の客觀的論理、即ち、社會的發展およびその法則性の最も深い基礎をなすところの、歴史上特定の物質的生產形態を、社會學的分析の起點となす場合にのみ、これを正しく解決することができる。マルクスおよびエンゲルスは、何よりも先づ物質的生產、労働を以て、社會を動物群から區別する社會の質的規定性を見なした。而して労働の差別的標識は、生産手段の生産といふことである。ブルジョア社會學は、かういふ問題の提起に近づくことさへ能くしなかつた。それどころか、階級闘争の論理は、この唯一の正しい起點から、ますます社會學を遠ざけて行つたのである。それ故にまた彼等は、自然法則と社會法則との交互關係の問題をも解決することが出来なかつた。

「これらの個人が據つて以つて動物から區別される最初の歴史的行為は、彼等が思惟するといふことではなく、生活資料を自ら生産し始めるといふことである。」⁽¹⁾「人間を動物から區別するには、意識でも宗教でも、一般にどんな物でも以つてし得る。人間自身は、彼等に必要なる生活資料

を生産し始めるや否や、自己を動物から區別するやうになる。^(一)「歴史を作る」ためには、人間は生きてゆくことが可能でなければならぬ。だが、生きてゆくためには、何はさておき、食つたり、飲んだり、住居を構えたり、着物を着たりなどせねばならぬ。かくして最初の歴史的行爲は、これらの欲望の満足に必要な手段の生産、物質的生活そのものの生産といふことである。^(二)

(一) マルクス・エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」岩波文庫、四六頁。

(二) 同上。

(三) 同上、五六—五七頁。

エンゲルスの言葉によれば、労働が「人間そのものを作り出した。」そもそも人間社會を類人猿群から區別するものは労働である。従つて歴史唯物論は、社會發展の法則性の基礎を、人間の社會的生産活動に求めるのであつて、この生産活動が、社會における現實的な聯關と統一とを作り出し、人々の意識や意志を規定するのである。従つてレーニンは、觀念論的な社會學說と闘ふに當つて、一再ならず次のことを力説した。即ち、社會的發展の法則性は、人々の意識や意志とは係りなく、人々がこの法則性を曲解するか（マルクス主義の生誕以前のやうに）、又はそれを正當に解釋するか（プロレタリアとその黨の認識のやうに）とに關係なく存在するもので、一の客觀的性質を帯びてゐる、と。歴史唯物論は社會的法則性の解釋において、宿命論的學說とも、

主觀主義的學說とも原則的に異つてゐる。すなはち、前者は社會的發展の法則性を人間の活動の外に求めて、歴史における人の能動的な役割を否定し、後者は社會的法則性の根元を主觀の精神的能力に認めるのである。歴史唯物論は次のことを確認する。すなはち、人間は彼等自身の歴史を創造するが、しかも人間の物質的な社會的生産活動は法則的なもので、人間が歴史を意識的計畫的に創造するか（社會主義の場合のやうに）、又は自然的な社會的發展の盲目的必然性——彼等自身の同じ活動——の奴隷であるか（人類の先史全體の場合のやうに）には關係なく、一の客觀的な内的論理を有してゐるといふことである。社會的法則性をかく解釋する時に、初めて歴史における個人の能動的役割の説明も可能となることは、後で見る通りである。歴史唯物論の任務は社會的發展のかかる客觀的な特殊的法則を發見することである。

社會の進化は、地理的條件の影響や生理學的法則では説明されない。周知の通り、プレハノフは、社會的發展に及ぼす地理的環境の影響を過度に重要視した。プレハノフによれば、「究極において社會關係全體的發展を規定するところの、生産力の發展は、地理的環境の性質によつて規定される。」^(一)なるほど、生産力のその後の發展は、「それ自身の内的法則に従つて」行はれると、プレハノフは言つてゐるが、生産力發展の最初の原因はプレハノフによれば、地理的環境であつ

て、これが生産力の発展を規定するのである。もちろん地理的環境は社会的発展の自然的基礎であり、社会生活のあらゆる方面を制約する。「およそ歴史の記述は、これらの自然的基礎から始め、人間の行動に依る歴史途上のその變形から始めねばならぬ。」^(三)しかし、それにも拘らず、地理的環境は社会の発展を規定するものではない。地理的環境が社会に影響を及ぼすといふ事實そのもの、その影響の程度、形式、性質は、社会的発展の所與の段階からのみ説明される。社会と環境との關係、兩者間の交互作用といふ事實そのものは、究極においていつも生産力の如何によつて規定される。これに關する明白な事例はソヴェト聯邦である。比較的短時日の間に、嵐の如き社会主義的發展の結果として、ソヴェト聯邦では社会と地理的環境との關係が根本的に變化した。莫大な天然資源の開發（社会主義經濟に依る）、ドネプル水力發電所や白海運河の建設等々のために、ソヴェト聯邦の地理的様相は根本から一變したのである。このやうに、地理的環境の影響を受ける經濟的發展は、地理的環境を變形し、それと共に、地理的環境が社会發展に及ぼす影響の程度や形式を規する。このやうに、地理的環境が社会に及ぼす影響の性質は、各歴史の間に、社会的發展の内的法則によつて規定される。

(一) プレハノフ「マルクス主義の根本問題」

(二) 「ドイツ・イデオロギー」同上、四七頁。

人口増加が社会發展の進行に及ぼす影響についても、これと同じことが云へる。多くのブルジョア社会學者のやうに、社会發展の究極原因を人口増加の密度から説明してはならない。「人口増加の條件は、各種の社会的有機體の仕組如何に直々左右されるものであり、従つてまた人口の法則は、これらの有機體の各々について個々に研究すべきで、『抽象的に』、歴史上相異なる社会的仕組の形態とは關係なしに研究してはならない。」^(一)レーニンはストルヴェに向つて次の如く指摘した——歴史上特殊な社会關係の體係を無視し、生産様式を抽象して、繁殖と生活資料との一致といふ公式に従つて、抽象的な人口法則を立てることは不可能だ、と。例へば、資本主義的生産様式の條件の下で人口過剰が起るのは、資本が生産を支配し、必要なる労働者の數を減じて、餘分の人口を作り出すからである。

(一) 全集第一卷、三一九頁。

歴史唯物論は、爾餘の自然の法則と社会の法則との質的差別性を認めるが、これと同時に、兩者を絶對的に對立されるやうなこともしない。歴史唯物論では、社会發展の法則は、自然にも、社会にも、人間の思惟にも支配してゐる、辨證法の一般法則の特殊形態として考察される。社会も自然と同様に辨證法的に發展する、すなはち、飛躍、革命を通じて、舊きものの否定と新しき

ものの發生とを通じて矛盾した發展をとげる。かういふ見地からして、歴史唯物論は、自然法則と社會法則との質的差異のみならず、兩者の一定の統一をも認めるのである。社會と爾餘の自然との間のこの統一は、社會的勞働の過程において實現される。

自然法則と社會法則との交互關係の問題については、歴史唯物論の機械論的自然主義的修正の色々な試みをあげておかねばならぬ。機械論者たちは、法則といふものを諸現象間の外的關係として解釋する。そのために彼等は、社會の根本的な法則性を社會の内的な自己發展に求めず、社會と自然との外的關係に求める。例へばブハリンは、ボグダノフの驥尾に附して、均衡論から出發し、社會的發展の内的法則性は、社會と外的環境との間の均衡に何から何まですつかり依存し、内的矛盾をなすものは、この外的矛盾の機能である、と見做した。社會的發展の法則性、その究極原因を外的環境の變化に求める、かういふ機械論的均衡論は、もつと徹底的に公然と、カウツキーがまだ戦前の時期に據ぎ廻つたものであつた。例へば、「自然および社會における繁殖と進化」(一九一〇年)の中で、カウツキーは次のやうに説いた。社會的發展も有機體の進化も「一般に全く一樣に行はれる、物質的な、すなはち外部の生活條件への順應によつて行はれる」、「世界全體にも無機界にも共通なる法則がある。すべての物體形態は、その外的環境の條件によ

つて規定される」と。「唯物史觀」(一九一七年)では、カウツキーは次の點を自分の功績だと誇つてゐる。すなはち、自分は人類の歴史を有機的生命の歴史における個別の場合として考察する、人類の發展をも、動植物界の進化をも同じく支配する一般法則は、社會並びに各種のあらゆる變化發達が、四圍の環境の變化から起るところにある。この環境が不變なる場合には、そこに住む有機體や組織も不變である、と。

第二インタナショナルのもう一人の「理論家」クノウも、社會的發展における地理的環境の決定的役割を主張してゐる。プレハノフの「地理的偏向」もこの同じ方向に進んでゐる。これらのすべての所説の根本缺陷は、次の事實を無視してゐることである、すなはち、社會現象なるものは、爾餘の自然界の法則には還元されない、物質的な社會的生産に固有なる法則性からのみ説明されるといふこと、これである。歴史唯物論は、社會的發展を嚴密に決定論の見地から考究し、因果的に制約された一の自然的過程と見ることによつて、歴史の進行を神の豫定した目的から説明したり、人類の歴史の中に「秘められた意味」を求めるところの、非決定論(意志の自由を説く坊主の學説)や、あらゆる種類の目的論的學説を排撃する。しかし、目的論を否定することは、ブルジョア空論家たちが曲解するやうに、歴史唯物論が歴史における目的や觀念的動因を否定す

るといふことではない。歴史の進行はどうであらうと、人間はとにかく歴史を作る。人間は各々自分の目的を追求し、その結果として歴史が出来るとは、周知の通り、エンゲルスが指摘したところである。歴史唯物論は、目的をも觀念的衝動をも否定するものではない。むしろ反對に、歴史唯物論のみが、「行動者の頭腦に一定の衝動として映ずる歴史的原因」(エンゲルス)を指示することによつて、これらの目的や動機に正しい説明を與へるのである。歴史唯物論は各社會的經濟構成態について、人間の大集團たる階級の目的や動向を解明し、この目的や動向に唯物論的説明を與へ、それが如何にして發生し構成されるか、何故にそれは色々な形式に現はれるか、これらの相對的な目的の衝突から如何にして歴史が形成されるかを指示する。

それどころか、究極目的や見透しを否定することは、改良主義や日和見主義にのみ固有なるものである。これに反して歴史唯物論は、眞の人類史の新しい一頁を開く、偉大な理想目的——共生主義——を實現せんとする、全世界數百萬大衆のプロレタリアおよび勤勞者の獻身的な闘争を理論的に堂礎づけるのである。歴史唯物論は、共產主義的理想に向つて進む、個々人や大衆の獻身的な英雄的闘争を基礎づけるが、これに反してブルジョアと彼等の科學に固有なるものは、動物の如き利己心に基いた、粗野な(サルツイコフ・シチエドリンの謂ゆる)「臺所唯物論」である。

二 社會發展の一般法則と特殊法則

歴史唯物論は、社會發展の内在的法則性をどう解釋するかといふ問題でも、ブルジョア社會學とは根本的に異つてゐる。ブルジョア社會學は、永久不變で、あらゆる時代と民族に一樣に役立つものと解する、最も一般的な法則を探求することが、その任務であると考へてゐる。具體的な歴史的内容を持たない、この種の一般法則は、空虚で無内容な圖式であつて、たゞ一つの具體的な歴史的时代をも説明しなす。

生きた現實性が蔽ふ込まれる、一般的な永久不變の法則を組立てる、ブルジョア社會學とは違つて、歴史唯物論は、社會的發展の各歴史的阶段、即ち各々の社會經濟的構成態が、それにのみ固有なる特殊な法則性によつて特徴づけられてゐるといふことを突きとめる。一の構成態の發展法則は、他の構成態の法則とは異なり、後者には還元され得ない。しかしこれはまだ、歴史唯物論が人類の歴史における一般法則を否定するといふことにはならない。周知の通り、エンゲルスは「ルドウイヒ・フォイエルバッハ」の中で次のやうに指摘した——「茲でも、自然の領域におけると全く同様に、諸現象の眞の聯關を發見することによつて、人爲的に案出された聯關を葬り去

ることが必要であつた。結局、この任務の歸するところは、人類社會の歴史に作用する一般的運動法則を發見することであつた。⁽¹⁾しかしブルジョア社會學とは違つて、歴史唯物論は、歴史の一般法則があらゆる歴史時代に一樣に役立つ、無内容な空虚な圖式ではなく、常に、歴史的に規定された、特殊な具體的形式をとつて現はれる、といふことを確かめる。歴史唯物論は一般法則と各種の社會的經濟構成態の特殊な歴史的法則とを形而上學的に切り離さない。各構成態の特殊な歴史的法則は、取りも直さず歴史の一般法則の特殊なる發現形式であるが、一般法則の方も、特殊法則から獨立した存在と作用とを有するものではない。言ひ換へれば、歴史の一般法則は、社會的經濟構成態の特殊な歴史的發展法則を離れては存せず、如何なる形態のものであらうと、あらゆる社會的構成態の發展に固有なる一般的矛盾を表現する。例へば、社會革命の法則は、あらゆる敵對的な社會的經濟構成態の發生と變遷との一般的法則である。社會革命は生産力と生産關係との矛盾の敵對的な性格の表現であつて、舊き構成態の變革と新しい構成態の創造とをもたすが、同時に、この過程は、一階級の手から他階級の手への政權の移動をひき起すところの、激烈な階級闘争のうちに行はれる。

(1) マルクス・エンゲルス二卷選集、ナウカ社版上卷四八〇頁。

社會革命の法則の一般的性格は、人類の先史(原始状態を除く)について、スターリンがコルホズ農民突撃隊第一回全聯邦大會の演説に述べたところである。スターリンは三つの革命について述べてゐる。奴隸制度を覆えした奴隸の運動、封建制度を覆えした農奴の運動、ロシアにおける資本主義制度を覆えした十月革命。だが、各々の構成態に起つたこの過程は、それのみ固有なる特殊な形式で行はれ、他の構成態における過程とは原則的に異なつてゐる。

この點から見て、先づ第一に注意すべきことは、十月社會主義革命が、これまでに起つたすべての革命とは原則的に異つてゐることである。すべて従來の革命は、勤勞者の一つの搾取形態を他の搾取形態に取り代へた「一面的な革命」であつた。「ひとり十月革命のみが一切の搾取を絶滅し、ありとあらゆる搾取者を絶滅することを目的とした。⁽²⁾」スターリンはレーニンの思想をさらに敷衍して、ブルジョア革命と異なるプロレタリア革命の次の如き性格的特徴をあげてゐる。

(イ)ブルジョア革命は、通常、まだ革命前に封建社會の胎内に生じた資本主義制度が、多かれ少かれ既成の形で存する時に始まるが、これに反してプロレタリア革命は、既成の社會主義制度がまだ存しない時に、又は殆ど存しない時に始まる。(ロ)ブルジョア革命の根本課題は、政權を握つて、これを經濟に適合させることであるが、プロレタリアは、政權を握つてから、新しい社會主義

經濟を打ち立て行かねばならぬ。(ハ)ブルジョア革命は、通常、政權を執ればそれで事がすむが、プロレタリア革命にとつては、政權の獲得は單に始めにすぎず、その政權を社會主義的社會改造の槓杆として用ひねばならぬ。(ニ)プロレタリア革命はブルジョア革命とは違つて、ありとあらゆる搾取者集團を權力から追ひ拂ひ、プロレタリア階級が權力を持つやうにせねばならぬので、舊來の國家機關を破壊して、新しい國家機關に代へなければ、事を進めることが出來ない。(ホ)プロレタリア革命はブルジョア革命とは違つて、勤勞大衆をプロレタリアと連結して、プロレタリアの權力を強化し、社會主義を建設するために、勤勞大衆と長期の同盟を結ばねばならぬ。

(一)スターリン「レーニン主義の諸問題」第十版、五二七頁。

奴隸制度を倒壊をさせた奴隸革命は、プロレタリア革命とも、ブルジョア革命とも原則的に異つてゐる。「奴隸は……蜂起し、一揆を起し、内亂を起したが、黨の鬭争に率ゐられる意識的多數者を作らず、如何なる目的へ進んでゐるのかを明白に理解することが出來ず、最も革命的な歴史の瞬間においてさへ、常に支配階級の手操られる兵卒であつた。」⁽¹⁾シチリア全土の奴隸の占領となり、ローマ帝國の他の場所へも波及して行つた、シチリア最初の奴隸戦争(紀元前一三六一—一三二二年)又はスパルタカスの叛亂(紀元前七十年代)の如きは、強大な運動となつて、古代ロ

ーマにおいて殆ど停止する所を知らぬ奴隸の叛亂であつたが、それにも拘らず、奴隸の運動には、現存秩序の變革に關する何らの綱領もなかつた。通常、奴隸暴徒は暴動参加者のみを奴隸制度から解放しただけで、奴隸制度そのものは、幾らか緩和された形態で保存された。周知の通り、スパルタカスの綱領は、直接のローマ進軍を出來るだけ避けて、奴隸暴徒をイタリアの地から、彼等の生國トラキアやガリアへ送り届けることであつた。だから古代世界における階級鬭争は、奴隸の手への政權の直接の移動とはならず(尤もそれは新しい階級たる封建諸侯階級への權力移動の條件を準備したが)、相戦ふ階級の共倒れに終つたのである。

(一)レーニン全集、第二十四卷、三七五頁。

かやうに社會革命なるものは、人類先史の殆ど全體の一般的發展法則であるが、それぞれの構成態においては、それに固有なる特殊的な特性を有してゐる。これと同じことは、歴史唯物論のその他のすべての範疇についても云へる。すなはち、社會發展の一般法則は、個々の社會的經濟構成態に支配する具體的な特殊的な法則性としてのみ存在するのである。

ブルジョア社會學の特徴である、一般法則と特殊法則とを形而上學的に切り離すことは、カウツキーの場合に判然と現れてゐる。彼はその著書「唯物史觀」において次の如き見地を説いてゐる。

る。すなはち、人類史においては、歴史の一般法則と並んで、個々の歴史的時代にも固有なる社會的法則も同様に作用してゐる、と。この様にカウツキーは、一般法則と特殊法則とを形而上學的に切り離してゐる。だが、その結果は、歴史の聯關、一の時代から他の時代への移行、社會的經濟構成態の歴史的發展および變遷の一般的方向が否定される。カウツキーが、社會革命の法則は歴史の一般法則でなく、封建制度から資本主義への移行の法則にすぎないと、證明せんとしてゐるのも決して偶然ではない。一切の内容を失つた一般法則は、カウツキーによつて、一つの歴史的時代にも適用され得ない、無内容な、無對象の形式的圖式とされてゐる。カウツキーは一般法則と特殊法則とを切り離してゐるが、その特質は、彼が「唯物」史觀の重點を實證主義的に個々の歴史的時代の「特殊」法則の研究の上に移して、これらの特殊法則を歴史の一般法則から切り離し、事實上、歴史の一般的法則性をも、各構成態の特殊法則をも發見し得ない、その點にある。

機械論者たちは抽象的なブルジョア社會學主義の精神を體して、歴史外の抽象的な一般法則を組立て、一の構成態の法則の作用を、他の構成體の上に機械的に押し擴げる。例へば、ブハリンは社會一般の抽象的概念を事とし、均衡論を元として、過渡期の特殊な法則性を無視した。過渡期のためにも、社會主義のためにも、ただ一つ「労働支出の法則」だけが、一般的規制者として持ち出されてゐる。この法則は、商品經濟では價值法則といふ衣裳をつけて現れ、過渡期には「價值法則の労働支出法則への轉化過程、根本的な社會的規制者の偶像破壊の過程」が行はれる。

「労働支出の法則」は——裸のままでも、衣裳をつけてゐても——經濟生活の普遍的な規制者であるらしい。この法則の發現形式だけは變化するが、その内容はいつまでも不變であるといふのだ。

(一) ブハリン「過渡期の法則性の問題」

これとは逆に、メンシェヴィキ的觀念論者たちは、歴史における一般法則の存在と作用とを一般的に否定し、個々の構成態の特殊法則、相互に切り離され、一般的形式を失つた法則を發見することのみが、歴史唯物論の課題だと考へてゐる。

かくして、社會的法則性の問題、歴史の一般法則と個々の歴史的時代の特殊法則との關係の問題は、歴史唯物論では、社會的經濟構成態の概念を究明することによつて解決される。マルクスがこの點について與へてゐる社會の定義は、あらゆる社會の一般的な本質的特徴をも、その特殊な歴史的形態をも共に含んでゐる。社會的經濟構成態に關する學說にあつては、歴史の一般法則はその特殊な形式において、個々の社會的經濟構成態の法則といふ形で現れる。しかし、社會的

法則性の問題は、かく一般的に提出しただけではまだ解決されない。歴史唯物論は、或る構成態（例へば資本主義か封建制度かの）一般的法則性を發見するだけにとどまらない。といふのは、純粹なる社會的經濟構成態といふものは、共產主義社會以外には一般に存在しないからである。同じ社會的構成態でも、條件を異にするに従ひ、いろいろな國や民族において、無限に多様な變更や變形を受け、それに固有なる個性的特徴や特質を以て現れる。例へば、特殊な社會的經濟構成態としての封建制度は、國と時代とを異にして、色々な變態や變種を有してゐる。エンゲルスはマルクスに送つた手紙で（一八八二年十二月十六日）、エルベ河以東の諸國は、特殊な特徴や特性を有する農奴制度の「再版」の時代を通過した、といふ點を力説してゐる。十六世紀における農民革命敗北の結果は、これら諸國において農奴制諸關係の保存又は強化をさへきたした。ロシアが特にさうであつて、ロシアでは幾度かの農民革命（一六〇五—一三年、一六四三—五〇年、一六七〇—七五年、一七〇七年、一七七三—七五年）の敗北の結果として、專制政治と農奴制度とが著しく強化され、地主經濟の發展は、レーニンが云ふやうに、ヨーロッパ風には行はれず、「舊支那風に」、「土耳其風に」、「農奴制風に」行はれた。⁽¹⁾

(1) レーニン全集、十六卷、四五九頁。

資本主義の發生と發展および腐朽は、すべての國々において、資本主義的構成態に固有なる同一の法則性に従つてゐる。しかし、資本主義發達のこの一般的法則性は、いろいろな國で、條件を異にするに従つて、特殊な、しばしば異例的な、反復されない、具體的な歴史的條件の下に作用する。例へば、レーニンは色々な國における農業の資本主義的發展の道程を追求して、次のやうに指摘してゐる。「ドイツでは、農業の中世的形態の改造は、謂はば改革的に行はれた……イギリスでは……革命的、暴力的であつたが、その暴力は地主に有利であつた……アメリカでは……南部諸州の奴隸制經濟に對して暴力的であつた。」⁽²⁾レーニンはロシアについて、ブルジョア的發展の二つの道——プロシヤ式とアメリカ式との——が、客觀的に可能だと言つた。ロシアはユンケル・ブルジョア型を進み、その第一段階は一八六一年の改革で、第二段階はストルイピン主義であつた。一九〇五—六年におけるブルジョア民主主義的農民革命は、農民がプロレタリアの支持と指導權の下に第二のアメリカ式發展の道を進まうとする鬭争であつた。農民の革命的精神の經濟的基礎をなす、これら二つの道の鬭争は、一九一七年まで止まず、プロレタリア革命の勝利によつてのみ解決され、その後國家の援助とプロレタリアの指導の下で、社會主義的發展の新しい道が、農民のために開かれたのである。

最後に、同一なる構成態の發展の一般的法則性にしても、その色々な發展段階においてさまざまな變更や變形を受けて現れる。例へば、資本主義的構成態の一般的法則性は、帝國主義的發展段階では、幾分變更された形で現れる。レーニンはその著書「帝國主義」において次の點を指示した、すなはち、資本主義は帝國主義的發展段階に達して、資本主義の一切の矛盾を尖鋭化し、深刻化し、資本主義の不均等なる發展の法則を變更し且つ尖鋭化して、新しい特殊な特徴を帯びるに至り、そのために、プロレタリア革命の問題、および一國における社會主義建設の可能性の問題を新たに提出してゐる、と。

故に、所與の構成態の一般的法則の發見にのみとどまつてはならず、各構成態の一般的法則が個々の國々や民族において取るところの、具體的な形態を指し示さねばならぬ。レーニンがプレハノフと行つた鬭争は、この見地から見て注目を要する。周知の通り、プレハノフはロシアにおける資本主義發達の具體的條件や特殊性を無視して、資本主義の發展に関する一般的命題から出發し、資本主義發展の具體的進行には充分な注意を拂はず、ロシアの現實をヨーロッパ一般の模様に當てはめた。レーニンはまだ「イスクラ」時代にプレハノフの綱領草案を批判して、ロシア

の資本主義に関する問題を輕視し、曖昧にしてゐることを、プレハノフの根本缺陷の一つと見做した。レーニンはロシア資本主義發達の具體的特殊性を指示し、具體的現實性の具體的な算定の⁽¹⁾上に、黨の戰術を打ち立てた。

かやうに、謂はば純粹な姿で取り上げられた、或る構成態の一般的法則性は、極めて多種多様な具體的條件や事情に應じて、無限に多様な變形と變態を受ける。この意味でマルクスは「資本論」にも次のやうに書いてゐる——「同一の——主要なる條件から見て同一の——經濟的土臺でも、無限に異なる經驗的事實、自然的條件や人種關係、外部から作用する歴史的影響等々のために、現實に現れる際には、無限の變更とニュアンスを示すので、この複雑なる關係は、以上の經驗的に與へられた事實の分析をかりてのみ理解することが出来る。」⁽²⁾同一の構成態の一般的發展法則の、かうした變態や變形を研究することは、歴史を正しく認識し、その上に立脚した行動を採るための必須的な最重要な條件である。これらの無限に多種多様な事情のために、「すべ⁽³⁾て一般法則は、非常に錯綜した近似的な姿で、支配的な傾向としてのみ實現される。」

(一) マルクス「資本論」第三卷露語譯、第八版、五七〇頁。
(二) 同上、一〇五頁。

第五章 社會科學および革命運動の方法と しての歴史唯物論

一 歴史唯物論とその他の社會科學

社會的經濟構成態の發展および變遷の合法則性を反映する、社會的發展の一般的理論としての歴史唯物論は、同時に、あらゆる社會的歴史の個別科學のための唯一の科學的な方法であり、「社會科學の方法論」(レーニン)となり、「歴史説明の唯一の科學的な方法」(レーニン)を與へる理論となる。社會發展の客觀的辨證法を反映する歴史唯物論の根本範疇は、同時に、具體的な歴史的材料の研究の方法論的原理である。歴史唯物論の方法論上の意義は、先づ第一に、生産關係を一切の社會關係の實在的な基礎として、社會的歴史的分析の起點として抽出するところにある。

「これまで社會學者たちは、社會現象の複雑な網の目の中に、重要な現象と重要ならざる現象とを區別することに苦み、かかる區分のための客觀的規準を見出すことを能くしなかつた。唯物論は『生産關係』を社會構造の基礎として抽出し、主觀主義者たちが社會學に適用することを

否定してきた、かの反復性といふ一般科學的規準を、この生産關係に適用すべき可能性を與へることによつて、全く客觀的な規準を提供した……物質的な社會關係の分析は……反復性と正規性とに着目し、色々な國々の秩序を『社會的構成態』といふ一個の根本概念に概括すべき可能性を一舉にして與へた。⁽¹⁾

(1) レーニン全集、第一卷、六一頁。

かくして、歴史唯物論の一般的な方法論的意義は、先づ第一に、社會學的分析の起點としてすべての社會科學が一切の社會現象の究極の規定的原因としての社會の經濟的構造を取り出さねばならぬとする、その點にある。しかし敵對的な構成態では、生産關係は諸階級の關係として現れる。殆どすべての人類の歴史は階級闘争の歴史である。それ故に、歴史唯物論も階級闘争の理論を以て、原始共產主義の解體以後の人類全史を説明するところの、根本的な指導原理と見做す。「マルクス主義は、一見混沌としてゐる歴史の中に、法則性を發見することを許す導きの糸を與へた。それは即ち階級闘争の理論である。」⁽²⁾「社會現象の説明のみならず、それを變革改造する場合にも、この理論から發足すべきである。

(2) レーニン全集、第十三卷、一四頁。

社會的發展の科學的理論であつて、同時に社會現象研究の方法である、歴史唯物論の正しい理解から發足して、歴史唯物論とその他の社會科學との關係の問題を解決することができる。經濟學、法律學、國家學、言語學等々の如き社會科學と、歴史唯物論との相違點は、先づ第一に、これらすべての科學が社會的運動の色々な側面又は形態のみを研究し、全體としての社會的發展の過程を研究しない點にある。生産關係を研究對象とするものもあれば(經濟學)、色々な上部構造(法律、國家、藝術、言語等々)を研究するものもある。そしてこれらの上部構造は、それが發展の相對的な法則性を有してはゐるが、同時に、社會的全體の内部における個別的な運動形態として、社會の一般的發展法則に従つてゐる。しかるに歴史唯物論の對象をなすものは、社會の個々の側面でも、その個別的な運動形態でも、さらに一つだけの構成態でもなく、全體としての社會的發展の過程、社會的經濟構成態の發展および變遷の一般的法則である。

二 歴史唯物論と歴史との關係

歴史唯物論と歴史との關係はこれとは幾分異つてゐる。歴史科學の課題は、人類史の具體的進行を研究し、あれこれの民族や國の歴史的發展の法則性を研究することである。「歴史はしばし

ば飛躍的に電光形を描いて進む。そこであらゆる場合に、歴史を忠實に辿らねばならぬとすれば、多くの重要ならざる資料を取り上げねばならぬばかりでなく、思想の進行もしばしば中斷されることになる。」これに反して科學としての歴史唯物論は、^(一)「歴史的過程の一般的理論なのだから、すべて歴史的偶然性やジグザグな進行を表象するもので、社會的發展の一般的論理學——もちろん歴史進行を反映し、「その歴史的形態と攪亂的偶然性とを取り去つた」^(二)進行を反映する一般的論理學なのである。即ち歴史唯物論は、この社會的發展の根本的な本質的段階や形態、その法則を普遍化したものである。具體的な歴史なるものは、何らかの構成態の歴史的發展を、そのあらゆる特殊性において年代順に指し示すことをその任務とし、所與の國や所與の時代に固有なる具體的な法則性を、その個性的な性格や數多くの變更偏差と共に明かにするものであるが、この具體的歴史とは違つて、科學としての歴史唯物論は、社會的經濟構成態の發展および變遷の一般的理論を作り上げる。そしてこの見地から見るときは、歴史唯物論と歴史との間には、極めて密接不可分なる交互作用と聯結とが存する。歴史唯物論の引出す結論は、何から何まで具體的な史料に立脚し、歴史的認識全體の一般的結果であり、その最高の總計である。歴史唯物論を歴史から切り離し、その範疇を抽象的に考察することは、必然的に觀念論やスコラ哲學となり、理論を實

踐から切り離すことになる。これに反して科學としての歴史は、歴史唯物論の一般方法論的命題にすつかり立脚しなければならぬ。すなはち、歴史唯物論の一般命題は、複雑錯綜せる歴史的事實を撰り分け、本質的なものと本質的ならざるものとを區別し、個々の歴史的事實の相互聯結や依存關係を理解し、歴史的發展の綜合的見解を作り上げるために、その規準と可能性とを歴史家に與へるのである。

(一) エンゲルス「マルクスの著書『經濟學批判』の評論」全集第十一卷、第二冊、三六〇頁。

(二) 同上。

歴史唯物論の一般命題は、歴史研究のために方法論として役立つものであつて、これを具體的な歴史的研究と取り代へてはならない。「社會學化すること」、具體的分析に代ふるに、一般的な「社會學的」圖式を以てすることは、第一に、科學としての歴史の特質を廢棄し、第二に、歴史唯物論をブルジョア社會學主義や圖式主義の精神を以て歪曲するものである。

歴史唯物論と謂ゆる「歴史哲學」との關係について、先づ第一に注意すべき點は、謂ゆる「歴史哲學」なるものが、一定の倫理的概念や理想の實現、又は絶對精神の實現といふ觀點から歴史を眺め、人類史の目的や意味の解明を、その課題とするもので、歴史唯物論とは正反對の立場に

あり、科學としての歴史唯物論を否定することである。「歴史哲學」といふ用語は、これを歴史唯物論に適用する時は、色々な形而上學的な、「超歴史的な」先天的圖式に訴へるところの、觀念論的「歴史哲學」と歴史唯物論との原則的な限界を曖昧ならしめる。この同じ理由から、「社會學」といふ用語を歴史唯物論の上に轉用することも多くの條件を必要とする。それは、第一に、ブルジョア社會學の觀念論的方向とは異なる、歴史唯物論の本質的特徴——社會科學における唯物論的方向——を曖昧にする。第二に、この用語を歴史唯物論の上に擴大することは、ブハリンの場合に見られるやうに、ブルジョア社會學の抽象的な規定や概念を、歴史唯物論の領域に轉用することになる。それ故に、ブハリンとの論戰の際に、レーニンはブハリンの著書「過渡期の經濟」への註評で、この用語を括弧の中に入れてゐる。

歴史唯物論の對象に關する問題については、ソヴェト聯邦に起つた二つの特徴的な修正主義をあげておかねばならぬ。機械論者たちは、歴史唯物論を抽象的で不變的な社會およびその「均衡」法則に關する「一般的」學として、最も「一般的な(抽象的)」社會科學(ブハリン)として考察した。かくしてブハリンは歴史唯物論の規定そのものにおいて、その最も本質的な標識——社會的經濟構成態に關する學說を取り落した。そのために歴史唯物論は、ブハリンの場合に「社

會一般」の抽象的圖式と化し、具體的特殊性の一切の多様性を失つた抽象的概念の總體とされ、種々さまざまな歴史的時代にも一樣に機械的に適用される、全くの圖式となつてしまつた(例へば、資本主義の法則性を機械的に過渡期へ轉用すること、「労働支出の法則」を普遍化すること等々)。

メンシエヴィキ的觀念論者たちは、我々が歴史の研究に向ふ際に、その手助けとなる前提を制作することが、歴史唯物論の課題だとしてゐる。メンシエヴィキ的觀念論者たちは、方法を社會的發展の科學的理論から切り離して、歴史唯物論を、實在的な歴史的過程の研究に用ひらるべき形式的な前提の體系と化した。メンシエヴィキ的觀念論者の中には、ブハリン流の抽象的な「社會學主義」に反對した人もゐたが、歴史の特殊法則を一般法則と形而上學的に對立させて、歴史の一般的な法則性は問題とならない、歴史唯物論の課題は、個々の社會的經濟構成態の特殊法則のみを研究することだと主張した。

メンシエヴィキ的觀念論者たちは、實のところ歴史唯物論を變じて、混沌なる歴史の世界に「秩序」をもたらすところの、先天的な前提の總體となした。かくして、歴史唯物論の對象並びに任務に關する彼等の規定には、歴史唯物論のヘーゲルの修正と並んで、或る程度にリッケルト主義

の影響も出てゐる。といふのは、歴史唯物論は彼等の手によつて、實際、具體的な歴史的過程から切り離された、歴史の先天的論理學に還元されたからである。歴史唯物論は社會現象の研究の方法であるが、これが社會科學の方法論となるのは、同時に社會的發展の科學的理論だからに外ならない。ところで、方法を理論から分離すれば、その結果は、マルクス・レーニン主義的な方法の解釋そのものを歪曲し、その方法は變じて、外部から具體的な歴史的材料に適用される、抽象的前提(人間の認識能力にその根據を有すると謂はれる)の總體となつてしまふ。

三 實踐的行動の方法としての歴史唯物論

歴史唯物論は社會的發展の科學的理論であり、同時に歴史認識の一般的方法論であるが、それと共に、社會を變革し、實踐的に改造する唯一の科學的理論である。社會發展の歴史的進行およびその内的法則性の唯一の正しい反映に基いて、歴史唯物論は、資本主義的構成態に固有なる内的矛盾、この矛盾の尖鋭化、この矛盾を基底とする資本主義の不可避的な凋落、より高次の共產主義社會への移行を摘發するための、黨の武器を提供する。科學的社會主義の理論は、歴史唯物論に直接の理論的根據を見出す。歴史唯物論は、資本主義の不可避的な崩壊、より高次の發展段

階への社會の推移を科學的に證明するが、それと同時に、この推移の道程を指示し、ブルジョア階級の墓掘人、新しい共產主義社會の建設者としての、労働者階級の歴史的使命を明かにする、歴史唯物論は、資本主義の崩壊と新しい構成態の創造とは、自然發生的に、自主的な自働的過程としては起らず、プロレタリアとブルジョアとの長い間の闘争の結果として起るといふ、マルクス・レーニン主義の根本命題を基礎づける。すなはち、これが闘争の結果は、社會主義革命へと向ひ、舊社會を革命によつて改造して、新しい社會となす強力な武器としての、プロレタリア獨裁の樹立へと進むのである。

かくして、歴史唯物論は、労働者階級の實踐のための指針となり、黨の一般方針の理論的基礎となる。それ故に、歴史唯物論は嚴正なる黨派的科學である。しかし、以上に述べた事から明かなやうに、歴史唯物論の黨派性は主觀主義に基かず（これはブルジョア科學につき物である）、徹底的な歴史的現實性の客觀的研究に基づいてゐる。歴史唯物論の黨派性は、徹底的に貫かれた科學的客觀性であつて、ブルジョアや修正主義のイデオログたちが證明せんとするやうに、決して客觀主義と矛盾するものではない。レーニンは「唯物論と經驗批判論」の中で、歴史唯物論の黨派性の原理を極めて深刻簡潔に定式づけてゐる。

「人類至高の任務は、經濟的進化（社會的存在の進化）のこの客觀的論理を、一般的な大綱において把握し、人類の社會的意識と、すべて資本主義諸國の先驅的階級の意識とを、出来るだけ判然と明瞭に、批判的に、この論理へ適應させることである。」この一句の中には、一方では、歴史唯物論の最高の客觀性と科學性が、他方では、この客觀性に立脚する歴史唯物論の黨派性社會發展に關するこの理論の行動性と創造的性質とが、古典的な明確さを以て力説されてゐる。

（一）レーニン「唯物論と經驗批判論」全集第十三卷、二六六。

プロレタリアの意識（彼等の前衛たる共產黨に代表された）は、社會的發展の客觀的論理を、階級闘争の客觀的進行を正しく反映しつゝ、自らは一の行動力となり、社會的發展の主觀的要因となる。かくして歴史唯物論の黨派性は、ブルジョアの黨派性の相異なる形態たる、主觀主義をも、ブルジョアの客觀主義をも等しく反駁する。歴史唯物論の黨派性といふレーニンの原理が、主觀主義（トロツキーの社會現象觀の特徴をなす）と異なる點は、それが社會的發展の客觀的論理そのものから發足し、具體的現實性の具體的な研究から引出された、嚴正なる科學的結論だからである。亦、それが、自然放任の理論（右翼日和見主義の特徴をなす）を伴ふ自生的な客觀主義とも異なり、ブルジョア科學の見せかけの公平無私や「中立性」とも異なるのは、階級や政黨

から離れず、生きた現實性を殺したり、歪めたりせず、支配階級の氣に入るやうに、「客觀主義」の旗の下に社會的發展の現實の進行を歪めないからである。

夙に一八八四年に、レーニンはストルヴェを反駁した著作の中で、謂ゆる「客觀主義」に對し致命的な批判を加へた。「客觀主義者は所與の歴史的過程の必然性を云々する。唯物論者は、所與の社會的經濟構成態と、その生み出す敵對的諸關係を正確に確認する。客觀主義者は所與の事實系列の必然性を證明して、常に、これらの事實の辯護者の見地に迷ひ込む。唯物論者は階級對立を暴露し、それによつて自分の見地を規定する……かくて唯物論者は、一方では、より徹底した客觀主義者であり、己が客觀主義をより深刻に、より完全に貫き通す。」彼は「そも／＼如何なる階級がこの必然性を規定するか」を明かにする。従つて「唯物論は黨派性とも稱すべきものを含み、事件を評價する毎に、特定の社會集團の見地に端的に公然と立つことを義務とする。」⁽¹¹⁾

(11)レーニン全集第一卷、二七五—二七六頁。

かくして黨派性の原理の最も深い基底は、發展しゆく生きた現實性そのものであり、労働者階級の前衛たる共産黨に依る、この現實性の客觀的進行の科學的普遍化であり、その結節點を認識し、現實性全體の根本的改造を目的として、この結節點に批判的革命的に働きかけることであ

る。第二インタナショナルの理論家たちは、歴史唯物論の黨派性の原理に對して盛んに攻撃の論鋒を向けた。例へばカウツキーは、歴史唯物論をれ自體は無黨派的であると主張した。マクス・アドラーは、歴史唯物論を政治および黨派の闘争と結びつけることを拒んだ。フリードリヒ・アドラーはすでに一九一〇年に、ロシアのマツハ主義的社會民主主義者を擁護し、レーニンやその他の人々を非難して、彼等は世界觀の問題を黨派的問題と考へてゐると云つた。しかし理論の公平無私と稱するもの(彼等の説教した)は、ブルジョア黨派性の隠蔽された形態であり、一から十までマルクス・レーニン主義の攻撃に向けられてゐる。ソヴェト聯邦では、歴史唯物論の黨派性の原理は、メンシェヴィキ的觀念論者並びに機械論者から修正を受けた。メンシェヴィキ的觀念論者たちは、メンシェヴィズムの最惡のドグマ——理論と實踐との分離を——復活させ、實踐から純粹理論の領域へひつこんで行つて、理論そのものを、具體的な歴史的内容を失つた概念の、無内容なスコラの遊戯と化し去つた。プロレタリア獨裁の實踐から「純粹理論」のスコラ哲學の領域へのかうした「退却」は、メンシェヴィキ的觀念論やルービン主義の場合に、トロツキー主義およびメンシェヴィズムの反革命的な政治とつながつてゐる。

機械論者たちは、右翼日和見主義的な自然放任論、自然生長性への屈服の理論、運動における

意識的要素の役割の過小評價を唱え、理論の革命的意義が分らず、「追隨主義」のイデオロギーを説教して、實踐を革命的理論から切り離し、實踐そのものを狹隘な實利主義となした。理論と實踐との相關關係、および理論の黨派性に關する古典的な規定は、スターリンの著作「レーニン主義の基礎」の中に見られる。「理論は萬國の労働運動の經驗を概括したものである。もちろん、理論は革命的實踐と結びつかなければ、それは空疎なものとなる。これと同様に、實踐も革命的理論によつて、その道が照されてゐなければ、實踐は盲目となる。しかし、理論が革命的實踐と不可分なる關係にあれば、理論は労働運動の最大の力となり得る。なぜなら、理論が、ひとり理論のみが……實踐を助けて、現存階級が如何に進みつゝあり、何處へ向つてゆくかといふことばかりでなく、近き將來にどう進み、どこへ進まざるを得ないかをも理解せしめるからである。」

(一)「レーニン主義の基礎」ナウカ社版二〇頁。

第六章 構成態、生産様式、生活慣習

一 社會的經濟構成態の規定

マルクスおよびエンゲルスによつて發見された社會的經濟構成態の學説は、歴史唯物論の礎石である。「丁度ダーウィンが動植物の種を以て、何物にも拘束されないもの、偶然的なもの、『神の創造した』永久不變なるものと見る見解に結末をつけ、種の可變性と相互の繼承性を確かめて、生物學を全く科學的な基盤の上に置いたやうに、マルクスは、社會を以て、支配者の意志（又は社會および政府の意志と云つても同じことだが）によつて變化を受け、偶然的に發生し變化しゆくところの、個人の機械的集合體と見る意見に結末をつけ、所與の生産關係の總體としての社會的經濟構成態の概念を定め、かかる構成態の發展が一の自然史的過程であることを突き止めて、初めて社會學を科學的な基礎の上に置いた。」⁽¹⁾構成態の學説は、社會科學に反復性の規準を適用し、人類史の全體をば、社會經濟的構成態の發展および交代の自然史的過程として考察するので、各々の構成態は、先行の構成態に對して「社會の經濟的構造の各前進時代」(マルクス)

となる。各々の社會的經濟構成態の規定的基礎をなすものは、その構成態にのみ固有なる生産關係の總體であつて、これが總體が社會の經濟的構造を形成する。マルクスは「賃労働と資本」に次のやうに言つてゐる。人間は生産過程において、自然と關係するばかりでなく、相互にも關係し合ふ、人間は共に働くために、何んとか結合せずには生産することが出来ない、と。生産するためには、——とマルクスは書いてゐる——人々は一定の關係を結び、そしてこれらの社會的關係を通じてのみ、自然への人間の働きかけが起り、生産が行はれる。「この生産の擔當者が自然と關係し、相互に結び合ふかうした關係の總體、彼等の生産關係の總體が、その經濟的構造から見た社會である。」^(三)

(一) レーニン全集第一卷、六二—六三頁

(二) 「資本論」第三卷、露譯第八版、五九〇頁。

「經濟學批判」の序文の中で、マルクスは社會的歷史的理論のかうした基本概念を述べてゐた。

「人類はその生活の社會的生産において、特定の、必然的な、彼等の意志如何に係らない關係を結び、人類の物質的生産力の特定の發展段階に照應する生産關係を結ぶ。これらの生産關係の總體は、社會の經濟的構造を形成し、この實在的な土臺の上に、法制的および政治的上部構造が起

立し、特定の社會的意識形態がそれに照應してゐる。」^(四)

(四) マル・エン全集、第十二卷第一冊、六頁。

政治的法的形態と、これに照應する社會思想の潮流にまとはれた、かかる生産關係體系の各々は、特殊なる社會的經濟構成態、特殊な社會的有機體を形成し、そして各々の社會的有機體は「そのものの發生と機能、およびより高次の形態への移行、他の社會的有機體への轉化の特殊な法則」を有してゐる。かくて歴史唯物論に謂ふ社會的經濟構成體とは、人類社會の發展における特殊な歴史的段階、社會存立の特殊形態のことであつて、同時に後者は、それのみ固有なる法則性を有し、所與の社會形態の内的聯結を作り出し、且つ一切の社會的過程や現象を究極において規定するところの、それに特有なる經濟的構造を有してゐる。すべての構成態は、經濟的土臺と上部構造との具體的な一體をなしてゐる。マルクスは「資本論」の中で、「すべての資本主義的社會構成態をば、それ自身の生活側面を有し、生産關係に固有なる階級敵對の事實上の社會的發現を伴ひ、資本家階級の支配を維持するブルジョア的政治上部構造や、自由平等等々のブルジョアの觀念を伴ひ、ブルジョアの家族關係を伴ふところの……生きた構成態」として指し示した。^(五)

(五) レーニン全集、第一卷、六二—六三頁。

二 生産様式

各々の社會的構成態の質的規定性、それが合法則的發展の基礎は、人々の物質的な社會的生產的活動、すなはち労働活動のうち⁽¹⁾に與へられてゐる。「野蠻人が自分の欲望を満し、自分の生活を維持し、再生産するために、自然と闘はねばならぬやうに、文明人も自然と闘ひ、あらゆる社會的形態において、あらゆる可能なる生産様式の下でこれを行はねばならぬ。」人類社會をその他の一切の自然から區別するものは労働である。自然と社會との間に行はれる過程としての労働、人間が彼等自身の行動によつて、自己と自然との間の新陳代謝を意識的に合理的に制約し、規制し、統制する過程は、専ら人間のみ有する特質である。人間の労働活動は、あらゆる社會的形態に共通なる人間存立の條件であり、永遠なる自然的必然事である。社會的全體の基礎を究極において個人の屬性に求めるところの、ブルジョア社會學の原子論的見方とは違つて、歴史唯物論は、社會的全體の最も深い基礎を、人間の社會的労働活動のうち⁽²⁾に求める、エンゲルスの適切深遠なる表現によれば、「労働は人間自身を創り出した」。人間の労働は動物の「労働」とは質的に

異つてゐる。人間の労働は社會的なもので、意圖された計畫的行動に基き、外部の環境の意識的な能動的改造を基礎とし、人為的な生産要具の使用なしには考へられないが、これに反して動物の行動は、自分の生存を維持してゆくだけで、動物の本能的反應に基き、外部の自然の亂暴な使用(自分が居合せたといふ事實だけで)を基礎とし、生産手段を用ひずにやつて行く。従つて動物界では、本來の意味の「労働」なるものは、何んの役割も演じなかつた。労働過程は、エンゲルスの言葉をかりれば、要具が製造される時に初めて始まる。

労働の過程が如何なる社會的形態において行はれるかには關係なく、それを豫備的に考察してマルクスは労働過程の次の如き單純なる要素を區別してゐる。(イ)合理的な活動、又は労働そのもの、(ロ)労働が働きかける對象、(ハ)労働を助ける要具。一方では労働力そのもの、他方では生産手段(即ち労働要具と労働對象)が、あらゆる生産過程の必然的な要因である。労働過程におけるこの兩者の純一又は結合が、物質的生産力を構成する。労働過程が如何なる形態で行はれやうと、この兩者はあらゆる労働過程の單純なる要素である。労働者と生産手段とが、労働過程の必須的な要因であり、條件である。

しかしながら、その一般的な形式において考察された労働過程、労働そのものは一の抽象であ

る。尤も、この抽象は、労働の歴史的発展段階の全體に亘つて、労働に固有なる一般的特徴を確定してゐるかぎり、科學的な内容のある抽象である。しかし、生産と言ふ場合には、常に社會的發展の特定段階にある生産を指してゐるとは、マルクスが特に力説したところである。

それでは、社會的發展のそれぞれ異なる段階にある人間の生産的活動の歴史的規定性は、何を特徴とするか？ この問題に對する古典的な解答を、マルクスは「資本論」第二卷に與へてゐる。「生産の社會的形態は如何やうにもあれ、労働者と生産手段とは常に生産の要因である。しかし、それが互ひに分離した状態にある時は、そのどちらも可能的にのみ生産の要因たるにすぎない。そもそも生産が行はれるためには、兩者は結合しなければならぬ。この結合が據つて以て行はれる特殊な性質と在り方に依つて、社會的構造の個々の經濟的時代が區別される。」⁽¹⁾

(1) 全集第十八卷、三六一—三七。

かやうに、各々の社會的構成能の特徴は、それにのみ固有なる直接の生産者と生産手段との結合の特殊なる性質と在り方の如何にあり、それに照應する生産力が、その内部で機能する特殊なる型の生産關係、言ひ換へれば、特殊なる生産様式である。生産様式なるものは、一切の社會的發展並に一切の社會關係の基底である。「宗教、家族、國家、法律、道德、科學、藝術等々——

これは生産の特殊なる形式にすぎず、生産の一般的法則に支配されるものに外ならない。」⁽²⁾「ただ一つの社會現象と雖も、社會のこの物質的基礎、生産様式との關聯を離れては理解されもしなければ、説明されもしない。生産力の根本要素(労働力と生産手段)の社會的結合の型としての生産様式は、技術的な範疇ではなく、一の社會的形態であつて、その中で、技術的過程をも含めて、物質的生活の直接の生産過程が行はれてゐる。生産様式には經濟的聯係と技術との不可分なる統一が表現されてゐる。生産様式から發足して、爾餘の一切の經濟的諸關係、分配や交換や消費等等の關係、即ち全體としての社會經濟的構造をも説明することができる。この意味でマルクスも、アンネンコフに宛てて次のやうに書いてゐる——「人類は新しい生産能力を獲得すると共に、彼等自身の生産様式を變更し、生産様式と共に、この特定の生産様式の必然的な關係にすぎないところの、一切の經濟關係を變更する。」⁽³⁾

(1) マルクス・エンゲルス「神聖家」の準備作」ロシア版第三卷、六二二頁。

(2) 全集第五卷、二八五頁。

各々の生産様式の特徴をなすものは、生産手段に對する直接の生産者の關係を表現するところの、それに固有なる所有形式である。例へば、古代的生産様式は奴隸の搾取を基礎とし、そして

奴隷は生産手段（土地、労働要具その他）と共に奴隷主の私有物であつた。封建的生產様式の特徴をなすものは、土地（生産の基礎條件）が、領土の所有地に拘束された、直接の生産者たる百姓から分離してゐることである。特定の生産様式としての單純商品經濟の特質は、生産手段が直接の生産者自身の私有となつてゐて、生産者から切り離されてゐないことである。單純商品經濟は單一の構成態ではない。生産手段の私有といふ點では、資本主義的生產様式と同じ型に屬するが、しかし資本主義的生產様式と同じものではない。といふのは、單純商品經濟では私有財産は自身の労働に依るもので、他人の労働を基礎としてゐないからである。資本主義的生產様式の特徴は、自由なる労働者が生産手段から分離してゐて、両者が資本家の手で結合されることである。これに反して社會主義的生產様式の特徴は、先づ第一に、生産手段が生産者自身の社會的所有となり、生産者から切り離されておらず、彼等の共同利用、計畫的組織的な管理になつてゐることである。

かくして敵對的な構成態にあつては、生産様式は階級的性質を帯び、特殊なる、それに固有なる労働搾取を特徴としてゐる。「不拂餘剩労働が直接の生産者から絞り取られる特殊なる經濟的形態が、支配と服従との關係を規定するが、この關係は生産そのものから直接に生じ、さらに今度は生産に規定的な反作用を及ぼすものである。これを基礎として、生産の關係そのものから生

ずる經濟的社會構造が成立し、それと共に社會の特殊なる經濟的構造が成立する。直接の生産者に對する生産條件の所有者の直接の關係——この關係のあらゆる所與の形態は、それぞれ自然的に労働様式の一定の發展段階に照應し、従つてまた労働の社會的生產力に照應してゐる——この點こそ、我々は常に、一切の社會制度の従つてまた主權と從屬との關係の政治的形態の、これを要するに、あらゆる所與の特殊なる國家形態の、最も深き秘密を、隠れたる基礎を發見する。」
かくして敵對的構成態にあつては、當の構成態の生産様式を特徴づける生産關係の基底は、生産手段の所有者に對する直接の生産者の關係である。階級闘争とは、所與の生産様式に固有なる敵對的矛盾の發現したものである。直接の生産過程において構成される關係は、同時に階級的關係として現はれる。

（一）マルクス「資本論」第三卷、ロシア譯第八版、五七〇頁。

ポグダノフのやうに、生産關係を二つの基本型——直接的生産の關係と所有（階級）關係——に區別することは、階級社會における直接的生産過程を分析する際には、その階級的性質を無視し得るといふ、反マルクス主義的な認容に基づいてゐる。ブハリンもポグダノフの驥尾に附して、生産關係を「社會的階級」關係と「技術的労働」關係とに分ち、この關係を相互に機械的に切り

離し、對立させて、謂ゆる「技術的労働」關係から、その社會的内容を抜き取つた。ブハリンは階級社會では、同時に階級的でないやうな、「技術的労働」關係はあり得ないといふことを理解しない。さらにブハリンの場合には、「組織された資本主義」といふ理論、資本主義の下で計畫的な労働組織と社會的生產が可能であるといふ見方も、以上の抽象的な、超階級的な直接的生產過程の解釋から來てゐる、ブハリンの著書「過渡期の經濟學」に對する註評の中で、レーニンは次の如く指摘してゐる。「『社會的體系』、『社會的構成態』といふ表現は、階級および階級闘争の概念がなければ、充分に具體的ではない」と。⁽¹⁾階級闘争なるものは、後で述べるやうに、敵對的な社會的構成態の發展の根本的な法則性として現はれる。敵對的な社會的構成態は、階級闘争に關するマルクス・レーニンの理論に照して、初めてこれを理解し説明することが出来る。マルクス・レーニン主義の古典家たちは生産様式から發足して、次の如き五つの社會的經濟構成態を區別する。原始共產制構成態、古代奴隸制構成態、封建的構成態、資本主義的構成態、社會主義的構成態、古代的、封建的、資本主義的構成態は、先階級的（原始共產的）構成態および無階級的（社會主義的）構成態とは異つて、階級的な敵對的構成態である。

(1) レーニン遺稿集、第十一卷、三八三頁。

三 原始共產制構成態

原始共產制構成態は、最も初期の、「古風なる」(マルクス)構成態であつて、數萬年の間續き、第三紀と第四紀の境ひ目に發生した。人類社會は、天與の物のみを食してゐた、動物の本能的活動形態の長い長い變形過程の結果として、労働要具の人為的製造をその本質的標識とする人間の労働活動によつて、類人猿群から形成されたのである。労働は人間を創造し、人間を動物界から分つ。この先階級的構成態の發展は、次の如き主要段階を通過した。(イ)先氏族社會、(ロ)母權制氏族、(ハ)家長制氏族。家長制氏族から階級社會への過渡段階に當るものは村共有地で、原始共產制から封建制へと直接に移つて行つた國では、この村共有地が、封建的構成態における原始共產制度として長い間保存された(ロシアの「ミール」、ドイツの「マルク」、印度の共有地その他)。原始共產制構成態の全段階を通じて、その基礎をなすものは、色々の變形や變遷を受けてはゐるが、「労働力と生産手段との本源的統一」(マルクス)であつて、この統一が原始共產制生産様式の特徴である。極度に低い生産力の發達程度、一人一人の個人の弱さから、生産の集合的性質が生じ、古風な生産關係の形式としての、血族關係や氏族的結合が非常に重要視せ

られた。マルクスとエンゲルスとは、「血縁的な」即ち肉親の血族関係を特に重要視したが、それはその内部で物質的生活資料の生産が行はれ、「古風な」構成態の生産力の発展が行はれたからである。「血縁」関係の色々な形態（血族家族、集團婚の各種形態、家長制氏族、家族共同態等々）は、同時に經濟的活動の形態であり、原始社會の最初の經濟單位であつた。この意味でエンゲルスも、「家族・私有財産および國家の起源」第一版の序文に、次の如き有名なる歴史唯物論の定式づけを興へてゐる——「唯物史觀によれば、歴史における最後の規定的要因は、結局直接的生産と再生産である。しかし、これはまたそれ自身二様のものである。一方では、生産資料、即ち衣食住の生産と、それに必要な道具の生産、他方では、人間自身の生産、種の繁殖、特定の歴史的時代および特定の國の人々が生活する社會秩序は、この二種類の生産によつて制約される、即ち、一方では労働の、他方では家族の發達段階によつて制約される。労働の發達が幼稚であればあるほど、即ち労働生産物の量が少なく、従つてまた社會の富が限定されておればあるほど、血族關係は社會制度の上にそれだけ多く支配的な影響を及ぼす。」

(一) エンゲルス「家族、私有財産および國家の起源」岩波文庫版、序文八頁。

右に引用したエンゲルスの定式づけは、ブルジョア社會學者やあらゆる種類の修正主義者から

一度ならず批判と歪曲とを受けた。エンゲルスは一元史觀から脱落した、「二元論」だ、すなはち、歴史の發展をいろいろな要因（究極において經濟と血族關係）から説明する、と非難された。ミハイロフスキーはエンゲルスに反對して、「生殖なるものは經濟外の要因」だと主張した。レニン⁽¹⁾は「人民の友とは何ぞや」の中で、この種の反對論——生殖關係は原始社會では同時に「物質的な生活關係」である、言ひ換へれば、生産關係の具體的形式であるといふ、エンゲルスの深遠な意味を理解しない反對論——に對して、餘蘊なき解答を興へた。言ひ換へれば、血族集團は、それが如何なる形式に現はれようと、同時に生産的有機體であつて、その内部には、集團的労働形態、集團的所有および集團的分配が、何らかの程度に行はれてゐる。

原始共產制諸關係は、母權氏族時代に最高度の繁榮に達した。極めて徐々に發達してゐた生産力が、一定の發達程度に達して、從來氏族組織や氏族聯合が發達してきた種々なる形態は、そのより以上の發達の極楷となつた。氏族組織は、もはや「社會的労働としての労働、および社會的労働の生産性の發達に役に立たなくなつた。そこで労働と所有との分離、對立が必要となつた」この原始共產社會の崩壞過程は、家長制氏族の時代に始まり、その時、個々の家族共同態の勢力が増大して、獨立經濟を營み、氏族の集團經濟とますます對立して行つた。これを基礎として、

生産手段の私有制が発達し強化され、個々の家族共同態の間に財産の不平等が甚だしくなり、同一氏族内部の本源的な「利害の統一」は、「氏人との対立」(マルクス)と變じた。氏族のその後の財産分化、家族の多い氏族名門の分出、氏族制度の崩壊に與つて多大の力があつたものは、この時代に發達をとげた家長制的奴隸制であつて、これは社會の階級への最初の大きな分裂を劃したものであつた。新たに發達した社會階級の衝突は、「民族的結合に基礎を置く舊社會を破裂させた」(エンゲルス)。

(一)マルクス「餘剩價值學說史」第三卷、一九三二年ロシア譯、三〇八頁。

これは最初の社會革命であつて、原始社會を崩解させ、最初の階級および支配階級の政治組織としての國家を作つた。原始共產制に代つて如何なる構成態が現れたかは、それぞれの國における具體的な歴史的發達條件に懸つてゐる。例へば、古代ギリシアやローマでは、貨幣經濟の普及、商業および商品生産の發達の結果として、氏族制度に代つて奴隸制構成態が起つた。古代ギリシアの海岸貿易地帯(アテネ、コリント、ミレトス)は、氏族制度から奴隸制度へと直接に移つて行つたが、ギリシアのうちでも經濟的に後れた地方(エトリア、エピロス、ロクリダ)には、紀元前四世紀までも氏族制度が残り、スパルタやテッサリアでは、農奴制關係が発達した(一八

八二年マルクス宛エンゲルスの手紙)。他方、幾多の民族(スラヴ人やゲルマン人やケルト人等々)の間では、氏族制度に代つて封建的構成態が現れた。家長的奴隸制は、原始共產態の崩壊や農奴關係の形成に與つて大きな力があつたとはいへ、これらの民族の間では、奴隸制體系へは成長しなかつた。

四 奴隸制構成態

奴隸制構成態は「古風な」構成態の崩壊を基礎として、既に原始社會の最後の段階に存在してゐた、家長的奴隸制から發達した。奴隸制構成態は古代世界(ギリシアとローマ)に古典的に實現された。そこでは、奴隸制度が最高度の發達をとげ、農業(大私有地)にも工業(奴隸制製造業、奴隸制手工業)にも、家族生活にも、すべての生産様式に普及した。古代ギリシアにおける氏族制度の崩壊過程は、早くも「英雄時代」に始まつたが、それが最後に爆發したのは、紀元前七―六世紀のことで、紀元前五九四年にソロンの革命に端を發し、五〇九年のクレイステネス革命を以て終つた一聯の政治的革命は、民族的な土地貴族(エパトリデス)の支配を最終的に覆えしそれと共に氏族制度の最後の殘滓も一掃され、奴隸制度が確立された。この奴隸制度は、崩壊し

ゆく氏族の胎内で形成されつゝあつた、新しい構成態の諸階級間の長い間の苦難な闘争過程を経て生れ出たのである。古代ローマでも、氏族制度の爆裂と新しい奴隸制構成態の發生とは、平民と貴族との長い間の闘争の結果として發生した（紀元前五—四世紀）。奴隸制は氏族制度に比較すれば、最初は進歩的な構成態であつたが、一定の發達段階に達して（オウグスツス帝の時代以來、特に三世紀末から四世紀の初頭以來）その餘命を終り、大土地所有にも役に立たないものとなつた。奴隸労働に立脚する大私有地の經濟は収益をあげなくなり、小經濟が「唯一の割に合ふ形態」(エンゲルス)となつた。大經濟—ピラーは小地區(バルセラ)に分散したが、この小地區は、大たいに土地を離れなかつたコロヌスの手に移り、そしてコロヌスは土地の所有者に一定額の年貢を支拂ひ、一部は地主の從臣にも年貢を納めた。かくして奴隸制度は非生産的となり、ために大土地所有者はコロナツス制度に移らねばならなくなつた。

しかしながら、コロナツス制度の發達は、奴隸制は既に死滅してゐたとはいへ、未だ封建制度の生誕を意味しない。生産力の發達はすでに止まつてゐたが、自由労働は「まだ社會的生產の基礎形態とはなり得なかつた。この状態から生じ得たものは、全く革命のみであつた」(エンゲルス)。この點から見ても、古代社會の根本的な起動力となつたものは、奴隸主に對する奴隸の戦争

であつた。この戦争はローマ全史を殆ど間斷なく埋めたのであつて、最初のシチリア暴動やスバルカスの運動の如き、力強い運動に發展して行つた。奴隸の叛亂は、デモクラシー運動(小土地所有者および都市デモクラシーと奴隸大所有者との闘争)や、ローマに對する野蠻人の闘争と纏れ合つてゐた。かうした戦争の結果として、結局、奴隸主の支配階級は、一層公然たる嚴しい國家獨裁の形態(三頭政治、帝制)へと移つて行つた。「法外な労働の公認形態」としての、「奴婢を殺す強制労働」(マルクス)は、小農を一層零落させ、彼等を奴隸と化し、帝國邊陲地の氏族財産を壊滅し、野蠻人に對して一層掠奪的な戦争を行ふ以外には、搾取を強化する方法を知らなかつた。だから小地主と大地主との闘争も、古代世界の根本矛盾——奴隸と奴隸主との矛盾——から派生した闘争と見るべきである。もちろん、古代史の個々の時代にあつては、古代世界の主要矛盾のかうした派生的形態が正面に現れて、事件の進行に決定的な影響を及ぼしはしたが、しかしさうかと云つて、古代社會の主要矛盾は、これを奴隸制所有とパラレル生産に基く個人所有との間の對立に求むべきであるとか、ローマの滅亡は、野蠻國征服からこれを説明すべきであるとかいふことにはならない。大地主と小地主との闘争形態そのものも、ローマ帝國の野蠻國征服も、古代世界の主要矛盾たる、奴隸と奴隸主との矛盾から發足して、これを説明すべきである。

スターリンの適切な言葉によれば、「奴隷の革命は奴隷主を一掃し、勤勞者搾取の奴隷制形態を廢止した。」この革命は相闘ふ階級の共倒を以て終つたが、古代世界の廢墟の上に、「新文明の陣痛の中から」(エンゲルス)、最後に、古代世界に代つた封建的構成態の新しい社會階級が形成される(第九世紀にかけて)ための、あらゆる前提が創り出された。

五 封建制構成態

封建制構成態の特徴は、主要なる生産手段——土地——が大地主の所有であり、直接の生産者——農民——は土地に縛り附けられてゐて、生産要具は持つてゐるが、土地は所有してゐないことである。封建的搾取の據つて立つ基礎は、經濟外の強制、農民の地主への個人的從屬關係であり、農民が土地に縛りつけられてゐることである。奴隷制構成態に比較すれば、封建制度は一の進歩的な體系である。何故と云ふに、直接の生産者は勞働生産性増進の刺戟をすべて失つてゐるわけではないからである。しかし、封建的所有は零細地耕作者に對し生産力を或る限度まで發達させる可能性を供しながら、同時に、小經濟の自由なる發達のために根本的な障害となつた。かくして生産力と生産關係との矛盾は、農民の零細經營と封建的所有との矛盾として現れ、この矛

盾のために、小農經濟は自由なる發達をとげることが出来なくなつた。

この根本矛盾の發展は、封建的生產關係を表現するところの、先資本主義的地代の進化となつて現れる。最初の地代形態は勞役地代であつて、これは何から何まで自然經濟を元としてゐる。

第二の地代形態は現物地代であつて、これは農民勞働のより高度の發達段階を前提とし、過剩勞働の時間を得るために、より多くの餘地を農民に提供する。この地代は「從來通り自然經濟を前提とする、^(一)即ち、經營條件の全部か、又は大部分が自然經濟そのものの内部で生産されることを前提とする。」^(二)もちろん、生産の自然的性質は商業や交換と相容れないものではないが、しかしこの生産形態では、商品生産はまだ存在せず、大たいに商品流通だけが行はれる。^(三)現物地代が變じて、第三の地代形態——先資本主義的地代の崩壞形態を表示する貨幣地代——となることのみが、

「生産物の市場價格を前提とし、生産物が多かれ少かれその價值に近く賣買されることを前提とするが、これは従前の形態にはなかつたことである。」^(三)それと共に、農業においても資本主義的生產様式の前提が作り出される。「個々の直接生産者の經濟的地位の差別」^(四)は、既に現物地代の支配時代に起つてゐたのだが、この差別は、貨幣形態とへ移るに及んで、農村における階級分裂の基礎となる。だからして、小生産は封建制構成態の發達の當初から單純商品生産(たとへ萌芽

的形態にもせよ)であつたとか、封建的構成態の根本矛盾は、封建的所有と商品生産の萌芽形態に當る小經濟との矛盾であるとかいふ意見は、根本から間違つてゐる。レーニンは、先づ第一に、貨幣を中心とする資本主義的生産とは異なる封建的生産の自然的性質を以て、資本主義的經濟とは異なる農奴經濟の根本的特徴の一つと見なした。^(五)小生産は一定の發達段階に達して、初めて商品生産となり、封建的所有と零細地經濟との間の封建的構成態の根本矛盾を激成するのである。この根本矛盾は封建領主に對する農民の鬭争となつて現れる。この鬭争が封建的構成態の發展の起動力である。それは、反封建的な都市の運動と密接に連れ合ひつゝ、一聯の革命を経て、農奴制秩序を覆えし、資本主義を確立するに至る。

(一) マルクス「資本論」第三卷、ロシア譯第八版、五七三頁。

(二) レーニン全集第三卷、二六七頁。

(三) マルクス「資本論」第三卷、五七五頁。

(四) 同上、五七三頁。

(五) レーニン全集、第十二卷、二二六—二二七頁。

封建的構成態の發達した形態は中世紀に存在した。封建制秩序は西ヨーロッパでは、ローマ帝國(コ罗纳ツス關係)と古代ゲルマン種族に見られた、封建制度の萌芽と前提の綜合として、五

世紀から九世紀にかけて成立した。西ヨーロッパにおける封建制度は十六世紀まで續き、東部ドイツとロシアとでは、農奴制は「再版」として十九世紀まで存立した。封建制度の遺制は今日でも多くの國に残つてゐるが(イスパニア、バルカン諸國その他)、植民地半植民地諸國ではそれが特に強く、封建的搾取が資本主義的搾取と連れ合ひ、帝國主義によつて培養されてゐる。スターリンは一九二七年に支那革命の問題について、反革命的トロツキー主義に反對して、次の如く指摘した——「支那經濟の特質は、商人資本の農村への侵入にあるのではなく、農民に對する封建的中世的搾取壓迫の方法が残つてゐて、封建的遺制の支配が支那農村における商人資本の存在と結合してゐることである。」^(一)これらの諸國では、反封建的鬭争は反帝國主義的鬭争と合致する。

(一) スターリン「レーニン主義の諸問題」六一八頁。

六 資本主義的構成態

資本主義的構成態は十六世紀以來構成され始めたが、それに適合した技術的基礎は、十八世紀の終りに機械生産へと移ると共に、初めて作り出された。その主要なる段階は次の通りである。家内制手工業、間屋制手工業、機械的生産又は工場時代。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて

資本主義發達の古典時代——自由競争時代——は、獨占資本主義、帝國主義の時代に代つた。

資本主義的構成態は最後の敵對的構成態である。自然經濟の各種の形態とは違つて、資本主義的經濟は商品經濟であり、また單純商品生産とは違つて、資本主義的生產では勞働力が商品となる。資本主義的經濟の一切の發展は、勞働力のひどい搾取を基礎とし、その根本的な起動力は利潤をあげることである。従前の構成態とは違つて、資本主義的生產様式は經濟的強制に立脚してゐる。しかし、資本主義社會でも經濟外の強制が大きな役割を演じてゐることは、これを力説しておかねばならぬ。マルクスは資本主義的生產様式の特徴をなすものとして、二つの事實をあげてゐる。(イ)生産手段が少數者の手に集中され、そのために生産手段は、個々の勞働者の直接の所有としては存在しなくなる。(ロ)勞働そのものが社會的勞働として組織されること。「この二つの事實によつて、資本主義的生產はまだ矛盾した形態においてはあつたが、私有財産と個別的勞働とを廢棄する。」⁽¹⁾資本主義的生產様式の根本矛盾は、勞働の社會的性質と私有制との矛盾であつて、この矛盾はプロレタリアとブルジョアとの闘争となつて現れる。十九世紀から二十世紀の境ひ目に到來した、資本主義發展の最後の帝國主義的段階において、資本主義の矛盾は最高度の發達をとげ、帝國主義戦争(一九一四—一八年)以後は、戦後資本主義の一般的危機の

形をとつて表れ、一九二九年以後到來した世界經濟恐慌を激成した。帝國主義時代に、資本主義の不均等なる發達が激化し、資本主義世界の鎖を、最も弱い一環において切斷する事が可能となり、資本主義の革命的覆滅、プロレタリア獨裁の樹立が可能となり、一國における社會主義の建設が可能となる。

(一)マルクス「剩餘價值學說史」第三卷、ロシア譯、三一—一頁。

七 共產主義的構成態

共產主義的構成態は、封建的諸關係の埒内で出來た資本主義的構成態とは違つて、プロレタリア革命勝利の結果として、プロレタリア獨裁條件の下で建設される。共產主義的構成態成立の發端となつたのは、世界で初めてプロレタリア獨裁の國家を組織した、十月社會主義革命である。

しかし、資本主義の革命的覆滅とプロレタリア獨裁の樹立後、共產主義の第一期——社會主義——の建設のための一過渡期が必要である。過渡期の全體を通じて、プロレタリアは獨裁を強化し、敵對階級の殘存物と闘ひ、それを清算し、闘争と建設によつて農民の性質を變更しながら、農民を再教育し、社會主義的生產を組織し、それによつて社會の階級的分裂の基礎を廢棄する。資本

主義的分子およびその手先たるトロツキー、ジノヴィエフ、コメネフ輩の反革命的集團との激烈な闘争、益々激化しゆく闘争の過程において、黨はスターリンの指導の下に、社會主義の建設に決定的な成功を収め、資本主義的要素の残存物の粉碎と掃蕩、農業の社會主義的改造のために、一大事業を成しとげた。

「大急變の年」(一九二九年)以後、黨は社會主義的全線攻勢の結果として、ソヴェト聯邦を社會主義の時代へ引き入れ、工業および農業の領域において「誰が誰を」の問題を解決し、個人商人を徹底的に一掃し、失業と農村の貧困、およびソヴェト聯邦の雑多な制度構成を清算し、新經濟政策のロシアを變じて社會主義のロシアとなした。第二次五ヶ年計畫の根本的な政治方針は實現され、資本主義的要素および階級一般は最後のに一掃され、階級差別や搾取を生み出す原因は完全に廢絶され、經濟と人々の意識における資本主義の残存物は克服され、國內の勤勞人口全體は、社會主義社會の意識的な積極的建設者となつた。その結果として、ソヴェト聯邦では社會主義社會の建設が、單一にして唯一なる社會主義的生產様式を以て貫かれた、社會主義社會の建設が完成を見るに至り、今や社會主義的生產様式が、ソヴェト聯邦の經濟を支配してゐる。全聯邦共産黨はスターリンの指導の下に、かうした歴史的業績を成しとげたのであるが、そのために

は、一國社會主義の建設は不可能だといふメンシェヴィキ的理論をあくまで棄てなかつた、トロツキー、シノヴィエフ、カメネフ輩の反革命派を粉碎し、彼等と共に、かうした理論を抱いてゐた右翼日和見主義および「エセ左翼」日和見主義をも粉碎せねばならなかつた。スターリンはあらゆる反レーニンの集團と火の出るやうに闘つて、一國社會主義の建設といふレーニンの理論を堅持し、この理論をさらに發展させ、その内容を深め、ソヴェト聯邦の實例によつて、この理論の正しいことを事實上に證明した。

資本主義から社會主義への過渡期に、共産主義の第一(下級)段階たる社會主義が建設される。この段階の特徴をなすものは、「ブルジョアの權利」の殘滓、すなはち勞働および消費の標準化、その國家統制がまだ残つてゐることである。社會主義の下における分配は、「能力に應じて各人から取り、勞働に應じて各人に與へる」といふ原則に従つて行はれる。第二次五ヶ年計畫の主要任務——社會主義社會の建設——を果した上で、ソヴェト聯邦は共産主義へと進みゆくであらう。生産力の今後の巨大なる發達、精神勞働と筋肉勞働との差異を絶滅し、需要に應じた生産物の分配と國家の死滅とを特徴とする、共産主義の最高段階へと至るであらう。「共産主義社會のより高き段階では、人間を奴隸化する分業への從屬が消滅し、それと共に、精神勞働と筋肉勞働

との對立が消滅した後に、勞働が單に生活のための手段ではなくなり、勞働自身が生活の第一欲求となる時、個人の全面的發達と共に生産力も増大し、共有財産の一切の源泉が涸々と流れ出づる時、その時に初めてブルジョア法思想の狹隘なる眼界は完全に克服され、社會はその旗に次の如く書き記すだらう、『各人は能力に應じて働き、欲望に應じて各人に與へよ』と。⁽¹⁾

(1)「ゴータ綱領批判」全集第十五卷、二七五頁。

五つの社會的構成態を區別する際に、すべての民族は必ずその發展中に、以上すべての構成態を頂次に通過する、と考へてはならない。具體的な歴史的條件と事情とに應じて、各種民族は先階級社會から無階級社會への、彼等のすべてに共通なる道を色々に通過する。例へば、奴隸と奴隸主との分裂は、社會の階級への最初の分裂であり、原始社會の胎内で既に發生したものであるが、しかしこの家長的奴隸制は、到る處で奴隸制構成態へと發達して行つたわけでない。例へば、ゲルマン民族の間でも、スラヴ民族の間でも、奴隸制は構成態にまで發達せず、共有制の封建的所有への轉化、自由共產村落民の從屬農民への轉化に當つて、副次的な役割しか果さなかつた。奴隸制構成態の可能性は、家長的奴隸制において既に存してゐたが、しかし一定の歴史的條件の下でのみ、例へば古代世界にこれを見るやうに、この可能性は實現性へと轉化した。必ずし

もすべての社會が、資本主義的構成態又は封建的構成態を通過するわけではない。ロシアにおける社會主義革命は、その他の諸國のために、資本主義的發展段階をさへ（家長制度の存する民族にあつて）避け得る可能性を開いた。マルクスは超歴史的圖式を押しつけるといふ意見に反對した時、まさしくこの事を念頭に置いたのである。またレーニンが歴史的發達の順序や形態の特性に言及して、それは世界史の一般的合法則性を廢棄するものではないと云つた時も、この事を念頭に置いたのである。

八 構成態と生活様式

敵對的構成態および過渡期における經濟的構造は、色々な型の生産關係を含んでゐる。「經濟學批判序説」の中でマルクスは次の如く言つてゐる——「ブルジョア社會は、最も發達した、最も多様化された歴史的生産組織である。その諸關係を表現する範疇、その構造を理解することは……同時にすべて死滅し去つた社會的形態の構造と生産關係を洞察する可能性を與へる。ブルジョア社會はこれらの社會的形態の廢墟や要素から成り、その一部は、ブルジョア社會がまだ克服し切らない遺物として餘命をつなぎ、一部は、以前にただ暗示としてのみ存在したものか、充分な意義に

まで發達する。」例へば、古代奴隸制構成態には、支配的な奴隸制生産様式と並んで、それとは異なる次の如き經濟制度が認められる。奴隸制の一つの源泉となつた自由なる零細地經濟、奴隸労働に比較してより生産的な労働形態としての封建的諸關係の萌芽（コロナツス）。封建的構成態は氏族社會および奴隸制社會の遺物をも、新しい資本主義的生產様式の萌芽をも共に含んでゐる。

(一) マルクス・エンゲルス全集、第十二卷第一冊、一九五頁。

資本主義的構成態は、支配的な資本主義的生產様式と共に、既に死滅し去つた生産様式——封建農奴制社會、奴隸制社會、氏族社會——の遺物をも含んでゐる。資本主義的構成態は、それ以前の構成態の中に「暗示として」、即ち萌芽として存した價值法則、および商品交換を、最高度にまで發達させた。レーニンは過渡期の始めに次の如く指摘した。我が國には五つの異なる經濟制度がある。(イ)家長制經濟(大部分は自然經濟)、(ロ)小商品生産(穀物を賣る農民の大多數)、(ハ)私經濟的資本主義、(ニ)國家資本主義、(ホ)社會主義。レーニンは、これらすべての制度のうち、結局は社會主義的制度が勝利をとげ、一つを驅逐し、他を改造してゆくと思做した。次にスターリンは第十七回黨大會において既に次の如く云ふことが出來た。——「第一と第三と第四の社會經濟的制度はもはや存在せず、第二の社會經濟的制度は第二位に驅逐され、第五

の社會經濟的制度——社會主義制度——は、全體的に支配的な力となり、國民經濟の全體に亘つて唯一の統制力となつた。」と。

(一) スターリン「レーニン主義の諸問題」五五五頁。

尙ほ注意しておくが、舊き生産様式のこれらすべての殘存物、又は新しき生産様式の萌芽は、支配的な生産様式とは無關係に獨立に存在してゐるのではない。各々の構成態には、何らかの支配的な型の生産關係があつて、これが所與の構成態の基礎、その運動法則をなし、爾餘の一切の型の生産關係を己れに従屬させ、それを適宜に変更させて、その體系の中に含んでゐるのである。「それぞれの社會において、生産關係は一個の全體をなしてゐる」(マルクス)。例へば資本主義の下では、資本主義的諸關係が他のあらゆる型の生産關係を驅逐するか、自己に従屬させるか、又はこれを變更するかしてゐる。ソヴェト聯邦では、社會主義的制度は國民經濟全體に亘つて、全體的に支配的な力となり、唯一の統制力となる以前から、その他の制度に對し、同じやうな指導的役割を果してゐた。あれこれの制度が、支配的な生産様式に有機的に依存してゐる明白な一例は、例へば零細地經濟である。それが發達の道程は、各種の構成態においてそれぞれ異つてゐる。古代社會では、支配的な大奴隸主經濟との闘争に堪え得なかつた、自由零細地農民の發達方

向は、奴隷となるか、乃至は中世的農奴の先祖たるコロナトとなるかといふ方向が、主要なものであつた。封建主義の時代には、自由なる零細地經濟は封建的諸關係の軌道に巻き込まれて、農奴化せられた。エンゲルスの適切な表現をかりれば、古代のコロナトと中世の農奴との中間には自由なフランク人がゐた。商品資本主義的諸關係の支配する處では、全く新しい資本主義的發達の道が農村の前途に開けた。すなはち「農民は商品生産者となり」、大たいに血族を同じくしてゐた村落は打ち裂かれて、新しい階級差別が發生し（富農、中農、貧農、作男）、新しい搾取形態と階級闘争が發生した。社會主義革命（一九一七年十月）のみが、すべて從來の構成態とは原則的に異なる發展の道を、長い長い間の搾取（それが如何なる形で表はれてゐようと）から解放される道を、窮乏を一掃し、農業を社會主義的に改造する道を、農民の前途に開いた。このやうに謂ふところの社會制度とは、特定の型の生産關係を指すのであるが、この生産關係は支配的な生産様式ともなり得るし、舊き構成態の胎内における、新しい社會經濟構成態の萌芽ともなる得るし、又は新しい構成態の下における舊き構成態の遺物でもあり得る。尙ほ、各種の構成態に於てこの制度が（もちろん相應の變更を受けて）存在する場合もあるが、しかしこれらの制度は決して支配的な生産様式では發達しない（例へば單純商品生産）。

かやうに、敵對的な構成態も生産有機體である。言ひ換へれば、支配的な規定的生産様式を有する或る統一體ではあるが、この生産關係體系は、支配的な生産様式によつて變更され、それに緊密に従屬するところの、種々雑多な經濟制度を含んでゐる。先階級的構成態（その崩壞以前）と無階級的な共產制構成態においてのみ、生産關係は全く同質的なものである。

第七章 社會發展の原理

一 世界史の統一と生産力

マルクス・レーニン主義の古典家たちは、生産関係を抽出し、これを以て、あらゆる社會の眞の土臺をなす經濟的基礎となすことにより、生産關係と、上部構造的諸形態（國家、家族、法律、宗教、科學、藝術等々）を形成するところの、その他の一切の社會關係との間に區別をつける。土臺と上部構造とを區別することは、社會的全體およびその一切の要素の交互作用における、各々の社會的形態の地位と役割とを理解する際に、その發足點となる。ブルジョア社會學說が社會發展の究極の原因と見做すものは、何かの個々の要因の作用か、又は色々な同格の獨立した要因の共同作用かであるが、土臺と上部構造との理論は、かゝるブルジョア社會學說とは相容れず、社會を生産有機體として考察し、社會的全體の種々さまざま側面の交互作用といふ事實そのものをも、交互作用する力の源泉そのものをも共に説明する。

歴史唯物論が社會的發展の根本原因と見做すものは、究極において生産力的發展である。生産

力は、先づ第一に、各種の構成態を聯結する鎖の如きもので、人類の歴史的發展に繼起性と連續性を持ち込む。マルクスはアンネンコフ宛の手紙に次のやうに書いた——「各々後續の世代は、先行の世代によつて獲得された生産力を見出し、これを新しい生産のために云はば原料として自分の用に供するといふ單純な事實によつて、人類の歴史に繼起的聯關が生じ、人類の歴史が形成される。そして人類の歴史は、人間の生産力が、従つてまた彼等の社會關係が發展すればするほど、ますます人類の歴史となる。」⁽¹⁾

(1) マルクス・エンゲルス二卷選集、ナウカ社版、第一卷三七九頁。

かくて人類史の基礎を形成するものは、生産力である。生産力的發展は個々の社會の歴史を變じて、人類の世界史となす。先資本主義的構成態における生産力發展の極度に低い水準は、何らかの程度に、個々の種族や民族および國家の「原始的孤立性」を作り出したが、資本主義的大工業が發達して、競争を普遍化し、交通機關と世界市場を創造するに及んで、各文明國民や各個人の欲望満足が全世界と關係を持つやうになり、從來の如き個々の民族の孤立性が取り拂はれたかぎり、茲に初めて一の「世界史」が作り出された。⁽²⁾しかるに、資本主義的生產様式に固有なる内的矛盾は、資本主義が獨占的段階に達し、戦後資本主義の一般的危機が起り、ファシズムが増大

するに及んで、極度にまで尖鋭化されたが、それと同時に、この矛盾は帝國主義諸國間のあらゆる對立を暴露し、それを極度にまで激成し、他方では、個々の國々でも、資本主義諸國の交互關係においても、資本主義經濟の計畫的統制の可能性を取り拂つてしまつた。ファッショ的傾向の増大は、各國の隔絶性と割據性とを極度にまで押し進め、野蠻なる排外主義を發展させ、かくして「自國人種」を、他國人種を支配する使命を有する、世界史の擔當者だと稱してゐる。資本主義の革命的變革と、世界の主要諸國における社會主義の勝利のみが、初めて人類史上に、眞の計畫經濟的な世界の統一を創造し、かくして、人類が世界史の意識的創造者となるための、一切の必要な條件も作り出す。

(一) マルクス・エンゲルス全集ロシア版、第四卷、三六頁、五〇頁。

かやうに生産力の前進的發展は、個々の社會の經濟的聯結をますます擴大して、人類の世界史の形成へと向つてゆく。社會經濟制度が生産力のこれ以上の發達の障害となつてゐる處では、人類既得の生産力を保存し、それをさらに發展させるために、これまで生産力の中で發達してきた生産關係を打ち破らねばならぬ。かかる生産力停滯の明白なる實例は、資本主義の一般的危機を土臺として起つた世界經濟恐慌で、これは資本主義的生産力を破壊するものであり、資本主

義の下では、生産力のこれ以上の發達が不可能なることを證明してゐる。

二 技術と生産力

自然に對する人類社會の支配の程度も、人類社會の所與の經濟的構造も、これを究極において決定するものは、生産力の發達である。技術の一定水準は、常に、それに照應した人間労働力の發達程度、生産關係、およびこの生産關係を土臺に發達する上部構造を伴つてゐる。「手臼があれば……領主を頭に戴く社會であり、蒸氣製粉機があれば、産業資本家を頭に戴く社會である。」

この命題をマルクスは「資本論」の中でさらに敷衍して、次のやうに定式づけてゐる、「技術學なるものは、自然に對する人間の能動的關係を、人類生活の直接的生産過程を解明し、従つてまた人類生活の社會關係、およびそれから生ずる精神的表象を明かにする。」^(一)「資本論」の他の箇所では、マルクスは次のやうに指摘してゐる——「經濟的時代を區別するものは、何が生産されるかといふことではなく、如何にして、如何なる労働要具によつて生産されるかといふことである。」^(二) エングルスも一八八四年六月二十六日、この意味のことをカウツキーに書き送つた——「君の場合にはさうなつてゐるが、農業や技術を經濟學から切り離してはならない……輪作、人工施肥、

蒸氣機關、織機は、蒙昧人や野蠻人の道具が、彼等の生産から切り離されないやうに、資本主義的生産からも切り離されない。丁度、最新式の道具が、資本主義社會を制約してゐると同じ程度に、蒙昧人の道具は、彼等の社會を制約してゐる。^(三)

(一) 「哲學の貧困」マルクス・エンゲルス全集、ロシア版第五卷、三六四頁。

(二) 「資本論」第一卷、改造社版、四一九頁。

(三) 「マルクス・エンゲルス・アルヒーフ」第一卷(通卷第六卷)二六二頁。

かやうに、所與の社會的經濟構成態の發達を通じて、特定の型の經濟關係は、これに照應する生産力發達の型と水準によつて規定される。技術を修得せよといふスターリンの有名なスローガンは、一方では、技術と生産力とのこの統一を表現し、他方では、技術的變革が無階級の社會主義社會の建設のために有する意義を表してゐる。このスローガンの中には、社會主義經濟の基盤を建設し、この基盤の上に社會主義の上部構造形態を建てる上に、國內の技術的改造の有する絶大なる意義が力説されてゐる。資本主義とその根元を絶滅し、社會主義を建設するには、都市および農村における生産力を増進させることが、決定的な意義と役割とを有してゐるといふことを、スターリンは第十八回黨大會で述べてゐる。「従つてコルホズとソフホズとのために、二十萬四

千臺のトラクターと、三百十萬馬力とが必要だ。これによつて見るに、農村における資本主義のありとあらゆる根因を根こぎにし得る力は僅少でない。この力は、嘗つてレーニンが遠い將來のことと述べたトラクターの數を二倍も越えてゐる。^(一) さらにスターリンのスロトガンの中には、技術幹部の問題、熟練労働力の問題が、社會主義建設のその他あらゆる條件のうちでも、最も重要な條件として正面に押し出されてゐる。第十七回黨大會の政治報告の中でスターリンは次の如く指摘した——我らの工業業績の中でも、最も重要な業績と見らるべきものは、新技術を修得し、わが社會主義工業を前進させた、數千の新しい人々や新しい産業指導者、新しい技師や技術家の全層、數十萬の若き熟練労働者が、この期間中に教育され養成されたことである、と。さらにその後、スターリンは冶金學者との會見において、社會主義的生産力をより以上發展させるために、その主要課題として、幹部養成の問題が極めて重要な所以をもう一度明白深刻に力説した。「才能のある、物解りのよい労働者を大切にし、彼等を大切に養成せねばならぬ。園丁が見事な果樹を育て上げるやうに、人間を大事に用心深く養成せねばならぬ。」^(二) 一九三五年五月四日赤軍大學卒業式の歴史的演説において、スターリンは次の如く述べた——「技術が萬事を解決する」といふスローガンは、我々が技術の領域における飢餓を清算し、極めて廣汎な技術的基礎を作り

出すのに役立つた。今日では人の問題が重大だ。技術を利用しつくすためには、技術を修得した人間が必要だ。「技術を修得した人間がなければ、技術は死んでゐる。技術を修得した人々を先頭とする技術は、奇蹟を興へるし、興へるに違ひない。」故にスターリンは、「幹部が萬事を解決する」といふスローガンを提唱してゐる。生産力の巨大なる増進について、労働力に決定的な意義のあることを示す明かな實例は、スタハノフブスイギン運動で、この運動は、「技術的に基礎づけられた」標準を數倍も凌駕し、資本主義的生産力に比して、より高度の労働生産率獲得の旗を押し立てたのである。

(一) スターリン「レーニン主義の諸問題」五六五頁。

(二) 一九三四年十二月二十九日「ブラウダ」

以上の所論においてスターリンは、生産力の發達（ソヴェト聯邦では社會主義的生産力の發達となつてゐる）が究極において社會的發展の原動力であり、社會主義もすべて歴史上の生産様式と同じく、それに照應する技術的土臺に立脚してゐる、といふ歴史唯物論の根本命題を、ソヴェト聯邦の條件に適用して發展させ、その内容を豊富にしてゐる。第二次五ヶ年計畫の主要な經濟的課題は、取りも直さず國民經濟の改造を完成し、國民經濟のあらゆる部門のために、最新式の

技術的基礎を創造することである。さらにスターリンは、生産力のあらゆる要素に比較して、「最大の生産力」（マルクス）である労働力の主動的な意義を力説してゐる。再建期の初年には、社會主義經濟の發展は、第一番に廣汎な技術的基礎の創造を必要としたが、技術の領域における飢餓が清算された今日では、高級熟練幹部の養成、労働者階級の文化的技術的向上といふことが、正面に押し出されてゐる。

三 生産力の發展形式としての生産關係

技術および技術的労働といふ形を取る生産力なるものは、人間労働力の發達を示す尺度でありその生産率の水準を示すものであり、社會的生産過程がその中で行はれる社會關係の指針である。一切の社會的發展も、結局は生産力の發達から説明される。それでは、生産力の發達そのものは何に依存するか？ それを決定するものは何か？

第二インターナショナルの理論家たちは、歴史唯物論を觀念論的な社會學にすり替へ、自然科学の發達を以て技術進歩の原因となし、技術を結局自然認識の過程と同一視する。生産力の發達は、彼等によつて實は精神的過程に還元され、自然に關する我々の知識の増進といふことに歸せ

られ、そして生産關係は生産力の受動的結果として考察される。資本主義の下では、生産力は無限に故障なく發展し得る、この關係は生産力發展の障害とはならない、といふメンシェヴィキ的理論も、その由つて來るところは右の所論である。プロレタリア運動の未成熟を證明する目的から、生産力の「不充分な」發展を引き合ひに出すのも、さうである。ブハリンは生産力發展の觀念論的説明に反對しながら、實は機械論的な自然主義的見地に立つてゐる。ブハリンは生産力を物といふ見地から發足して、「一方では、機械や色々な種類の原料や燃料等々の總體、他方では色々な種類の勞働力現物の總體」(「過渡期の經濟」)として考察し、生産力からその社會的形式、階級闘争を抽象し、何から何まで彼自身の機械論的均衡論に一致して、生産力發展の源泉を環境と社會との交互關係に求めてゐる。「社會と自然との闘争、自然の『人間化』過程の増進、一の對立の他の對立への不斷の滲透は、あらゆる運動の根柢をなしてゐる。すなはち、それは社會の生産力發展の合法則性であり、その自己運動の基礎である。」(ブハリンは生産力の社會的性質を無視してゐる。彼のエネルギー・バランスの學説は、生産力一般(その發展形式には關係のない)の發展そのものを、社會と自然との均衡條件、および上向線を迎る社會の發展だと主張してゐる。なかんづく、「富を作れ」といふスローガン、國土工業化に對する右翼日和見主義的拒否、

重工業を犠牲として輕工業を第一番に發展させるといふ主張、搾取農の社會主義への轉生等々も、かかる理論によつて基礎づけられてゐる。

(一)「社會主義的再建と科學」モスクワ、一九三三年、第四冊、一二頁。

以上すべての歴史唯物論の歪曲や偽造に共通なる誤謬は次の點にある。即ち、生産力發展の原因を考察する際に、生産力の社會的形式たる生産關係を無視し、生産力の社會的性質、即ち階級的性質を事實上否定し、生産力を社會と自然との「極限概念」に還元し、これをただ物といふ見地からのみ考察し、生産力を以て、何ら階級的性格のない中立的なものと見做すことこれである。

歴史唯物論は生産力を一の社會的範疇として考察する。自然力(生産手段と勞働力)は、兩者が結合する場合に初めて社會的生産力となるが、この結合の在り方や性質、即ちその社會的形式は、取りも直さず歴史上特定の型の生産力を特徴づける。かやうに生産關係は生産力の存在形式となり、人間の社會的生產的活動の、人間の自然への働きかけの形式であり、結果であり、かかるものとして、また一の物質的な關係である。

レーニンが指摘したやうに、社會的諸關係は物質的關係とイデオロギーの關係とに區別され

る。後者は「前者に對して上部構造たるにすぎない。前者は、人間の意志や意識を離れて、彼等の生存の維持を目的とする人間の活動の形式（結果）として構成される。」⁽¹⁾レーニンは、生産關係は意識から獨立してゐるといふ、マルクスの提言に反對した多數の「批判家」たちの「論據」を論破して、次の如く指摘した。「社會的存在が意識から獨立してゐるといふマルクスの提言は、『意識を有する生物、即ち人間の社會が、意識を有する生物の存在とは關係なく存在し、且つ發達する』⁽²⁾といふことを意味しない。」⁽³⁾「人々が互に交はり、意識を有する生物として共存關係を結ぶといふことは、社會的意識が社會的存在と同一だといふことには斷じてならない。人々は互ひに關係を結ぶが、すべて幾らかでも複雑な社會構成態では——殊に資本主義的社會構成態では——そこにどんな社會關係が組織されるか、それが如何なる法則に従つて發展するか、などといふことは意識しない。例へば、農民は穀物を賣ることによつて、世界市場の上で世界中の穀物生産者と『共存』關係を結ぶが、その農民はそれを意識しないし、交換からどんな社會關係が組織されるかも意識しない。」⁽³⁾かやうに、生産關係なるものは、人々の社會的生產活動の歴史上特定の形式であつて、人々がこれを意識すると否とに拘らず、それ自身の内在的な客觀的論理に従つて發展する。まさにこの點に、生産關係の物質性と客觀性があるのである。

- (一) 全集、第一卷、七〇頁。
(二) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫、下卷、一一三頁。
(三) 同上、一一〇頁。

資本主義社會では、生産關係が組成され發展する過程は、そこで如何なる社會關係が組成されるかといふことを、人人が意識することなしに自生的に行はれる。資本主義社會では經濟的諸關係は、恰かも人々の意識や意志から獨立して或る外的な自然力と同じやうに、自然法則の必然性を以て組成され、社會や國家の計畫的な作用に従はない。そこでは人々は彼等自身の同じ社會關係の奴隸である。これに反して、社會主義時代は原則的に異つた状態にある。社會主義的生產關係發展の法則性は、もはや自生的なものではない。社會主義の不では、生産關係は自生的に組成されず、プロレタリア國家の計畫的な意識的統制に基いて組成される。しかし勿論これは、社會主義的生產關係が人々の意志や意識によつて決定されるといふことを意味しない。むしろ反對にソヴェト聯邦でも、生産關係は同じく人々の物質的な生産活動の必然的形式であり、生産力の發達水準によつて規定され、人々の意識や意志を離れて、獨立に、すなはち客觀的に存在し、意識や意志を決定する。しかしながら、資本主義とは違つて、ソヴェト聯邦における生産關係の形成

過程は自生的なものではなく、自然發生的には起らない。そこでは生産関係は、搾取農資本家や小ブルジョアの生活様式や習慣や傳統等々の闘争のうちに、豫め意識され、算定された過程として形成される。黨の指導するプロレタリア獨裁は、資本主義的諸關係を廢絶し、個人經營農民を集團農に改造しつゝ、社會主義的生產關係を意識的計畫的にますます強化させ、これを新たに創造し、擴大して行く。かくてすべて從來の構成態とは異なり、社會主義の下で人類は初めて、一の共同意志に導かれ、統一的な計畫に従つて、自分の歴史を意識的に創造する。社會主義の下では、社會的發展の盲目的な自然力や自生的法則は支配しなくなり、人類は必然の天國から自由の天國へ飛躍をとげ、すべて從來の歴史とは原則的に異つた、それにのみ固有なる合法則性を有する、新しい社會制度が発生する。

共產主義の下では、社會關係は人々の意識的な意志によつて設立され、人類自身の社會的統制に服し、組織された集團意志に従屬する。そのために、かうと思ふ結果が達せられる。しかし、生産關係が自主的に組成されるか、それとも意識的に組成されるかには關係なく、すべての社會構成態において、生産力の發達は、その發展形式たる生産關係の影響を受け、生産關係の運動法則に支配される。例へば、資本主義發展の向上期には、資本主義的生產關係は生産力の巨大なる

發達のために、近代的な機械技術の創造のために、十分な餘地を與へた。しかるにその後、生産力のより以上の發展、技術および社會的労働のより以上の進歩は、資本主義的私有制度に制限され、阻止されるに至つた。後者は各種企業の計畫的協業と相容れず、社會化された労働に一定の制限を加へ、技術の改善といふことを、技術がどれだけの労働量を節約するかといふことでなく、支出労働量が技術費と補ふかどうかといふことできめてかかり、そのために技術の發達を制限してゐる。生産力と生産關係との矛盾は、生産の社會的性質と私有制との矛盾として現れてゐる。帝國主義の時代となつて、この矛盾はさらに一層尖鋭化し、複雑となつて、技術の衰頽をきたしてゐる。「たとへ一時的にもせよ、獨占價格が設けられると、技術的進歩への、従つてまたその他のあらゆる進歩への、前進運動への動機が或る程度で消え失せ、技術的進歩を人為的に阻止せんとする經濟的可能性が起つてくる。」⁽¹⁾

(1) レーニン「帝國主義論」岩波文庫、一四三頁。

資本主義の一般的危機といふ特殊條件は、生産力の發達をさらに一層阻害してゐる。「技術を棄てよ」といふスローガン、石炭鑛業に穿孔機の使用が一部分廢止され、建築業に機械使用を廢止して、鶴嘴やシャベルを以てし、農業ではトラクターを廢止して、馬引車を代用するなど。

もちろん、技術の衰頹といふことは、生産力發達のための一切の可能性が全くなくなつたといふことではない。技術の不均等なる發展の結果として（一般に資本主義全體と同様に）、個々の國における個々の産業部門には、技術のより以上の進歩は行はれてゐる。

ソヴェト聯邦では、これとは原則的に異つてゐる。社會主義的生產關係は、都市および農村における社會主義的生產力の躍進の最大要因となつてゐる。國民經濟の技術的再建に基いて、社會主義經濟に照應する技術的基礎を創造するといふのが、ソヴェト聯邦の根本的な經濟方針である。例へば、畜産奨励事業について、黨が取つてゐる方針は、社會主義的經濟形態の發達強化、コルホズ農場や畜産ソブホズの發達に、畜産發達の重點を置くといふことから發足してゐる。「わが國の畜産全體、農業全體は、これを基礎として向上しつゝある。」（モロトフ）

ソヴェト聯邦における生産集積の發展テンポは、その水準から見ても、最も進んだ資本主義諸國を凌駕した。「わが國は最も集中された工業國となつた。これは、我々が最優秀の技術を基礎として、わが國の工業を建設し、これによつて、未曾有の勞働生産率を、未曾有の蓄積テンポを保證して得るといふことを意味する。」⁽¹⁾

(1) スターリン「レーニン主義の諸問題」四四二頁。

四 社會的發展の起動力としての生産力と生産關係との矛盾

生産力と生産關係との發展過程は、何か受動的な過程ではなくて、激烈な階級運動の過程において行はれる。例へば、資本主義の下では、絶對的餘剩價値の生産方法（勞働日の延長、賃銀のひき下げ等々）に對する勞働者の闘争は、資本家をして技術の改善へ赴かしめ、相對的餘剩價値の生産方法へと向はしめた。「一八二五年以來、殆どすべての新發明は、企業家と勞働者との衝突の結果であつた。企業者は、専門勞働者の勞働賃銀を全力をあげてひき下げやうとしたのである。幾らか目立つたストライキのある毎に、新機械が現れてゐる。」⁽¹⁾スターリンは、「再建期には、技術が萬事を解決する」といふスローガンを提唱した時、技術修得の任務そのものを狭い技術的任務とは考へず、プロレタリア獨裁時代における階級闘争の最重要なる任務の一つと見なしてゐた。「もし我々がはるか以前に技術の研究と技術の修得に移り、もつと度々且つ克明に經濟の指導に加はつてゐたら、妨害者⁽²⁾もはあれほど多くの損害は加へ得なかつたらう。」⁽³⁾

(1) マルクス・エンゲルス全集、第五卷、三八九。

(2) スターリン、前掲書、四四四頁。

かやうに、各々の社會的構成態において、生産關係は所興の生産力の發展法則をなしてゐるが、このことは、生産力そのものの發展の內的論理を排除するものではない。「例へば、機械紡績は織機を必要ならしめ、兩者は共に、漂白業や着色染業における機械的化學革命を必要ならしめた。」⁽¹⁾しかし、この發明の內的論理は、生産力の増大をひき起しながらも、自らは結局その社會的形態に従つてゐる。

(1) 「資本論」第一卷、ロシア譯一九三四年版、四三三頁。

生産關係は一の態動的役割を果し、生産力の發展形式をなしてはゐるが、しかし、生産力と生産關係との矛盾した發展において主要な役割を果すものは、内容即ち生産力の發展である。形式即ち社會的經濟的構造は、それに對應する内容（生産力）から生じながら、同じ生産力のより以上の發展の結果として廢棄される。生産力の發展變化の結果として、社會的形態——生産關係——が崩壊するといふこの法則は、社會發展に關するマルクス・レーニン主義的理論において中樞的地位を占めてゐる。しかしながら、形式は内容の受動的な結果ではなく、形式は形式で内容の發展に影響を及ぼすのだが、プレハノフは實はこの點を認めなかつた。すべての歴史的生産様式の起動的端初としての、生産力と生産關係との矛盾した發展は、人類史の一般法則である。この

法則の古典的な定式を、マルクスは「經濟學批判」の序文中に與へてゐる。「社會の物質的生産力は一定の發達段階に達して、これまで生産力がその内部で發達してきた、既存の生産關係と矛盾するに至る。この生産關係は生産力の發展形式から變じてこれが桎梏となる。その時、社會革命の時期が到來する。」⁽¹⁾

(1) 全集、第十二卷第一冊、七頁。

各構成態の胎内で生産力が熟成することは、同時に、新しい生産様式のための、新しい構成態のための物質的前提が作り出されることである。「如何なる社會的構成態と雖も、まだ十分に餘地のある、すべての生産力が發展する以前に、没落するといふことはなく、また新しいより高次の生産關係は、それが存立の物質的條件が、舊社會自身の胎内で成熟する以前に、出現するといふことは決してない。されば人類は常に解決し得る問題のみを提出する。何故なら、仔細に觀察してみると、問題そのものは、それが解決の物質的條件が既に存在するか、又は尠くとも生成の過程にある時に、初めて生ずることを悟るであらう。」⁽¹⁾しかし、この點でも、封建的構成態から市民的構成態への推移は、社會主義的變革とは根本的に異つてゐる。すなはち、資本主義的生產様式は封建的構成態の胎内で作り出され、そしてブルジョア革命の根本課題は、この點からすれば、

それに照應する上部構造的形態を作り出す事であるが、これに反して社會主義的生産様式は、プロレタリア獨裁の樹立後に初めて創造されるのであり、そしてプロレタリア獨裁の根本課題は階級を絶滅し、社會主義を建設することである。資本主義の胎内に生れるものは、社會主義の物質的前提だけである。資本主義的私有制度の狭い枠をはみ出す社會的生産力だけである。この物質的前提を新しい質に變じ、社會主義的生産力となし、これをさらに發展させるには、プロレタリア獨裁を樹立することが必要である。

(一)同上。

かやうに、生産力と生産關係との辨證法的交互作用は、人類史の一般的法則をなしてゐる。各々の生産様式は、生産力と生産關係との矛盾の、それにのみ固有なる性格と形式とを有してゐる。

例へば、單純商品經濟の下では、生産力と生産關係との矛盾は、直接的生産者——生産手段の所有者——の私的労働とその労働(即ち個人的労働)の社會的性質との間の矛盾として現れる。この矛盾は、商品の内的矛盾をなす労働の二重性となつて明白に現れる。

資本主義的生産様式の下では、生産力と生産關係との矛盾は質的に變化して、生産の社會的性質と資本主義的私有との矛盾となる。労働の社會化が絶えず増進し、各種の産業部門が細分化さ

れ、専門化されるために、生産者間の社會的聯結はますます緊密となる。「かくして一切の生産は一個の社會的生産過程に融合されるが、その一方で、すべての生産は個々の資本家によつて運営され、彼の恣意に支配され、社會的生産物は彼の私有物となる。」^(一)かやうに、生産形態は私有形態と相容れない矛盾に陥り、この矛盾は、先づ第一に、プロレタリアとブルジョアとの相剋となつて現れ、個々の工場における生産組織と社會全體における生産の無統制との矛盾となつて現はれる。

(一)レーニン全集、第一卷、九二頁。

ソヴェト聯邦における過渡期には、生産力と生産關係との矛盾の性格は原則的に變化して、違つた形をとつてゐる。生産手段の公有化に立脚せる社會主義的生産關係は、資本主義におけるよりもより高度の労働生産率を必要とする。それは、生産の巨大なる發展、技術的改善の生産への導入、労働者および生産指導者の文化的生産的水準の向上を促進し、かくして自己に適合した型の生産力を創造する。一つの生産様式が他の生産様式に代るのは、究極において、より高度の生産率を發達させるからである。「何故に社會主義は資本主義的經濟體系に勝ち得るし、また必ず勝つのか? 資本主義的經濟體制よりもより高級なる労働様式、より高度の労働生産率を與へ

得るからだ。社會に對して、資本主義的經濟體制よりも多くの生産物を與へ、社會をより多く富ましめるからだ。^(一)「尙ほスターリンは次のことを力説してゐる。「新しいより高度の技術的標準の標範の表現としてのスタハノフ運動は、高度の勞働生産率を示す模範であつて、これは社會主義のみが與へることが出來、資本主義は與へ得ないものである。」^(二)スターリンは、スタハノフ主義者協議會に出席した際、六つの條件について演説をなし、「貧農的」な平均社會主義の小ブルジョアの理論を鋭く批判し、社會主義なものは、高度の勞働生産性に起因する「潤澤な生産物や、あらゆる種類の消費對象を」土臺としてのみ、「社會の成員全體の豊かな文化生活に基いてのみ」勝利し得ることを指示した。過渡期の根本問題——完全なる社會主義の建設といふ任務——は、社會主義的生産力の全面的な發展によつて、ソヴェト聯邦の雜多な制度を清算して、社會主義制度を社會全體に亘つて唯一の生産様式に轉化することによつて解決される。この點から見ても、過渡期の經濟の特徴をなす根本矛盾は、社會主義と資本主義との間の矛盾である。「舊きものと新しきもの、亡びるものと生れ出づるものとの鬭争——ここにわが國の發展の基礎がある。」この根本矛盾の解決に向けられたプロレタリア國家の政策が、新經濟政策であつた。經濟政策は、新「最高統制權をプロレタリア國家が握つてゐて、資本主義を許容し、資本主義的要素と社會主義

的要素との鬭争を目指し、資本主義的要素を驅逐して、社會主義的要素の役割を成長させ、社會主義經濟の基礎の建設を目指すものであつた」。

(一) スターリン「スタハノフ主義者全聯邦會義の演説」七頁。

(二) 同上、六一七頁。

(三) 第十五回中央委員會政治報告。

(四) 第十五回中央委員會政治報告結語。

ブルジョア國家は、價值法則および餘剩價值法則に基く資本主義經濟の自生的發展過程を護持するものであるが、プロレタリア國家はこれとは違つて、ソヴェト聯邦の發展を自ら直接に規定し、經濟の社會主義的改造を組織する。プロレタリアの政治は、そのまゝ彼等の經濟の集中的な科學的表現である。この場合に、プロレタリアの經濟政策遂行の最も重要な要具たるものは、計畫的指導であつて、この計畫的指導の可能性および必然性そのものは、ソヴェト聯邦の經濟の本質から、重要生産手段の國有から、農業社會化の増進から生じてゐる。プロレタリア獨裁は、國民經濟全體を社會主義的に改造するための根本的な槓杆である。

五 敵對的構成態の發展および變遷の法則としての階級鬭争

階級發生前の無階級社會では、生産力と生産關係との矛盾は敵對的性質を帯びてゐないが、かうした初期の社會とは違つて、階級的構成態では、生産關係との矛盾は、それにのみ固有なる本質的特徴を有し、この矛盾は敵對關係の形式を採り、階級闘争となつて表現される。即ち、古代的構成態では奴隸と奴隸主、封建的構成態では百姓と領主、資本主義的構成態では労働者と資本家との闘争がそれである。生産過程で直接に生産者の中に組成される關係は、敵對的構成態では同時に階級的關係をなしてゐる。だからして、經濟的進化の客觀的論理を發見することは、歴史的に發展してゆく階級闘争の形態を示し、これから發足することである。故にレーニンも次の如く力説した——「マルクス主義は導きの糸を與へるので、一見混沌として捕捉しがたい迷宮の中に、法則性を發見することが出来る。それは即ち階級闘争の理論である。」^(一)と。故に階級闘争は、「太古」の状態を除き、人類の先史全體の根本的な發展法則である。ワイデマイヤーに宛てた手紙に、マルクスは次のやうに書いてゐる——「私はといへば、現代社會における諸階級の存在を發見したことも、階級相互の闘争を發見したことも、私の功績ではない……私が新たに手がけたことは、次のことを證明した點にある。(一)諸階級の存在は、専ら生産の歴史上特定の固有なる發展と關係があること、(二)階級闘争は必然的にプロレタリア獨裁へと通じてゐること、(三)

この獨裁そのものは、一切の階級の絶滅への階級なき社會への過渡期をなすにすぎないといふとこれである。^(三)

(一)マルクス・エンゲルス二卷選集、第一卷、ナウカ社版、三二頁。

(二)同上、三八四頁。

階級、および階級とつながる國家は、支配階級が握つてゐる「特別な棍棒」(レーニン)であり、「特別な統治力」(エンゲルス)であつて、何時の時代にもあつたものではない。これは社會の一定の發達段階に、つまり原始共同態の解體以後に發生したものである。生産力の發達が極度に低く、人間が人間を搾取するための經濟的基礎がなく、「血縁」關係のみが専ら支配してゐたために、原始共產態にはまだ階級も階級闘争もなかつた。その後生産力が發達するにつれて、^(一) 産態内に社會的分業の過程が起つた。いづれの共產態にも、「或る共同利害が發生し、この共同利害を守ることは、たとへ社會全體の監視の下にあつたとはいへ、個人に委ねられねばならなかつた。」^(二)その後、時の経過と共に、この職務(世襲的となつた)が、社會に對し孤立化し、自立化して、つひに社會に對する支配にまで強化された。

(一)エンゲルス「アンチ・デューリング」岩波文庫、下卷、五二頁參照。

「階級分裂の根柢をなすものは、分業の法則である」(エンゲルス)。「生産が発達して、人間の労働力が、單なる生存に必要なものよりも多くのものを生産し得るほどになり」、人間を搾取するための經濟的基礎が出来た時、言ひ換へれば、主要なる生産手段に對する私有が発生して、以前のやうに、戦争がもたらした俘虜を殺したり食つたりせず、彼等を奴隸となし、彼等の労働を利用するやうになる時、その時に初めて階級が分業に基いて發生する。しかし、すべての人が奴隸から利益をあげるわけではない。奴隸を使用し得るためには、二種類の物を持つてゐなければならぬ。第一は、奴隸の貧しい生活を維持するだけの資力、第二、労働手段。従つて、奴隸制度が可能となる以前に、生産の發達と分配の不平等とが、一定の程度に達してゐなければならぬ。やがて奴隸制は、舊來の共有生活以上に成長した、すべての民族の間で、支配的な生産形態となり、最後に共同態分裂の主要原因となる。社會的職務を専有し、残りの共同態員大衆よりも經濟的に發達した家族が、奴隸労働を廣く使用することによつて、他の共同態員大衆から抜きん出てくる。奴隸主と奴隸との、二つの階級への最初の大きな社會的分裂が發生する。かやうに階級なるものは、社會的分業の進展に基き、社會的職務を専有した家族分離に基き、生産手段に對する私有の成立(階級形成の主要原因)、およびこれを基礎とする奴隸制度の發生に基いて、原始共

産態の内的な自己解體の結果として發生したのである。

第二インタナショナルの理論家たちは、階級および國家の起源の問題でも、マルクス主義の學說に反對して、何から何までブルジョア社會學者の學說に追隨してゐる。例へば、カウツキーはグルプロヴィツの驥尾に附して、階級および國家は私有財産の結果として、內的な經濟的發展から發生したのではなく、一種族に依る他種族の征服から發生したと主張する。クノウも同じく國家の起源を征服から説明してゐる。エンゲルスは既にデューリングとの論戰において、階級は「暴力」の結果として發生したといふ見地を批判した。「私有財産なるものは、常に、生産および交換の條件が變化した結果として、生産の増強および商品交易の擴大のために、私有財産の設定が必要となる時に、初めて形成される。従つて私有財産は經濟的原因から發生するのであつて、暴力はここでは何んの役割も演じない。」⁽¹⁾

他の箇所ではエンゲルスは、經濟的發展に對する暴力の從屬的な役割を記してゐる。「暴力といふものは、經濟状態を支配するどころか、むしろ經濟的目的に役立つものである。」⁽²⁾

(1) 同上、一六九頁。

(2) 同上、一八九頁。

レーニンはマルクスの學說から發足し、その學說を敷衍し、階級に關する餘すところなき定義を與へた。「階級と名づけられるものは、歴史上特定の社會的生產體制におけるこの地位から見て、生産手段に對する彼等の關係（その大部分は法律に確認され成文化されてゐる）から見て、社會的勞働組織における彼等の役割から見て、從つてまた彼等が使用する社會的富の割合の收得法や大小から見て、それぞれ異つてゐるところの、人間の集團である。」⁽¹⁾

(一)レーニン全集、第二十四卷、三三七頁。

しかし、マルクス主義は暴力を以て、階級形成の過程における根本的な決定的要因とは認めないが、敵對的構成態における階級支配の要具、並びに構成態の革命的變遷の主要條件として、暴力が社會生活に大きな役割を演ずることはこれを認める。暴力によつてのみ、餘命を終つた社會關係を覆えして、新しい階級の支配を樹立することが出来る。レーニンは、封建制度を平民風に片づけたジャコバン派を非常に重要視してゐる。轉覆された搾取者を暴力によつて壓迫することは、プロレタリア獨裁の三つの根本課題の一つである。生産力と生産關係との矛盾した發展は、敵對的構成態では階級闘争となつて現れる。生産力と生産關係との間の矛盾は、いつも社會革命によつて解決される、すなはち、舊來の社會經濟制度の根本的な變革と、生産のより高度の發展

段階に照應する新制度の創造によつて、支配階級の覆滅によつて解決される。「社會の物質的生產力は一定の發展段階に達して、これまでそれがその内部で發達してきた現存の生産關係と矛盾し、又は、これが法制的表現にすぎないところの、所有關係と矛盾するに至る。この生産關係は生産力の發展形式から變じて、これが桎梏となる。その時、社會革命の時代が到來する。」社會革命なるものは、敵對的構成態の交代の、一の構成態から他の構成態への推移の根本法則である。尤も、各構成態においても、社會革命は特殊な形態で行はれ、それに固有なる性格的特徴を有してゐる。社會革命は階級闘争の最高の發現であり、しかも社會革命において決定的役割を果すものは、政治闘争であり、新しい生産様式を代表する階級に依る政權の獲得である。マルクス・レーニン主義の社會革命論において極めて重大な意義を有するものは、ブルジョア民主主義革命が發展して、社會主義革命となるといふ理論である。この理論は夙にマルクスが一八四八年の革命の際に唱へたもので、レーニンとスターリンとは、帝國主義時代にこの理論をさらに發展させた。第二インターナショナルの主張によれば、ブルジョア民主主義革命とプロレタリア革命との間には萬里の長城が横はり、數十年に亘る中間期があるといふのだが、これに對してスターリンは次の如く指摘した。これの「萬里の長城」説は、帝國主義の下では、ブルジョアジの反革命の指向を

言ひ繕つたものにすぎず、第二インタナショナルがプロレタリア革命、およびプロレタリア勝利のための闘争を拒否してゐることを言ひ繕つたものにすぎない、と。レーニンはすでに一九〇五年の革命の前夜に、小冊子「二つの戦術」の中で次の如く言つてゐる——ブルジョア民主主義革命と社會主義革命とは、一本の鎖の二つの環である、と。トロツキー派および右翼日和見派の密輸入者どもは、レーニンがブルジョア革命のプロレタリア革命への轉主といふ論理を立てたのは、一九一七年になつてからのことで、一九〇五年には、ロシアの經濟的後進性および労働者階級の未成熟と關聯して、革命をブルジョア民主主義的課題の遂行といふことだけに限つてゐた、と吹聴したが、スターリンはかういつた密輸入者の説を暴露してゐる。

ブルジョア民主主義革命のプロレタリア革命への轉化は、或る最小限の經濟的發達が在る時のみ可能であるとは、事實レーニンが無條件に認めてゐるところである。しかし、かうした最少限の經濟的發達が存するからと云つても、レーニンとスターリンとは、やはり革命の謂ゆる主觀的條件——労働者階級の組織力、團結力、意識性の程度、プロレタリアの革命黨の存在——を重視してゐる。「社會民主主義と農民運動との關係」といふ論文に、レーニンは次のやうに書いてゐる——「我々の力に應じて、組織された意識的社會主義革命へと移らねばならぬ」と。民主

主義革命から社會主義革命への轉化を保障する條件は、革命の進行そのものによつて作られる。革命の際には、しばしば一日が、プロレタリアの政治的發展および組織といふ點から見て、平時の發展の數十年間以上を意味すると、レーニンは力説してゐる。

先階級社會の解體過程および階級社會への推移そのものは、家長制氏族の胎内に新たに形成された諸階級の激烈な闘争の結果として、氏族秩序を打ち破り、勝利階級の國家的獨裁を樹立した社會革命の結果として行はれた。スターリンはコルホズ突撃隊第一回全聯邦會議における演説で、原始社會解體以後の人類先史の一般法則としての社會革命の法則の深遠な定式を興へてゐる。スターリンは、古代的構成態の没落における奴隸の革命、封建制度の崩壞における農奴の革命の決定的な意義、最後に、社會主義的十月革命の世界史的意義を力説し、この十月革命では、すべて従來の「一面的な」革命、一つの労働者搾取形態に代ふるに、他の形態を以てした革命とは違つて、「一切の搾取を廢止するといふ目的」が初めて立てられたと述べてゐる。

帝國主義は「社會主義革命の前夜」である。帝國主義時代には、「各國又は個々の國民經濟は自足的な單位ではなくなり、世界經濟と稱せられる一個の鎖の環へと變じた。」それ故に、産業資本主義の時代には、プロレタリア革命の前提を分析するのに、通常、あれこれの國の經濟的狀態

といふ見地から取扱はれたが、帝國主義の時代には、かかる取扱方は既に不充分となり、「今日では、一個の全體としての、帝國主義的世界經濟の全體に革命の客觀的前提があるかないかを問題とせねばならぬ。しかもこの世界體制内に、産業といふ點で發達不十分な數ヶ國があることは、全體としての體系が既に革命を孕んでゐるならば、否、むしろ既に孕んでゐるが故に、克服しがたき障害とはなり得ないのだ。」だからして、資本主義の不均等なる飛躍的發展の向ふところ、帝國主義の下では、「帝國主義の世界戰線が、革命によつて非常に傷き易くなり、個々の國に依るこの戰線の切斷が確實となるに至つた。」帝國主義戰線が弱い個所で切斷され易いことは明かである。世界帝國主義の鎖の革命的切斷は、最も弱い一環に起るが、しかも最も弱い一環で鎖が切斷されるためには、この一環が産業發達の水準から見ても、平均的に弱いといふことが必要である。言ひ換へれば、「この國に一定の最小限の工業發達と文化とが在ること」が必要である。この國に一定の最少限の工業プロレタリアが居ること、プロレタリアとその前衛とが革命的であること、帝國主義との決戰期においてプロレタリアに味方する眞劍な同盟軍（例へば農民）が居ることが必要である。

プロレタリア革命における労働者階級の同盟軍および豫備軍の問題、すなはち農民問題と民族

植民地問題は、階級闘争およびプロレタリア獨裁に關するマルクス・レーニン主義の最も重要な一部である。マルクスとエンゲルス以後、政權獲得および社會主義建設のためのボルシェヴィキ黨の闘争と聯關して、農民問題を深く究明したのは、レーニンとスターリンだけであつた。第二インタナショナル諸政黨の間には、農民問題はどうでもよい、否、農民問題を端的に否定する意見、農民はいつも反動的だといふ理論が専ら行はれてゐる。農民問題に對してかうした無關心な態度をとるのは、スターリンが指摘してゐるやうに、「これらの諸政黨がプロレタリア獨裁を信ぜず、革命を恐れ、プロレタリアを權力につけやうとしないからであり、そして革命を恐れる者、プロレタリアを權力につけやうとしない者が、革命におけるプロレタリアの同盟軍に關する問題に興味を持つ筈がない。」かういふ風に農民問題を無視することは、マルクス主義を端的に裏切るものだ、スターリンは教へてゐる。これと同時にスターリンは、農民問題がレーニン主義における眼目だといふ、ジノヴィエフの主張を論駁して、農民問題はプロレタリア獨裁に關する一般的な根本問題の一部であると力説してゐる。

(一) スターリン「レーニン主義の諸問題」第十版、三四頁。

ボルシェヴィズムは常に労働者階級と農民との同盟に多大の注意を拂ひ、プロレタリアの農民

指導の問題を、プロレタリア獨裁の根本問題の一つとして考察してきた。黨はその歴史の各種段階において、農民との色々異つた同盟形態を提唱し、農民に對し如何なる態度を採るかといふ、レーニンの三つのスローガンを、情勢に應じて色々に變へてきた。これについてレーニンとスターリンとは、農民勤勞大衆との同盟といふことは、右翼派が考へてゐるやうに、それ自身が目的ではなく、プロレタリア獨裁および社會主義建設に屬する一つの課題であると教へてゐる。右翼日和見主義は中農の二重性を理解せず、すべての農民を一樣なる大衆と見なした。農民に對し絶えず讓歩せよ、といふ右翼日和見主義の理論、農民の社會主義的改造のための闘争を事實上放棄すること、クラークは社會主義へ「轉生」するといふ理論は、なかんづく、かうした見方に依るものである。反革命的トロツキー主義も中農の二重性を理解せず、中農の一つの側面、小所有者といふ側面のみを見て、中農との同盟の可能性、中農を社會主義建設へ引き入れる可能性を否定したが、その結果トロツキー主義は、一國における社會主義勝利の可能性を否定することとなつた。トロツキー主義は農民をまるで「社會主義的本源蓄積」の源泉の如く考へ、植民地としか思つてゐなかつた。黨は、反革命的トロツキー主義、右翼日和見主義、「左傾」派と果斷なる闘争を行つて、レーニン、スターリンの政策を一貫して實現し、農民勤勞大衆を社會主義の方向に導き、

階級としてのクラークを撲滅し、第二次五ヶ年計畫中に階級を最終的に絶滅した。

レーニンとスターリンは民族植民地問題を深く研究したが、この問題も、プロレタリア革命およびプロレタリア獨裁の根本問題と聯關して、一段の發展を見たのである。この民族植民地問題も、第二インタナショナルによつて歪曲された。スターリンは次のやうに教へてゐる。すなはち、第二インタナショナルは、(イ) 民族問題を謂ゆる「文化民族」といふ狭い範圍に限つた。(ロ) 民族自決権といふ原則を縮限して、民族の文化自治權となした。(ハ) 民族問題をば、各民族の形式的平等といふ純法律上の問題として考究した。(ニ) 民族問題を資本主義の覆滅といふ一般問題と切離し、改良主義的に考察した、と。レーニン主義は民族問題を變じて、從屬國および植民地の被壓迫諸民族を、帝國主義の壓制から解放するといふ世界的問題となし、民族自決といふ概念を民族の完全なる分離にまで擴大し、民族問題はプロレタリア革命に基いてのみ解決されるといふことを教へた。レーニンとスターリンは、植民地從屬諸國における革命運動を重要視し、この革命運動が、プロレタリア革命の最も重要な同盟軍および豫備軍の一つである所以を力説した。

黨は、民族問題における反レーニンの偏向、強大國における排外主義やブルジョア國粹主義と

果斷なる鬭争を行ひ、ソヴェト聯邦における民族問題を解決し、各種民族の政治的平等のみならず、經濟上および文化上の平等をも保障した。スターリンは、單一なる國際的文化の形成へ至る途は、形式から云へば民族的で、内容から云へば社會主義的な文化の全面的な發展といふ道に通じてゐる所以を示して、民族文化の問題の辨證法を實に見事に展開してゐる。

レーニンとスターリンは、資本主義が自働的に崩壊するといふ理論に反對し、帝國主義の鎖が切斷されるためには、客觀的要因があるといふだけではまだ足りないといふと繰返し力説した。しかし帝國主義の鎖は切斷せねばならぬ。しかし、革命は單に革命的情勢からのみ生ずるものではなく、客觀的變局に主觀的變局が全體する場合に初めて發生する、すなはち、一舊來の政府を破壊する（又は破壊し始める）ほどに強力な、革命的大衆運動を率ゐる革命階級の能力が合體せねばならぬ。舊政府はこれを『追ひ拂は』なければ、何時まで経つても、危機の時代にさへ『倒れる』⁽¹⁾のではない。

(1)レーニン全集、第十八卷、二四五頁。

最後の敵對的構成態たる資本主義社會における階級鬭争は、社會主義革命へと、プロレタリア獨裁へと向つてゐる。第二インタナショナルの理論家共は、この社會革命の法則の普遍的性質を

認めない。例へばカウツキーは、マルクスの社會革命の法則は、ブルジョア革命の時代にのみ通用すると考へてゐる。カウツキーによれば、古代世界には社會革命はなかつたが、資本主義から社會主義へと移つて行くのも、資本主義的生産力の故障なき發展を伴ひ、單なるブルジョア民主主義を伴ふだけで、このブルジョア民主主義は、資本主義的生産様式を平和にすらすらと社會主義的生産様式の軌道へ移す奇蹟的能力を有してゐる。第二インタナショナルの指導者の理論と戰術が據つて立つ所は、社會革命の法則の普遍的性質を否定し、殊にプロレタリア革命の普遍性を否定する點にある。従來の社會革命にあつては、政權を握つた階級は一度も舊來の國家機關を破却したことはなく、これを改變して運用したにすぎなかつたが、プロレタリア革命は搾取者社會の舊來の國家機關を破壊して、新しい型の國家、ソヴェト權力を創設するのである。そしてこのソヴェト權力は、壓倒的大多數の國民のために眞の民主主義を樹立するもので、階級を絶滅し、社會主義を建設する武器である。かくの如くプロレタリア獨裁なるものは、人類全史における決定的な最重要な轉期に當るものである。それは人類の先史全體に梟をつけ、すべて従來の歴史とは原則的に異なる新しい一頁を人類史に開き、必然の王國から自由の王國への人類の飛躍を實現する。プロレタリア獨裁をいふ學説は、單に資本主義社會における階級鬭争の發展から引き出さ

れた根本結論ではなく、人類全体の歴史と歴史的認識から引き出された根本結論である。マルクス・レーニン主義の古典家たちは、この學說の世界史的意義を一度ならず力説した。故にこの學說はプロレタリアのイデオロギーたるマルクス・レーニン主義の樞軸をなすものである。プロレタリア獨裁はマルクス・レーニン主義における眼目である。これ故にまた、第二インタナショナルの理論家どもの最も狂暴な闘争は（戦前に、殊に戦後の時期に）階級闘争、革命、プロレタリア獨裁に關する、マルクス・レーニン主義の學說を非難攻撃する方向へ進んでゐたし、現に進んでゐる。彼等はプロレタリア獨裁の學說を否定して、これに對するにブルジョア民主主義を以てし、このブルジョア民主主義を以て、資本主義を平和に社會主義へと轉生させる基礎だと見なし、このブルジョア民主主義を以ては、プロレタリア獨裁に關するマルクス主義學說は、レーニンおよびスターリンに依つて展開され、より高い段階に引き上げられたが、反革命的トロツキー・ジノヴィエフ派や右翼日和見主義者からは、幾度も烈しい非難攻撃を受けた。

生産力と生産關係との矛盾した發展は、人類の活動とは關係のない、何か自働的な過程ではなく、むしろ階級社會における人間自身の法則的な活動を、階級闘争を表現するものである。この點から見て、歴史唯物論は、歴史における個人の能動的役割を否定する宿命論とも、また歴史の

法則性を見ずに、歴史を専ら偉人の活動から説明する非決定論とも相容れない。

歴史唯物論は、人間が自ら歴史を作ること、「人類史が自然史と異なるのは、前者が我々自身によつて作られるが、後者はさうではないといふ點にある」⁽¹⁾ことを力説する。「外ならぬ人間が歴史を作るのだが、しかし勿論、人間は何かの空想が告げるやうに、思ひついたまゝに歴史を作るのではない。すべて新しい世代は、この世代が生れた瞬間に、既成の物として存在する特定の條件に出合ふのである。」⁽²⁾歴史的必然性といふ理念は、決して歴史における個人の役割を否定するものではない。マルクス主義は、事物の客觀的狀態を分析するに當つて、嚴密な科學性を、大衆並びに個々の個人や集團や政黨等々の、革命エネルギーと結びつけ、彼等の創造力や創意と結びつける。

(1)「資本論」第一卷ロシア譯、一九三四年版、四一九頁。

(2)スターリン「ドイツの作家エミル・ルドウィヒとの會話」

マルクス・レーニン主義における最高度の科學的客觀性と最大の革命的能動性および行動性との、この注目すべき結合は、キロフがレーニングラード組織の廣汎な活動分子の面前でなした最近の演説で、深刻に且つ見事に述べたところである。「マルクス・レーニン主義とは、勤勞者が

敵を打ち破ることを教へる、唯一の眞なる科學である。それを修めずして、世界革命に勝利をとげることが不可能だ。」⁽¹⁾ 社會的發展を支配する法則の認識によつてのみ、個人は歴史の進行に能動的に加はり、歴史に影響を及ぼすことが出来る。この場合に、認識は歴史の偉大な原動力となる。歴史唯物論は、人間が常に歴史を作つてきたこと、「卓越せる人物」は歴史において「著明な役割」を果してきたし、現に果してゐることを認めると共に、眞の自由、個人の才能や能力の全面的な發揚は、共產主義の下でのみ可能であるとする。「從來存在した集合體——國家その他——の中では、個人の自由は、支配階級に屬する個人のためにのみ存し、支配階級の個人である限りでのみ存在した。」⁽²⁾ 個性の發達はこれまで「一面的な」もので、個性は無視され壓迫されてきた。社會主義のみが人類史上に初めて、人類の生活と發達のために原則的に異つた條件を創り出し、個人を奴隸制から完全に解放し、個人の才能や能力を全面的に發達させる。ソヴェト聯邦における社會主義建設の實踐は、人間を大衆的に改造し、個人の創造力を全面的に自由に發達させ、國民の下層の中から、多數の天才や英雄を養成教育する、さういふ過程を實例によつて示してゐる。

(1) キロフ「論文演説集」一七一頁。

(2) マルクス・エンゲルス全集、第四卷、六五頁。

尙ほ一言注意しておくが、歴史唯物論は歴史的意識の過程そのものも、歴史への人間の能動的な働きかけも、これを個々別々の個人、乃至人間一般の見地からでなく、階級闘争および政黨の見地から考察するのである。この點から云へば、世界を認識し、改造する最高の主體たるものは、唯一の科學的理論、マルクス・レーニン主義を驅使する、労働者階級の前進、すなはちボルシェヴィキ黨である。マルクス・レーニン主義の理論は、黨員の發意や能動性を最高度に發揮させることによつて、歴史の現實的な進行を客觀的に認識し、これに基いて、歴史に能動的に働きかけることを可能ならしめる。歴史の認識と變革との最高主體としての、労働大衆の組織者、教育者および前衛戰士としての、政黨のかうした役割は、マルクスおよびエンゲルス以後、レーニンとスターリンの著作に極めて深遠に且つ明晰に説いてある。

歴史上の偉人としての、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの役割は、何よりも先づ、彼等が人類史の客觀的進行を、他の誰よりも深く廣く遠く見貫いて、プロレタリアの闘争の戰略戰術を立て、數百萬の労働大衆の意志と意識とを組織し、彼等を資本主義との闘争へ向け、新しい社會主義社會の生みの苦みを短縮し、歴史的運動の進行を速めたといふその點にある。

六、上部構造の能動性と相對的獨立性

歴史唯物論に反對する最もありふれた「論據」の一つは、歴史唯物論を謂ゆる「經濟的唯物論」となし、社會的發展を經濟的要因からのみ説明して、その他の要因が歴史的發展の進行に及ぼす作用を認めない學說となすことである。かくして歴史唯物論は、ブルジョア社會に廣く普及した謂ゆる要因論、即ち、歴史的發展をいろいろな要因の作用から説明し、又はたかだか各種要因の共同作用から説明する理論の、一つの惡種とされる、つひ第一次世界大戰前に、修正主義者どもはかう主張したものだ。歴史唯物論は、社會發展における政治的要因や意識その他の上部構造の役割を否定し、經濟のみを歴史的發展の唯一の能動的原因と認め、上部構造はすべて受動的結果となす、と。修正主義者たちは歴史唯物論のかういふポンチ繪を作つてから、次に歴史唯物論を「批判し」、その「一面性」を指摘して、だから歴史唯物論は、これを流行のブルジョア哲學的社會學的學說（第一にカントやマッハの）を以て補足する必要があると主張する。

歴史唯物論は、この種の「理論」とは何人の共通するところもない。歴史唯物論は「要因」といふ概念そのものを社會的全體からの抽象と見做す。かういつた「理論」とは反對に、歴史唯物論は歴史的發展の綜合的見解を立て、究極において生産力の發展から發足して、歴史的發展にお

ける各々の要因（即ち社會形態）の地位と役割、それらの交互作用や相互依存關係の性質や限度、並びにこれらの相互作用する社會の各側面の根因そのものを規定する。かやうに歴史唯物論は、上部構造を單に經濟的土臺の受動的結果とのみは見ない。上部構造は經濟的土臺の上に起立しながら、それ自身の相對的獨立性と内的法則性とを有し、經濟上に逆の影響を及ぼし、その發展を形式づけ、促進したり遅らせたりする。

エンゲルスはブロッホ宛の手紙に次のやうに書いた。——「唯物史觀によれば、歴史において究極の規定的契機をなすものは、物質生活の生産および再生産である。私もマルクスも、これ以上のは嘗つて主張しなかつた。もし誰かがこの命題をば、經濟的要因が規定的な契機であるといふ意味に曲解するなら、その時は、この主張は一の無意味な抽象的な空語となる。經濟的狀態が基礎であるが、しかし上部構造の色々な契機、即ち階級闘争の政治的形態とその結果——勝つた階級が戦利の後に制定した憲法その他、法律形態、および當事者の頭腦におけるこれらの現實的闘争の反映、即ち政治上、法制上、哲學上の理論、宗教觀やこれが教義體系その發展も、歴史の闘争の進行に影響を及ぼし、多くの場合に特にその形態を規定する。歴史には、これらすべての契機の交互作用が行はれるが、その中であつて、結局は經濟的運動が必然的なものとして、

無限に多くの偶然性を通じて自己を貫いてゆく。」⁽¹¹⁾

(11) マルクス・エンゲルス二巻選集、ナウカ社版、第一巻、三八七―八頁

尙ほエンゲルスはシュタルケンブルク宛の手紙（一八九四年一月二十五日）に次のやうに指摘した、即ち、技術は多くの程度に科學の状態に依存してゐるのだが、これとは逆に、科學は一層多くの程度に技術の状態や必要に依存してゐる、と。「靜水學（トリチェリその他）は、十六世紀のイタリアで溪流を治水せんとする必要から起つた。電氣について我々が幾らか合理的なことを知るやうになつたのは、やうやく電氣の技術的應用が発見されてからであつた……政治的、法律的、哲學的、宗教的、文學的、藝術的等々の發展は、經濟的基礎に基いてゐるが、しかし、これらはみな相互に影響し合ひ、また經濟的基礎に影響を及ぼす。經濟的狀態のみが唯一の能動的な原因であつて、他はすべて受動的な要因にすぎないといふのではない。否、ここには、究極において自己を貫徹する經濟的必然性を基礎として交互作用があるのだ。」⁽¹²⁾

(12) 同上、三九六―七頁。

コンテ・ド・シュミット宛の手紙（一八九〇年十月二十七日）では、經濟への政治形態の逆作用に言及して、エンゲルスはかう指摘した——「經濟的運動は大體に自己を貫徹してゆくが、し

かし、經濟的運動が自ら作り出し、相對的獨立性を獲得した政治的運動からも、反作用を受けざるを得ない。」⁽¹³⁾エンゲルスは、國家權力が經濟的發展に及ぼす三種類の反作用をあげてゐる。それは同じ方向に作用して、經濟的發展を速めることもあれば、逆に作用することもあり、また經濟的發展を特定方向の障害に向け、他の方向へ追ひやることもある（この場合も結局は以上二つの場合の一つに歸する）。經濟の集中的表現としての政治は政治で、經濟的發展に影響を及ぼす。「政治權力が經濟的に無力であるなら、我々は一たい何んのためにプロレタリアの政治的獨裁を戦ひ取らうとするのか？ 暴力（即ち國家權力）もまだ一つの經濟力である。」⁽¹⁴⁾

(13) 同上、三九一頁。

(14) 同上、三九五頁。

政治闘争は構成態の交代のために決定的な意義を有してゐる。歴史唯物論は、經濟的發展における政治法律形態の絶大なる意義を力説し、同時に（第二インタナショナルの理論家たちがやるやうに）政治を經濟から切り離すことに反對する。政治形態はもちろん一定の獨立性を有し（その限界は矢張り經濟によつて決定される）、經濟的發展そのものにとつて決定的な要因であるが、しかし、その法則性は結局は經濟的發展の法則性によつて規定される。國家と法律は、階級社會

においてのみ、經濟的發展の特定段階に發生し且つ存在し、支配階級のために彼等の利益擁護の武器として役立ち、被搾取階級を組織的に壓迫する機關となる。經濟的發展と共に、階級闘争およびその形態の歴史的發展と共に、國家形態および法律も變化し、發展する。後者は經濟的發展に反作用を及ぼすとしても、それ自身は經濟的發展の後を追ふので、この意味では獨立した歴史を持たない。同じことは、その他の上部構造（宗教、哲學、藝術等々）についても云へる。社會的意識の諸形態は、結局は經濟的發展によつて規定され、階級社會ではイデオロギーは階級的性質を帯び、支配階級のイデオロギーが、社會における支配的イデオロギーである。イデオロギー諸形態は意識における存在の反映であり、そしてこの反映は、敵對的構成態においてさうであるやうに、不完全な、歪められたもの、神秘的空想的（例へば宗教）なものであることもあれば、プロレタリアとその前衛たる共産黨の意識のやうに、正しい眞に科學的なものであることもある。ブルジョア・イデオロギーとは違つて、プロレタリアのイデオロギー（マルクス・レーニン主義）は、存在および歴史的發達の法則の正しい反映である。このイデオロギーは大衆の間に普及して、自ら批判的な革命力となり、土臺の上に反作用を及ぼし、社會的發展の進行を速める。イデオロギーが土臺に及ぼす影響は二様である。それは反動的な役割を演じて、生産力の發達を

阻害し、既に餘命を終つた生産關係を永久化するか（ファシズムのイデオロギー全體はその明かな實例である）それとも革命的な役割を果して、新しい生産様式の成熟と發展を強く促進するかである。

社會主義經濟今後の建設、および社會主義の完成のために果すイデオロギー上部構造の役割、特に文化革命の役割は極めて大きい。勤勞大衆の再教育、人々の意識に残つた資本主義殘滓の清算、コルボズ農民の意識の社會主義的改造といふ課題は、今後の發達に關する根本的な政治的課題である。社會主義的勞働規律の制定、技術の修得、勤勞大衆の間への科學および文化の普及、これは社會主義建設成功の必須條件である。ソヴェト聯邦の下における意識の役割は極めて大きい。スターリンは最初のアメリカ勞働代表との會談に於て指摘した、——社會主義の下では、プロレタリアの意識は社會的發展の巨大なる原動力となる。「かかる場合に、わが國工業の原動力たるものは何か？ 工場仕事場がわが國では國民全體のもので、資本家のものでないこと、工場仕事場を管理するのは、資本家の子分ではなくて、勞働者階級の代表者であることである。勞働者が資本家のために働かず、彼等自身の國家のために、彼等自身の階級のために働くといふ意識、この意識こそ、わが國工業を發展させ改善する巨大な原動力である。」

(一) 「諸問題」第十版、一八四—一八五頁。

ソヴェト聯邦では、プロレタリア國家やソヴェト法等々の如き^(一)、構造が絶大な役割を果し、嵐の如き社會主義的發展を能動的に促進し、社會主義建設の有力な武器となつてゐる。例へば、一九一八年に制定されたソヴェト憲法(一つの上部構造)は、當時作り出されたソヴェト權力の基礎を確認し、「ソヴェト國家が社會主義の方向へと進んでゆく將來の發展の一般的見透し」^(二)を記したもので、それは社會主義のための闘争の旗であり、國民經濟の向上を保證し、大衆の物質的福祉および勤勞者の文化の發達を確保したものであつた。しかるに、ソヴェト第七回大會にかけて、「わが國土の社會經濟的基礎は根本的に再建せられ、社會主義の國に改造され」^(三)、生産手段の九六%は、既に國家やコルホズや協同組合に歸屬し、僅かに四%だけが私有者のものであつた。ソヴェト聯邦におけるかくの如き根本的變化は、ソヴェト憲法にも反映せざるを得ず、この點からみて、一九一八年の憲法の個々の部分は時代後れとなつた。「ところで、フェルヂナント・ラッサールの適切な表現をかりれば、國家の根本法たる憲法は、『そのほかのすべての法律や法制を必然的に作り出す作用』でなければならぬ……そこで憲法が國內の階級勢力の交互關係を正しく反映する時は、それは社會制度強化の有力な武器となる。」^(四)ソヴェト第七回大會の決議に依つ

て、わが國憲法は社會主義財産の全勝と合致し、ソヴェト聯邦における階級勢力の現状と一致するに至り、かくして社會主義國家および社會主義建設の一段の強化に役立つ作用力となつた。これと同様に、第二回コルホズ農民突撃大會で採用された農業アルテル規約も、コルホズ制度の一大進展を表現したもので、ソヴェト聯邦におけるコルホズ發展の經驗全體の最高の總計であるが、それ自身が今度は、コルホズ制度のより以上の發展強化のための闘争、およびコルホズ大衆の豊かな文化生活への前進運動の重大の要因となつてゐる。

(一) モロトフ「ソヴェト憲法の改正について」一九三五年、九頁。

(二) 同上、一四。

(三) 同上。

共產主義の最高階級では、「ブルジョアの權利」の殘存物の最終的な消滅と共に、國家、法律政黨、宗教といふ如き上部構造も消え失せ、その他すべての上部構造(科學、藝術、道德、生産管理機關等々)も本質的に變化する。

第八章 レーニンおよびスターリンと 歴史唯物論の發展

マルクスとエンゲルスの發見した唯物史觀は、レーニンおよびスターリンの著作においてさらに一段の發展をとげた。歴史唯物論の發展におけるレーニンの段階、並びにスターリンに依るこれが繼承發展の基底をなすものは、先づ第一に、現下の時代における條件と特殊性である。資本主義が最後の帝國主義的發展段階にはいり、そのために資本主義社會のあらゆる生活領域に重大な變動が起つたこと、資本主義の一切の矛盾が未だ曾つて見ないほど深刻となり、尖鋭化したこと、各種階級の勢力關係および戰術が變つたこと、これにつれてプロレタリア階級闘争の形式と方法も變つたこと、諸種の事件が目まぐるしく進展して、プロレタリアの戰略戰術が非常に急速に變更されたこと、最後に、これは最も重要な點だが——新しい型の政黨（ボルシェヴィキ黨）が創成されたこと——以上すべての新しい事實や事件は、當然に、全體としてのマルクス主義理論、殊に歴史唯物論の内容を一段と豊富ならしめざるを得なかつた。マルクス主義が死んだドグ

マでなく、生活における生きて指針となるためには、これらすべての新しい事實や事件を理論的に究明せねばならなかつた。レーニンは、マルクスとエンゲルスが立てた歴史唯物論の根本原理から發足して、現下の時代の新しい條件と特殊性に應じて、歴史唯物論の根本概念をすべて一層發展させ、掘り下げてゐる。この點から見て、歴史唯物論におけるレーニンの段階の特徴をなすものは、先づ第一に、帝國主義およびプロレタリア革命の時代、プロレタリア獨裁の樹立強化の時代、社會主義建設のための闘争の時代の、極めて豊富な材料に基いて、歴史唯物論を發展させたことである。レーニンとボルシェヴィキ黨の當面せる主要課題、即ち資本主義的構成態を暴力革命によつて共產主義的構成態に取り代へるといふ課題が、歴史唯物論におけるレーニンの段階を根本的に規定したのである。歴史唯物論の發展におけるレーニンの段階の最も深い基底に當るものは、先づ第一に労働者階級の革命的戰術であつて、この戰術の指向するところは、資本主義的構成態を革命に依つて社會主義制度に取り代へることであつた。歴史唯物論におけるレーニンの段階は、帝國主義とプロレタリア革命の時代を最高度に普遍化し、反映したものであり、同時に、人智一切の積極的成果の最高度の總和であり、世界史の教へるものを残らず取り容れて、これから徹底した結論を引き出したことである。

レーニンとスターリンは、ブルジョア社會學學說と一步も假借せずに関ひ、ブルジョア社會學を何らかの形で労働者階級の中に持ち込まうとするものと不斷に闘つて、歴史唯物論を發展させた。資本主義發展の向上期には、ブルジョア社會學學派は何らかの程度に唯物史觀の要素（大抵いは觀念論の）を含んでゐて、封建制度に反對し、或る程度に進歩的役割を果したのであつたがブルジョアジが政權を握り、労働者階級が初めて自主的な運動を起すと共に、大抵いにブルジョア社會學思想の發展法則は、歴史唯物論と闘ひ、これを「論駁し」、ブルジョア秩序の永久不變性を論證すべき、當面緊要なる必要と欲求によつて決定されるやうになつた。ブルジョア社會學はそのすべての根本問題から云つても、歴史唯物論とは正反對の立場を取つてゐる。それは、社會的歴史的諸科學における唯物論の原理に對するに、歴史觀念論の原理を以てしてゐる。社會發展の根本原因は人智の自己發展であるとは、夙にオーグスト・コントが主張したところであるが、社會學上の謂ゆる心理學的潮流に屬する數々の學派も、現代社會において明らかなる觀念論的立場を占めてゐる。地理的環境か、生物學の法則か、又は各種の要因の交互作用に、社會發展の法則性を求めるところの、社會學上のいろいろな自然主義的流派又は折衷主義的流派はどうかと云ふに、そのすべても形と程度こそ違へ、結局は觀念論に陥つてゐる。ブルジョア社會學には、お

よそ物質的生産といふ概念は見られない。

次にブルジョア社會學の特徵は、辨證法的發展の原理に反對してゐて、明らかなる反歴史主義に陥つてゐることである。ブルジョア社會學者が進化と言ふ場合には、いつも進化といふことを、平和な漸次的進化、量の除々の増減といふ意味に解してゐる。従つてブルジョア社會學には、社會的經濟構成態の學說も取扱はれなければ、歴史の一般法則と特殊法則との統一の正しい解決も見られない。ブルジョア社會學の組立てる一般法則は、すべての民族、あらゆる時代を通じて一様に通用するものである。かういふブルジョア社會學の抽象性と繋がつてゐるものに、もう一つの性格的な特徴がある。即ち、圖式主義、作爲的な社會學的構想、主觀主義等々がこれである。すべてブルジョア社會學は、マルクス・レーニン主義の階級闘争論および革命論に反對し、これに代ふるに階級協調とか階級平和等々の「理論」を以てする。

最後に、次の如きブルジョア社會學の最も重要な特徴にも立ち入つておかう、歴史唯物論が社會學的分析の起點となすものは、究極において社會の經濟的構造であるが、ブルジョア社會學はこの歴史唯物論に反對し、社會現象の分析に當つて、結局は個人と個人の性質から發足する。たとへブルジョア社會學内部のいろいろな流派が、社會學における原子論的な個人主義的見地を克

服せんとして、個人の性質ではなく、社會的全體の中に、社會現象の質的持殊性を見出さうとしてゐるとしても、歴史唯物論を「論駁」すべき差し追つた欲求から、いつの間にか反轉して、個人を社會學的分析の起點として取上げる。社會は個人の集合體と見られ、そして個人の關係は、第一次的な社會的組成體としての心理關係に歸せられる。

以上が、十九世紀初頭以後におけるブルジョア社會學の理論的發展の主要な持質である。帝國主義の時代と資本主義の一般的危機の時代は、ブルジョア社會學に新しい轉換を惹起せざるを得なかつた。この轉換の歸するところは、要するに、社會科學と自然科學とを原則的に對立させる傾向が益々強くなり、歴史の法則性を否認して、それを英雄の「創造的」意志によつて説明し、公々然と反歴史主義に向ひ、すべて進化思想を否定し、人種論を説教することである。この人種論が使命とするところは、一方では、「祖國」ブルジョアの帝國主義的政策、第一番に反ソヴェト聯邦戰爭の準備を理由づけ、他方では、社會の階級的分化の避けがたいことを、人種上の差別と人口各層の人種的劣等性から説明することである。

歴史唯物論は、以上すべてのブルジョア社會學的學說との鬭争裡に發展し、そしてこれは殊に重要なことであるが、ブルジョア社會學說を何らかの形と程度に労働者階級とその黨に滲み込ま

せやうとする潮流と闘ひながら發展したのである。ありとあらゆる社會的歴史的修正主義學說および社會民主主義學說は、歴史唯物論の旗幟を掲げてゐるか、さうでなければ、歴史唯物論を一層發展させると稱してゐるが（第二インタナショナルの「理論家共」の「歴史唯物論」、トロツキの歴史觀念論と主意說、メンシエヴィキのおよび中央派的學說、ボグダノフその他の機械論的社會學、歴史唯物論のメンシエヴィキ的觀念論的修正と機械論的修正等々）、そのすべては、實は流行のブルジョア社會學的學說が労働者階級とその黨に色々な形で反映したものであつたし、今でもまたさうである。レーニンとスターリンとは、これらすべての反マルクス主義的潮流を粉碎して、歴史唯物論の根本命題を一層發展させ、且つこれを深めたのである。

レーニンとスターリンは、すべて反マルクス主義的潮流や偏向と闘ふ際に、マルクス主義理論の階級性、その黨派性を力説してゐる。この黨派性は同時に最高の客觀性である。レーニンは曾つて次の如く教へた。「嚴格なる黨派性は、高度に發達せる階級鬭争の道伴れであり、且つその結果である。否、むしろ階級鬭争を公然と廣く行ふためには、嚴格なる黨派性を發展させることが必要である。」⁽¹⁾ 道德上、宗教上、政治上、社會上の任意の文句や言明や公約の蔭に、いづれかの階級の利害を採し出すべきである、とレーニンは幾度となく指摘してゐる。「『マルクス主義

的』に……物を見るときは、『階級闘争の見地から』見ることだ。(三)レーニンは革命運動を始めた最初の日から、同時に最高度の客観性であるところの、プロレタリア黨派性の正しい理解から發足して、ブルジョア客観主義に對しても主観主義に對しても、終始一貫闘争を續けてきた。ストルヴェの客観主義に際立つて見える點は、先づ第一に、極端な抽象性、「大學教授風」の態度、「あらゆる特定の國、特定の歴史的時期、特定の階級」に超然たらんとする希望だ、とレーニンは指摘した。實際、ストルヴェの客観主義はどこからどこまでブルジョア的だ、とレーニンは言つてゐる。客観主義者は「克服しがたい歴史的傾向」を云々し、「或る系列の事實の必然性を論證して、いつもこの事實を辯護する立場に迷ひ込むが、」これに反して唯物論者は階級的相剋を剔抉して、自己の取るべき見地を定める。唯物論者は過程の必然性を指摘するにとどまらず、そもそも如何なる階級がこの必然性を規定するかを解明する。かくて唯物論者は客観主義者よりも徹底しており、己が客観主義をより深遠に、より完全に立て通す。「唯物論は謂はば黨派性を含み、事件を評價する毎に、端的に公然と特定社會集團の見地に立つことを義務とする。」(四)客観主義者の極端な抽象性は、實は現實性に對する受動的な觀照的態度を意味し、事件を觀念論の立場から評價するものである。といふのは、客観主義者は「一般的に」論斷し、先天的論斷の「圖式」から、「一

般的な抽象的命題」から發足して、具體的現實性の具體的な究明から發足しないからである。かういふ「狹隘な客観主義」は、歴史的過程を「一般的に」取扱つて、階級闘争論の見地から考察しないが、それはストルヴェの場合に、マルクスの國家學說の偽造となり、國家は「秩序の組織」であるといふ主張となり、歴史の抽象的な一般法則の考案となつてゐる。さらにレーニンは、この種の客観主義と同じく主観主義に對しても終始一貫闘つてきた。すでに一八九四年にレーニンは、ナロドニキの社會學學說、彼等の「主観的方法」、歴史における個人の役割に關する主観的觀念論的學說に對し、一掃的な批判を加へた。ナロドニキと意見の分れる最も深い原因ともいふべき點は、ナロドニキが社會經濟的過程を研究して、「通常あれこれと道德的な結論を下すところにある。」(五)

(一)レーニン全集、第八卷、四一二頁。

(二)第十七卷、一三六頁。

(三)第一卷、三〇四頁。

(四)第一卷、二七五、二七六頁。

(五)第三卷、四六九頁。

ナロドニキは具體的な現實性の具體的な研究から始めずに、道德規範とか當爲とかといふ立場

から、即ち主觀主義的に歴史的事實を取扱つた。曾つてブルードンは、商品經濟を正義といふ自分の理想に則つて改造しようとしたが、ロシアの主觀主義者の方法は、丁度このブルードンの方法に似てゐる、とレーニンは言つてゐる。ナロドニキは彼等自身の要求を基礎づけるのに、「純粹正義」といふ抽象的原理を以てして、一定の利害を有する階級の實在的な要求を以てしなかつた。

ナロドニキと後世の社會革命黨の政治的方針および戰術は、かうした觀念論的社會學に基いて立てられたものである。「我が國のマルクス主義は、マルクス主義の最も有害なる敵たるナロドニキ（人民の意志派その他）との闘争のうちに發展し、彼等の觀念的原理を粉碎し、政治闘争の手段と方法（大衆黨の組織と相容れない個人的テロル）を粉碎することによつて強化された。」⁽¹⁾

(一) 中央委員會議決集「宣傳運動に關する決議文」、一九三五年六月十四日「プラウダ」紙。

メンシェヴィキ、殊にブレハノフとの闘争においても、レーニンは主觀主義に對する批判を續け、いろいろな歴史的事件の評価に對する、メンシェヴィキおよびブレハノフの抽象的な無黨派的態度を指摘して已まなかつた。

レーニンはブレハノフの黨綱領草案を批判して、四つの根本的な缺點をあげてゐる、(イ)多

くの問題の立て方が極めて抽象的なこと、(ロ)特にロシア資本主義に關する問題が曖昧にされてゐること、(ハ)プロレタリアと小生産者との關係が一面的に間違つて述べてゐること、(ニ)綱領の中に絶えず過程の説明を述べやうとしてゐること。その後もレーニンはブレハノフおよびメンシェヴィキとの闘争において、いつもかうした抽象的形式主義を強調し、その色々な方面に注意を與へてゐる。レーニンは小冊子「一步前進、二步退却」の中で、ブレハノフの抽象的立場を指摘して、次のやうに書いてゐる——「同志ブレハノフは後に自分の思ひ違ひを悟つて、如何にも滑稽で憂鬱さうであつたが、この滑稽で憂鬱な思ひ違ひがどこから來てゐるかと言へば、具體的な問題をその全具體性において検討するといふ、辨證法の根本命題を犯してゐる點にある。」⁽¹⁾「ロシアにおける資本主義の發達」第二版の序文に、レーニンはブレハノフをはじめとするメンシェヴィキの性格的特性について述べ、この特性は、具體的な問題に對する解答をば、わが革命の根本的な性格に關する一般的眞理の單なる論理的發展に求めて、各種階級の狀態と利害に關する具體的分析にこれを求めない點にあると云つてゐる。かういふ抽象的な態度を稱して、レーニンはマルクス主義を卑俗化するものだ、まるで辨證法的唯物論を愚弄するものだと言つてゐる。メンシェヴィキに見られるこの種の抽象的態度は、マルクスの階級闘争論を放棄するもの

であり、従つて「メンシェヴィキのマルクス主義は、ブルジョア自由主義の寸法で裁ち直されたマルクス主義である。」「そもそも如何なる階級の利害が、そして所興の時期に優勢なる如何なる利害が、各政黨とその政策の本質を決定するかといふことを、諸君が示さなければ、諸君は實はマルクス主義を適用してゐるのではなく、諸君は實は階級闘争の理論を放棄したのだ。」^(三)

(一) レーニン全集、第六卷、二九六頁。

(二) 同上、第十一卷、二七八頁。

メンシェヴィキの抽象的立場は、マルクス主義の階級闘争論を否定するものであつて、その結果は、現實性に對して觀照的な宿命論的態度を採ることとなる。レーニンはロシア社會民主労働黨第三回大會の決議文とメンシェヴィキ大會の決議文とを評して、次のやうに書いてゐる——「一方の決議文は積極的闘争の心理を表現し、他方の決議文は消極的見方の心理を表現してゐる。一は生きた活動に懇へ、他は死んだ議論に懇へてゐる。」「新イスクラ派に依る思想の敘述法を見ると、辨證法の理念を解しない舊唯物論に關する……マルクスの批判が思ひ出される。」「新イスクラ派は、彼等の眼前に起つてゐる闘争の過程を可なり記述し、説明することは出来るが、この闘争に對する正しいスローガンは全然與へることが出来ない。」「彼等は、革命の物質的條件を

認知し、先進階級の先頭に立つた黨が、歴史上に演じ得るし、また演ぜねばならぬところの、能動的で指導的な役目を無視して、唯物史觀を辱かしてゐる。^(一)」「メンシェヴィズムの危機」といふ論文では、レーニンは次のやうに指摘してゐる——メンシェヴィキは小ブルジョア知識階級の本質たる「受動的な精神」を説教し、「革命闘士の唯物論」に代ふるに、「反動の前に平身低頭する大學教授の客觀主義」を以てする。^(二)レーニンはメンシェヴィキ的客觀主義を批判して、それが觀念論へと移りゆくことを指示してゐる。例へば「如何に革命を書くべからざるか」といふ論文に、レーニンはかう書いてゐる——「プレハノフとメンシェヴィキにこれを見るやうに、『責任』内閣と『無責任』内閣、『國會』専制内閣等々を抽象的法制的に比較對照するだけに留まることが、マルクス主義者には全く許されないことだ、これは自由主義的な觀念論的論斷であつて、プロレタリア的な唯物論的論斷ではない。^(三)」さらに「政治的危機と日和見主義的戦術の失敗」といふ論文には、次のやうに書いてある——「政權獲得の問題では、メンシェヴィキは「小市民的な觀念論的」見地に立ち、「プロレタリア的な唯物論的」見地には立つてゐない、と。^(四)

(一) レーニン全集、第八卷、四九頁、五一。

(二) 第十卷、一八七頁。

(三) 第十一卷、六〇頁。
(四) 第十卷、三六頁。

ロシアのメンシェヴィズムとの闘争と同時に、レーニンは國際的修正主義や中央派とも、ローザ・ルクセンブルク主義とも終始一貫して闘争を續けた。レーニンは修正主義の社會的歴史の見解の特徴として、マルクス主義の眞の基礎、即ち階級闘争の學說の否定といふことをあげてゐる。^(一) 彼等は階級闘争の學說に代ふるに階級協調の理念を以てしたのである。修正主義者が社會主義の科學的基礎づけの可能性を否定し、社會革命およびプロレタリア獨裁に關するマルクスの理論に躍氣となつて反對し、社會民主黨を變じて、民主主義的經濟政策によつて社會を改造せんとする政黨となしたことも、右の如き修正主義の特徴と關係がある。マルクス主義の見地からすれば、「革命的階級闘争こそ歴史の眞の起動力であり、改革はこの闘争の副産物である」と、レーニンはすでに一九〇六年に書いてゐる。「ブルジョア哲學者の學說によれば——とレーニンは續けて云つてゐる——進歩の起動力をなすものは、あれこれの制度の『不完全』なることを悟つた一切の社會分子の連帶精神である。第一の學說は唯物論的であり、第二の學說は觀念論的である。前者は革命的であり、後者は改良主義的である。」日和見主義の根本誤謬は、「歴史の唯一の

眞なる起動力としての、社會主義的階級闘争論に代ふるに、事實上、『連帶的』『社會的』進歩といふブルジョアの理論を以てしてゐる」その點にある。^(二) レーニンとスターリンが、トロツキーの社會的歴史の見解、彼の政治および戰術と、長期に亘つて闘争を續けてゐることは注目すべきである。メンシェヴィズムの一亞種としてのトロツキー主義の社會學の見解の特徴は、主觀主義と觀念論的主意説であり、具體的現實性の、階級勢力の客觀的交互關係の嚴密なる觀測から發足する能力がなく、またさうすることを欲しなかつたことであり、實在的な飛躍を「論理的」飛躍に代へ、革命運動における大衆と黨組織の役割と意義とを無視することである。

(一) レーニン全集、第十二卷、一八七頁參照。
(二) 同上、第九卷、三八四頁。

特に注目を要するのは、マルクス主義の哲學、わけても歴史唯物論におけるプレハノフの地位である。プレハノフは歴史唯物論の見地に立ち、マルクス主義の敵や曲解者のあらゆる攻撃に對して歴史唯物論を擁護したが、しかし哲學科學としての唯物辯證法をどことなく輕んじ、唯物辯證法がよく飲み込めてゐなかつたこと、幾度か辯證法的唯物論から外れて、これが彼自身の内的論理から來たものであり、且つ彼のメンシェヴィズムの哲學的基礎をなしてゐたことは、歴史唯

物論の根本命題に對する彼の理解の程度にも影響せざるを得なかつた。プレハノフには、處々に歴史唯物論からの本質的な逸脱が見られる。彼の歴史唯物論の特徴は、どことなく抽象的で直觀的なところがあり、歴史唯物論の根本命題をなすところの、社會的經濟的現象の學說が缺けてゐることである。種々雑多な社會的事件の評定に對する、プレハノフの形式論理學的な圖式主義的態度、ことにロシア革命の推進力と見透しに關する彼のメンシェヴィキ的な評價も、かうした彼の抽象的な觀方と關係がある。

プレハノフは社會の發展における具體的段階を把握することを能くしなかつたが、これと同時に、社會的發展における内的法則性の役割を十分正當に理解しなかつた。即ちプレハノフは、生産力の發展を結局地理的還境の影響から説明したのである。プレハノフが、人類先史（原始状態を除く）の運動法則としての階級闘争の役割と意義とを無視し、歴史唯物論の革命的内容を抜き取つたことも、彼のかうした「地理的偏向」とつながつてゐる。プレハノフの根本誤謬は、その著書「マルクス主義の根本問題」における五項式に集中的に表現されてゐる。土臺と上部構造との關係を、プレハノフは圖式的に次のやうに説いてゐる。一、生産力、二、生産力に制約された經濟關係、三、所與の經濟的土臺の上に起立する社會的政治制度、四、一部は直接經濟によつて

規定され、一部は經濟の上に起立する社會的政治制度全體によつて規定されるところの、社會人の心理状態、五、この心理状態の特性を反映する各種のイデオロギイ。この五項式の根本誤謬は、要するに、歴史唯物論の根本範疇を相互に切り離し、生産力の發展形式としての生産關係の能動的役割を理解せず、社會の發展における階級と階級闘争および社會革命の役割を無視し、經濟の集中的表現としての政治（國家）の役割を曖昧にし、そして最後に、社會的發展におけるイデオロギイの能動的役割を理解してゐないことである。

レーニンはプレハノフのメンシェヴィズムとの闘争に當つて、プレハノフが徹底した歴史唯物論から逸脱してゐる根本的な點を繰返し強調したのであつた。レーニンは、マルクスとエンゲルスが立てた歴史唯物論の根本命題から發足して、歴史唯物論をより高度の段階へ引き上げた。レーニンに依る歴史唯物論の發展は、次の如き根本的な方向を進んでゐる。レーニンは、歴史唯物論を辨證法的唯物論から切り離す修正主義者と闘ひ、歴史唯物論と辨證法的唯物論との緊密不可分なる聯關と統一とを特に執拗に力説してゐる。レーニンは、辨證法的唯物論と歴史唯物論との内的聯關がどこにあるかを教へ、社會現象においても同じ唯物論を貫いてゆかねばならぬと言つてゐる。これと關聯して、レーニンは歴史唯物論の根本問題、即ち社會的意識と社會的存在との

關係如何といふ問題を天才的に定義してゐる。この問題は、一方では、歴史唯物論をあらゆるブルジョア社會學學說から劃然と區別し、他方では、歴史唯物論の一切の範疇の順序と内的相互關係を理解するために、その發足點となるものである。レーニンは歴史觀念論との鬭争において、歴史唯物論の根本問題に關するマルクスの學說を敷衍しながら、社會的存在の物質性と客觀性がどこにあるか、社會的存在が社會的意識から獨立してゐるといふことが、どの點にあるかを指示してゐる。レーニンは、社會的存在と社會的意識との統一の問題を適確深遠に提出し、且つ解決して、歴史唯物論の根本概念、即ち構成體に關する學說をさらに一層發展させ深めたのである。この問題に對するレーニンの理論的功績は、第一に、各構成體の歴史、その特殊な法則性、個々の國と歴史上の各時代におけるその特性を具體的に研究したこと、第二に、經驗的事實の研究に基いて構成體の一般的理論を研鑽したことである。かうした經驗的事實の研究、各國における個々の構成體の具體的發展方向の研究に當つて、レーニンは何よりも先づ、各國ことにロシアにおける資本主義の異つた型の發展法則の研究に主眼點を置き、農奴制度の下におけるロシア資本主義發展の特殊な方向を研究し、それと同時に、ロシア專制政治の階級的性質、ロシアにおける封建制度發展の方向と特殊性とを明かにしてゐる。レーニンはマルクス以後の資本主義の發展法則

を發見し、資本主義の發展における帝國主義的段階を摘出し、資本主義の不均等なる發展法則を定式づけ、これに基いて、一國における社會主義建設の可能性を基礎づけた。過渡期の研究にも多大の注意を向けて、それぞれ異つた生活様式の相剋、各階級の相互關係、一國社會主義建設の具體的方向を研究し、新しい社會主義的生産力と生産關係との分析、過渡期における經濟と政治との關係、プロレタリア獨裁、文化革命の問題等々にも多くの注意を注いでゐる。

各々の構成體に關するレーニンの分析は、資本主義構成體の法則性と過渡期の問題の研究といふだけにはとどまつてゐない。この根本課題の外に、レーニンは、原始共產社會、奴隸制構成體に封建制構成體の法則性と方向を明かにしてゐる。豊富な經驗的事實の研究に基き、ことに資本主義構成體を過程期の研究に基いて、構成體に關する一般的理論を作り上げ、構成體の古典的な定義を與へ、同一の構成體における各種の發展段階（例へば原始共產社會の發展段階、十七世紀から二十世紀に至るロシア專制政治の進化段階、資本主義の發展段階等々）に關する學說を作り上げた。マルクスの個々の言說から發足して、生活様式の學說や、その交互關係および鬭争の理論を展開してゐる。さらに土臺と上部構造に關するマルクスの學說を敷衍して、各種の構成體ことに資本主義時代と過渡期における生産力と生産關係の分析を與へ、これと同時に、經濟的發

展における上部構造形態の役割と意義とを明かにしてゐる。殊に注目を要するのは、過渡期における政治と經濟との交互關係が、従前の構成態とは原則的に異なることをレーニンが力説してゐることで、意識性と自然生長性との學說によつて、理論闘争の意識と役割とを基礎づけてゐる點にも注目すべきである。さらにレーニンは構成態の發展法則を研究して、人類先史（原始共產社會を除く）の發展法則としてのマルクスの階級闘争論を發展させてゐる。レーニンは「偉大なる創意」といふ論文で、階級に關する明確深遠なる定義を與へ、階級闘争の諸形態、各種階級の交互關係、階級闘争の戰略戰術を解明してゐる。これと關聯して、レーニンは社會革命の理論を作り上げ、社會革命の前提條件、ブルジョア革命と異なる社會主義革命の特殊性、ブルジョア民主主義革命が發展して社會主義革命へ轉ずるといふ問題、國家やプロレタリア獨裁の問題等々を解明した。レーニンは、プロレタリア獨裁の國家形態としてのソヴェト權力を發見した。レーニンが歴史唯物論を黨派的科學として取扱ひ、歴史唯物論のあらゆる根本問題についてこの立場を守つてゐることは、歴史唯物論の問題に關する彼れの研鑽の本質的特徴をなすものである。レーニンは二戰線の闘争を續けて行つた。戰闘的黨派性と二戰線における闘争とは、歴史唯物論の發展におけるレーニンの段階的特徴を判然と表現したものである。歴史唯物論は、レーニンによつて

プロレタリアの革命的闘争の理論的基礎として展開され、人類の先史からの直接革命的な脱出、および社會主義制度の建設を基礎づける理論とされた。これを要するにレーニンは、構成態の學說をさらに一段と完成し、構成態の法則性と各構成態の革命的變遷を研究するといふ線に沿つて、歴史唯物論を發展させたのである。

スターリンに依る歴史唯物論の一層の發展も、これと同じ方向を進んでゐる。レーニンの場合と同じく、スターリンの著作でも、歴史唯物論は先づ第一に、帝國主義の崩壊と社會主義建設を基礎づける理論として發展されてゐる。レーニン以後、スターリンは、現代資本主義の矛盾、資本主義發展の不平等性、資本主義の一般的危機、各種階級の勢力關係および階級闘争形態の本質的變動、資本主義の革命的覆滅の方途と條件等々について、深遠なる分析を與へてゐる。スターリンは一國社會主義建設に關するレーニンの學說をさらに發展させ且つ深めてゐる（資本主義發展の不平均性の法則、鎖の切斷の問題、社會主義建設の内外の可能性と條件に關する問題等々）。歴史唯物論の根本範疇を、スターリンはこれに基いて發展させ、理論と實踐におけるあらゆる種類の日和見主義的並に反マルクス主義的潮流と闘つてゐる。スターリンは社會主義の根本法則の問題を天才的に提起し、それに関する一切の根本問題を究明し、マルクス、エンゲルス、レーニン